國文朗讀法

まへがき

明治の大御代に、外山正一・坪内雄藏・伊澤修二・三宅米吉・關根正直らの諸先生が、朗讀法の研究を唱道されたのは、久しい前からの事である。不肖が朗讀法の研究を特に教育界に促してからも、はや幾年か過ぎ去つた。

國民教育が新しく我が國に興つて以來、やがて半世紀。教育事業は益々盛になつて、現に初等教育を受けてゐる者が無慮七百萬、中等教育を受けてゐる者が廿萬以上ある。さうして國語教授は、實に國民教育の重要な部分を占めてゐる。國語教授は文字に偏つてはならぬ。言葉を練り磨く國文朗讀の方法が發達しなければ、國語教授の成績は十分に擧がらないのである。また宗教における朗讀は、布教と儀式とに深い關係がある。近世に至つては、文明の進歩と共に社交が繁くなつて、世の種々の式辭朗讀が多くなつて來た。特に立憲政治の下においては、市町村會から帝國議會に至るまで、諸般の朗讀が行はれる。教育や宗教や社交や政治などにおいて、朗讀をおろそかにしてはならぬ事、固よりである。

更に朗讀は、談話や演說、その他すべてエロキューションの素養として大切である。東京の人が談話に巧なのは、江戸の昔から通俗の讀物を嗜んで讀み來つた事が、その一大原因であると云ふ。今後は東京語を我が國の標準語として全國にひろめるため、學校では勿論、一般の讀書界でも、口語文朗讀の風が盛に行はれることを望まねばならぬ。

更に又朗讀は、國文の趣味をあぢはふために缺くべからざるものである。文章を巧に朗讀する事も、また之を聽く事も、實に感興の深いものである。文章は默讀しても意味が分らぬでは無いが、しかし之を朗讀しなければ、全く文章の音聲美を感じることが出來ない。朗讀によつて、始めて文章の思想感情が完全に味はれるのである。世には謠曲や語り物を道樂として嗜む向きもあるが、朗讀も一つの道樂として嗜むに足るものである。

斯樣に實用の上からも趣味の上からも、大いに發達さすべき我が國文朗讀のためにと思つて、茲に拙著を公けにする次第である。

大正三年の秋　東京において　著者

國文朗讀法目次

第一章　朗讀法とは何ぞ……一頁

字義　エロキューション　定義　朗讀法　語部　宣命譜　平家琵琶　聲明

兆民居士の述懷　西洋文藝の刺戟　支那の朗讀法　國文朗讀法の研究

第二章　朗讀の祕訣……七

それしきの事　文章の思想感情を我がものとする事　非望　氣乘り

完美な朗讀　朗讀法の自覺と運用　模範と自信　練習の功

第三章　朗讀練習の方法……一一

軍隊教練の譬喩　朗讀練習の基本　理法の二大綱　發音法と表出法

練習の三大別　發音練習　正讀練習　表情朗讀練習　正讀と表情朗讀

第四章　發音法……一五

第一節　標準音の事……一五
五十音圖　不齊一　假名とローマ字との對照　發音機關縱斷面圖　五つの短母音　母音三角　中間母音　有聲音即ち濁音　無聲音即ち清音　續音と斷音　カ行音　ガ行音及びその鼻音　サ行音　ザ行音　タ行音　ダ行音　ナ行音　ハ行音　バ行音　パ行音　マ行音　ヤ行音　ラ行音　ワ行音　直音　音韻表　語音の訛誤　拗音　カ行の清濁拗音　サ行タ行の清濁拗音　そのほかの拗音　長母音　重母音　撥音　促音
第二節　語音變化の事……四四
國語音の單位　語音變化の五種類　發音と綴字　字音假名遣　二語連合の字音　和語假名遣　文語文と口語文　アクセント　轉聲の事　同じ綴字の語音　人名のアクセント
第三節　發音練習の事……五八
模範と練習　母音を主とする練習　父音を主とする練習　アクセント

の練習　語音の斷續　言語の紛亂　語音の清濁　百人百癖　矯正法
小聲發音法　徐々發音法　母韻發音法　混成法　呂律廻し　國語の例
呂律廻しの性質　英語の例　支那語の例

第五章　表出法……七七

第一節　句讀一名休止……七八
句讀　語法的句讀一名論理的句讀　句讀　挿入　美辭的句讀　强め
整調　休止の長さ

第二節　重念……八四
重念一名エンファシス　理解的重念の二種　一般的のもの　特種的のもの　主眼　對比や對照　緣語や諷諭　表情的重念　重ね　引延し　叫び　とぎれ　重念の工合

第三節　昇降一名抑揚……九一
昇降　降調の場合　意味完結　單に「然り」「否」と答へられない問　假の問

命令又は宣告　憤怒又は憎惡　强め又は感激　昇調の場合　意味未完結　單に「然り」「否」と答へられる間　仁愛と有望と歡喜　絶叫　崇拜と稱讃　驚愕と疑惑　祈禱と懇願　複合の昇降

第四節　調子即ち高低、强弱、緩急……九七

調子　聲帶と聲門　音の高低　人聲の音域　男聲と女聲　音の强弱　音の緩急　音色　音聲の調和　感情と調子　調子一覽表　調子の變化　單調　淨瑠璃の表出法

第五節　詞品と表出法……一〇九

詞品　直喩　諷喩　寫聲と擬態　擬人　誇張　引用　ぼかした語　枕詞と序詞　掛詞　緣語　語路合せ　反覆　重出の語　綜合と演繹　言ひ直し　列叙　顚倒　省略　對語對句　漸層　反語と皮肉　疑問　假設の問　語路の急轉　感歎　連鎖の語　整調の文句

第六章　朗讀雜話……一二三

言葉の畫　朗讀者の心得　教師の心掛　朗讀と人數　惡讀　癖なほし
注意の仕樣　朗讀と呼吸　呼吸演習　屋外の演習　聲の異狀　素讀と
朗讀と諳誦　韻文の朗讀　韻文と散文　音樂的流暢　韻文と音樂　韻
の事　宗教書の朗讀　語物や謠物と朗讀　役者と朗讀　晴れの朗讀
朗讀會

附錄　國文抄……一五三

祈年祭の祝詞　乃木大將への感謝狀　芳宜園大人を祭る文　配所の菅
公　小萩が下　俊基朝臣の關東下向　國引　辨慶の太刀取り　鹽冶判
官最期の場　榮螺の自慢　西光が嘲笑ひ　入間川　孔糞の怪氣餤　富
士川の夜逃　元曆の大地震　仁和寺の法師　鶯宿梅　芳流閣上の格鬪
扇の的　最期の參內　人臣の道

附錄　國文朗讀法參考……二四三

（目次終）

○書(ふみ)よめば昔の人はなかりけり、みな今もある
吾が友にして。　（本居宣長）

○書を讀むには、字々の響亮(ひびきあきら)かにして、心到り眼
到り口到ることを要す。　（支那の箴言）

○何人も、修養せずして能辯となりたるは無し。
（シセロ）

國文朗讀法

日下部重太郎　著

第一章　朗讀法とは何ぞ

字義

そも〳〵「朗讀」といふ語は、既に唐の詩人も之を用ゐて有つて、古くから出來て居る漢語である。支那の古い字書である爾雅（じが）や說文（せつぶん）に、「朗」と「明」とを互に同じ意義に解してある。「朗」の字を和訓では「あきらか」とも「ほがらか」とも云ふ。卽ち朗讀とは「あきらかによむ」と云ふ字義で、言海には之を「よみあぐる」と解してある。

エロキューション

さて西洋では、英語に謂はゆるリーヂング(Reading)即ち朗讀は、エロキューション(Elocution)の一種としてある。エロキューションは「能辯術」または「雄辯術」または「表情讀法」などと譯してあるが、何れも都合の好い譯語では無い。そこで、エロキューションとは如何なる事かと尋ねるに、グラハム(W. Graham)氏は、

定義

一定の標準によつて美妙に話し又は讀む術である。

と云ひ、フォルシス(J. Forsyth)氏は、

發音を正しくし、曲節を明からにし、言語を自在に變化し、雅美で巧みなる方法を以て、十分に言語の意味を聽者に傳へるやうに言ひ出す術である。

と云ひ、プラムプトル(C.J.Plumptre)氏は、

言語の意味を聽者が十分に理解するやうに發表するば

かりでなく、なほ言語の勢力と美と諧調をも感ずるやうに發表する術である。

と云つてある。つまり、エロキューションは、言語文章を正しく且つ趣味ある樣に、言ひ表はし又は讀みあげる術であると云ふことになる。さうしてエロキューションは、たゞ音聲だけで思想感情を發表する場合ばかりで無く、之を發表するのに身振や手眞似をも伴なはせる場合もある。それゆゑ、演說も講談も對話も談論も演劇の臺詞(せりふ)なども、すべてエロキューションの領分に這入る。その中で、朗讀法とは、既成の文章を見て、正しく且つ趣味ある樣に、之を讀みあげる方法を云ふのである。

朗讀法

語部

わが國では、上古に語部(かたりべ)といふ者があつて、神代このかたの

事を語り傳へた。　また祝詞は神前で讀みあげられ、宣命は皇族や群臣らの參列の所で讀み聽かせられた。　本居宣長翁の詔詞解に、

宣命譜

ふるき書籍目錄に、宣命譜といふもの出でたり。　今は傳はらぬ書なれば、いかさまなるものにか知られねど、譜と名づけたるをもて思ふに、その讀揚ざま、音聲の巨細・長短・昂低・曲節などをしるべしたる物にこそありけめ。

と云つてある。　平安朝の數多の物語も、和漢朗詠集も、名からして物語と云ひ、朗詠と云ふ。　鎌倉時代に現はれた平家物語の如きは、徒然草に、

平家琵琶

行長入道、平家物語を作りて、生佛といふ盲人に語らせけり。（中略）かの生佛が生れつきの聲を今の琵琶法師は學び

聲明

兆民居士の述懷

西洋文藝の刺戟

たるなり。

と記してある。室町時代から現はれた謠曲や狂言や淨瑠璃など、何れも能辯の術に依らぬものはない。それらの發達には、佛家の聲明（一名梵唄）の恩惠がある。聲明は、その昔弘法大師や慈覺大師に傳へられ、音聲研究の學問として、廣く宗教及び藝術の上に應用された。右の如くで、我が國のエロキューションは大いに進歩し、中江兆民居士が、今一度大阪へ行き、文樂座で越路太夫（後の津大掾）を聽いてから死にたいと述懷したほどである。然るに我が國語には、從來エロキューションの理法を書いたものが乏しかつた。明治時代に諸先輩が能辯術や朗讀法の研究を促したのは、西洋におけるエロキューションの研究の刺戟に由るのである。

支那の朗讀法

また支那でも、昔から能辯の術が磨かれ、詩文の朗讀が行はれてゐるけれども、明細にその方法を書いた書物が見當らない。我が國に來て居た支那人に尋ねても、その書物が知れない。本國の學者に問合せてもらつたが、「漢文朗讀法不ニ但未ニ見ルノミ、似リ竟未ニ有ラ此ノ書。（中略）讀法之作、絶無シ其人、可ク怪シム可シ羞。」と云ふ返答であつた。

國文朗讀法の研究

西洋では、ギリシヤやローマの昔から現今に至るまで、エロキューションが能く研究されて來て、その方法を講じた書物が數多ある。それで我等は、それらの書物を參考し、我が國語のエロキューションの實際に照して、國文朗讀法を研究し、益々之を發達させねばならぬ。

それしきの事

文章の思想感情を我がものとする事

第二章　朗讀の祕訣

朗讀の祕訣と云つても、瓢簞から駒を出す類ひでは無い。述べて見れば、ああ、それしきの事かと思はれるかも知れないが、しかし、それしきの事が至極大切なのである。

朗讀に大切な事は、先づその文章の思想感情を能く會得し、之を我がものとする事である。さもなければ、その朗讀は、精神が這入つて居ないで不自然なものとなる。「巧な朗讀とは、人工的に語るのである」。と云つた人もあるが、フレミング氏（C. Fleming）は「巧な朗讀とは、むしろ自然的に語るのである。」と說いた。かの團十郎が「遠藤武者」を演じた時の袈裟遺書の朗讀や、攝津大掾（せつつだいじょう）が「酒屋の段」を語る時の半七書置の朗讀な

非望

氣乘り

完美な朗讀

ど、げに、眞に迫るの妙境に達したものである。「由良之助をやれば、先づ由良之助の心となれ。」とは先師團十郎の教へであると、その高弟から聞いた。

それで、その思想感情を會得しかねる程度の文章を無理に朗讀し又はさせようとの非望は、全く禁物である。幼い兒童に、文章軌範や八家文、さては馬琴や近松の朗讀をさせようとは、誠に無理な事。幼い兒童には、御伽噺や小學讀本の朗讀が好い加減で、それとても能く兒童の會得した文章に限る。それで無ければ、讀みあげても氣乘りがしない。朗讀法にたよれば、何でも能く朗讀が出來ると思ふのは、間違である。完美な朗讀を成すには、必ず文章の思想感情を我がものとした上で、適切に朗讀法を運用せねばならぬので

朗讀法の自覺と運用

ある。

さて常々の對話や談論などでは、時と處と相手とに應じて、自然に我が思想感情を言ひ表はすのであるが、朗讀の方では、朗讀者自身の心一つで、文章の中の複雜な心情を現さねばならぬ。即ち、平生は是かうと氣をつけずに言葉遣をしてゐるのを、朗讀においては、此處はかう、其處はさうと、言葉遣に樣々氣をつけて鹽梅よくせねばならぬ。それが朗讀法として說かれるものである。之を書き立てて見れば、當り前の事ばかりだと氣づかれるのであるけれども、當り前と氣づかれるばかりでは、その効能が無い。之を自覺して練習し、自由自在に運用させてから、朗讀法は空蟬の殼となるものである。

模範と自信

練習の功

書道の大家の教訓に「常に古人無かるべからず。然れども自ら筆を執り紙に臨むに當つては、古人有るべからず。」とある。實にこれは、模範の必要と自信の必要とを面白く諭した名言。ロック氏（J. Lock）は曰く「恰も天才と思はれるほど優れた人でも、多くは反覆練習の結果に過ぎないものだ」と。練習の功を積めば、ジョンソン氏（B. Johnson）が謂はゆる「藝術は習ひ熟すれば自然に等しい。」と云ふやうに、遂には妙境に入ることが出來る。

軍隊教練の譬喩

朗讀練習の基本

第三章　朗讀練習の方法

百萬の大軍の行動も、その基づく所は實に各個教練にある。各個教練が出來てから小部隊の教練を行ひ、それから大部隊の演習を行つて、遂に大軍の行動が出來るのである。朗讀の事も之と同樣である。一音一言の發音が正しく出來ないのに、一句一節が能く讀みあげられる筈がなく、まして一段一章においてをやである。

かやうに軍隊において、各個教練が總べての軍隊行動の基本である如く、朗讀においても、各個の發音練習が總べての朗讀練習の基本として甚だ大切である。發音の正くしない者が、漠然と直ちに文章の朗讀練習に取掛つては、砂上の

樓閣の譬へもある通り、いかにも覺束ない次第ではないか。「急がば廻れ、勢多の唐橋。」先づ發音を正して後に文章の朗讀練習をするのが、却て彼岸に到達する近路となる。それで、次の章以下に、朗讀に關する理法を、

○發音法＝言語に於ける音聲を明確に發する事。

○表出法　文章に於ける思想又は感情を適切に表出する事。

理法の二大綱

發音法と表出法

の二大綱にわけ、更に之を細かく別けて說く積りである。

練習の三大別

さて、その理法を適用する練習は、便宜のため、凡そ左の三類に大別して見られる。

第一は、言語の音聲を明確に發するための練習である。之を發音練習又は機械的朗讀練習といふ。

發音練習

正讀練習

第二は、文章の思想を正しく讀み表はすための練習である。之を正讀練習又は論理的朗讀練習といふ。正讀には、明確な發音と、句讀並に重念の正しい表出とが必要である。

表情朗讀練習

第三は、文章の思想感情を正しく且つ趣味ある樣に讀み表はすための練習である。之を表情朗讀練習又は審美的朗讀練習といふ。表情朗讀には、明確なる發音と種々の表出とが必要である。

第一の例は、五十音圖や呂律廻の練習の如きである。第二の例は、「地球の形體」とか「地方自治制」などといふ非感情的文章の朗讀練習の如きである。第三の例は、「扇の的」とか「最期の參內」などといふ感情的文章の朗讀練習の如きである。

正讀と表情朗讀

さうして感情的文章を讀むのに、表情朗讀までは出來ないにしても、正讀の程度に外れては誠に聞きづらい。それで、或文章を表情朗讀にするか、又は正讀に止めるかは、一つには文章の性質により、一つには朗讀者の熟練如何による事である。

第四章　發音法

言語に正しい明らかな發音を要するのは、活字版に正しい鮮やかな活字を要する樣なものである。字體に正しい標準を要するやうに、音聲に正しい標準を要する。語音に昔と今との變遷が有るから、今の標準音は昔の標準音とは合はない所があり、また同時代の標準音と方言音とも合はない所がある。わが現代の國語の標準音といふのは、現今の東京語の模範的發音に據るのである。この章には、その發音に就いて說かう。

第一節　標準音の事

わが國語では、標準音を練習するに五十音圖を用ゐてゐる。

不齊一

假名とローマ字との對照

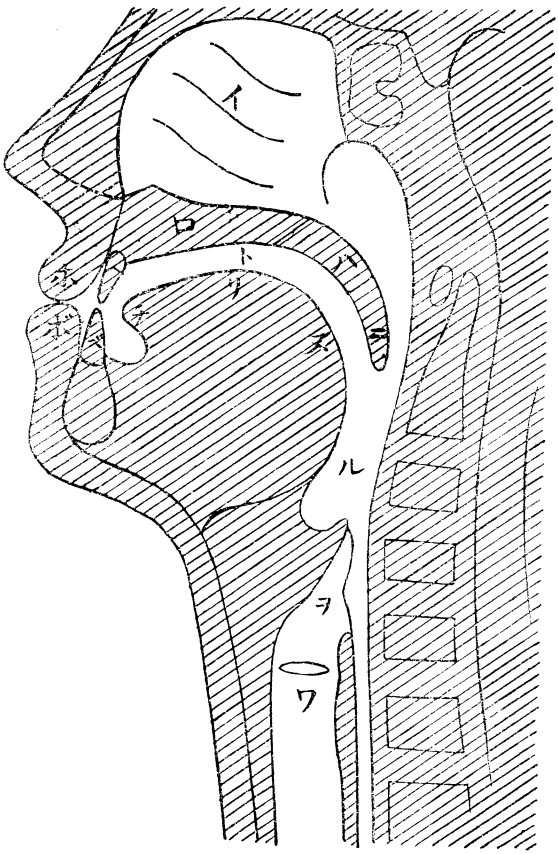
五十音圖は、悉曇即ち梵字の序列に法とつて母音と父音との順序を定め、之を經緯に配合したものに、假名といふ音節文字を當てたものである。五十音圖と呼ぶけれども、昔から阿行と也行と和行とに同音同字が有り、後世の標準音では異字同音の假名なども出來て、隨分不齊一な音圖となつてゐる。何分にも、前から普通に五十音圖が我が國語學習に用ゐられて來たのである。しかし假名は音節文字であるから、音韻組織や音韻變化を確實に說明するのに不都合である。それゆゑ、單音文字であるローマ字を以て、假名と對照して說明して行くこととする。尤も聲音學を說く積りでは無いから、それは其の書物に讓り、この書物には、標準音の要領を說き、且つ有り勝の誤解を除きたいと思ふ。

發音機關縱斷面圖

發音機關縱斷面圖

（フィートル氏の聲音學書に據る）

（注意）咽頭の下方は食道に連なり、喉頭の下方は氣管に連なる。飲食物をのみ下す時には、喉頭の上につき出た會厭（ゑえん）が下つて喉頭を閉す。「のどびこ」は上げ下げにより鼻腔への氣息道の閉ぢ開きをする。



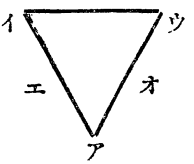
イ　鼻腔
ロ　硬口蓋
ハ　軟口蓋
ニ　懸壅（のどびこ）
ホ　上唇と下唇
ヘ　上齒と下齒
ト　口腔
チ　舌端
リ　舌中
ヌ　舌本
ル　咽頭
ヲ　喉頭
ワ　聲帶

五つの短母音

ア　イ　ウ　エ　オ
a　i　u　e　o

この五つは、我が國語の標準短母音である。アは、顎も唇も廣く大きく開き、舌を自然に低めて發音し、イは、顎を合し、唇を扁平に開き、舌端を上齒の根につけて發音し、ウは、顎を合し、唇を狹く小さく開き、舌本を軟口蓋に近づけて發音する。エはアとイとの中間母音で、少し顎を開き、イの場合より唇を稍廣く開き、舌を稍低めて發音し、オはアとウとの中間母音で、半ば顎を開き、ウの場合より唇を稍大きく圓く開き、舌本を稍低めて發音する。

母音三角



「母音三角」は舌の位置によつて圖解したものである。舌の運轉と口の開合の次第から云

中間母音

有聲音即ち濁音

へばイエアオウまたはウオアエイの順序が容易である。しかし最も發音し易い母音はアであるから、悉曇などに、凡て之を最初に置いて有る。母音は、母音三角圖を指示して、種々の順に練習することが出來る。

わが國語の標準短母音は此の五つで有るけれども、人の口で發し得られる中間母音は、この間に數多ある。我等が外國語を學ぶに當つて、甚だ發音しにくい母音のあることを感ずるのは、わが國語に普通でない中間母音があるからである。また奥羽や關東あたりの人がエとイとを混同して、「御願致します」などと云ふことがあるのは、エとイとの或中間母音を發するのである。

母音は、喉の聲帶が振動する音、即ち有聲音（一名濁音）である。

無聲音即ち清音

聲帶が振動しない音を無聲音（一名清音）と呼ぶ。母音の外にも有聲音が有る。また母音は、長く引き續けて發し得る音、即ち續音である。長く引き續けて發しられない音を斷音と呼ぶ。母音の外にも續音がある。長母音や重母音や撥音等の事は、後に說かう。

續音と斷音

カ行音

カ　キ　ク　ケ　コ　ガ　ギ　グ　ゲ　ゴ

ka　ki　ku　ke　ko　ga　gi　gu　ge　go

カキクケコは、父音kと母音a i u e oとの熟音である。kは、舌本と軟口蓋との接着で起る氣息の閉止を吹き破つて發する音である。kは無聲音で斷音である。

ガ行音及びその鼻音

ガ行の父音gは、kの有聲音である。ガ行音が「伺ふ」「萩」「泳ぐ」「管笠」「眞心」の如く、語の中または下にある場合、「人が」の如

く豆爾乎波となる場合には、gが鼻へかゝつて鼻濁音ngとなるのが、東京語其の他の通例である。この場合にも、假名遣ではガギグゲゴの假名を用ゐ、普通のローマ字綴りでもgを用ゐてゐる。但し、必要に應じて、ガギグゲゴの假名、或はġまたは^gなどを用ゐることもある。

右の場合にngとなるのは、近畿・東海・東山・北陸の諸道の大部分以上淡路・阿波などである。但し、其が鼻へかゝらぬ地方も隨分廣い。即ち九州や中國や四國や關東や越後などの全部又は幾部分においてである。それらの地方では、之をgと發音する事を許容して宜いが、標準音としては、ngを用ゐるべきである。九州から近畿地方へ來てゐた某視學が、凡てngを用ゐるのは不正であると說いたと云ふ。

これは、すべてngを以て訛り音と思ひ誤つたものと見える。但し、一語の始にあるgを鼻濁に發音するのは訛りであるから、正さねばならぬ。

サ行音

サ	シ	ス	セ	ソ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
sa	shi	su	se	so	za	ji	zu	ze	zo

サシスセソは、父音s（但しシの父音はsh）と母音a i u e oとの熟音である。sは、舌端と硬口蓋の前部との狹い間で氣息を摩擦させる音である。shは、sよりも下脣を稍廣く開き、舌端を下齒の裏に置き、舌中と硬口蓋との狹い間で氣息を摩擦させる音である。ローマ字でshと書いても、二音では無く、一音である。それで、之をšなどと書くこともある。sもshも無聲音で續音である。

ザ行音

ザジズゼゾの父音zは、sの有聲音であり、ジの父音jはshの有聲音である。jはzhと書くこともあるが、やはり二音では無い。

「芹」「先生」などを訛つてシェリ(sheri)シェンシェー(shenshē)などと言ひ、また「錢」「大膳」などを訛つてジェニ(jeni)ダイジェン(daijen)などと言ふのは、訛音である。これは正さねばならぬ。

タ行音

タ	チ	ツ	テ	ト	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド
ta	chi	tsu	te	to	da	ji	zu	de	do

タチツテトは、父音t(但しチとツとの父音は各別のもの)と母音a i u e oとの熟音である。tは、舌端と硬口蓋の前部との接着で起る氣息の閉止を吹き破つて發する

音である。tは無聲音で斷音である。チの父音は、從來英語の綴りを用ゐてchと書くけれども、實はtとshとの二合父音で、精細にはtʃと綴るべきである。ツの父音は、從來の綴りの如くtとsとの二合父音である。

ダ行音

ダデドの父音dは、tの有聲音である。ヂとヅとの父音は、昔の標準音ではジとズとの父音と各別で有つた事は、その假名の字體を各別にしてゐる事や、所々の方言音においては各別に發音してゐる事で考へられる。しかし今の東京語其の他の發音では、前に說明したジとズと同じくji, zuと言つてゐる。舊いローマ字綴りではヅをdzuと書いて有るけれども、今の標準音とはならない。

ジとヂ、ズとヅとの發音の別は、今は高知・宮崎・鹿兒島・長崎

佐賀などの諸縣に殘つてゐる。その他の諸府縣では、ジにヂ、ズにヅが合併となり、または其の區別が不分明となつた。之を區別する地方では、それを許容して宜いが、標準語としては東京語の發音に從ふべきである。

ナ行音

ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
na	ni	nu	ne	no

ナニヌネノは、父音nと母音a i u e oとの熟音である。nは、dが鼻へかかつた音である。「退く」を俚語でドクと言ひ「男女」を漢音ではダンヂョ、吳音ではナンニョと言ふなど、謂はれのある事である。

ハ行音

ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ha	hi	fu	he	ho

ハヒフヘホは、父音h(但しフの父音はf)と母音a i u e oとの熟音である。hは、通常の呼吸の場合より聲門を少しく狹め、急に氣息を吐き出して發する音てある。フの父音fは、英語音のfの如く強くは無いが、兩脣を近寄せ、其の間から氣息を吹き出す時に、兩脣が摩擦されて發する音である。hもfも無聲音で續音である。

ハ行の古音がf、更に溯つてはpで有つただらうと云ふ事は、所々の方言音や日本語音と支那語音などとの比較研究に據つて、既に先輩が考證された所である。奥羽や出雲などの方言音に、其の古音の殘留と見るべきものが有るけれども、それは今の標準音に從ふべきものである。

パ行音

パ　ピ　プ　ペ　ポ　バ　ビ　ブ　ベ　ボ

パ行音

pa

パピプペポは、父音pと母音a i u e oとの熟音である。pは、兩脣の接着で起る氣息の閉止を吹き破つて發する音である。　pは無聲音で斷音である。

pi

pu

pe

po

ba

bi

bu

be

bo

パ行の父音bは、pの有聲音である。　即ちpとbとは、清音と濁音との關係である。

ハ行音は、變遷の上から云へば、その古音はバ行音と清濁の關係が有つたと認められるけれども、今のハ行音はバ行音と別種のものであり、たゞ僅かにフの發音において脣音の殘留が認められる。　しかも其のフの脣音たる性質は微弱なものである。　今音では、ハ行音はほとんど氣息音に變じてゐるから、パ行音をハ行音の半濁音と呼び、

バ行音をハ行音の濁音と呼ぶのは假名の字體に拘泥した事で、聲音學の上では、正しい呼び方とは云はれない。

マ行音

マ　ミ　ム　メ　モ
ma　mi　mu　me　mo

マミムメモは、父音mと母音a i u e oとの熟音である。mはbが鼻へかゝつた音である。「煙」をケブリともケムリとも言ひ、「文武」を漢音ではブンブ、吳音ではモンムと言ふなど、謂はれのある事である。

ヤ行音

ヤ　(イ)　ユ　(エ)　ヨ
ya　(i)　yu　(e)　yo

ヤユヨは、父音yと母音a u oとの熟音である。yはイの發音の際よりも、舌端と硬口蓋と一層相接着し、脣は稍

兩側へ引かれて發する音である。 yは半母音とも呼ばれ、有聲音で續音ある。 ヤ行には、昔から第二と第四との假名にア行の假名を共用してゐる。 しかしyi yeの音が有り得べく、且つ現に「癒える」と言ふ樣な場合には、母音の同和でiyeruと聽かれるのであるけれども、それは特例である。 我が標準音では、通例之をエと發音してゐる。

ラ行音

ra	ri	ru	re	ro
ラ	リ	ル	レ	ロ

ラリルレロは、父音rと母音a i u e oとの熟音である。 rは、舌端を反らせて稍內方へ向け、之と硬口蓋の前部との間で、氣息を摩擦させる音である。 rは、半母音とも呼ばれ、有聲音で續音である。

ラ行音とダ行音とは發音法が近似してゐるから、互に誤られることがある。正さねばならぬ。

ワ行音

ワ	ヰ	(ウ)	ヱ	ヲ
wa	i	(u)	e	o

ワは、父音wと母音aとの熟音である。wは、ウの發音の際よりも、舌本と軟口蓋と一層接近し、脣も一層相狹まつて發する音である。尤もそのwは、英語音のwほど脣をつぼめる強い音ではない。wは半母音とも呼ばれ、有聲音で續音である。ワ行には、昔から第三の假名にア行の假名を共用してゐる。

ヰヱヲは、昔からア行のイエオと假名を異にしてゐる事や、或地方の音にその父音が存してゐる事を見ても、その

直音

音韻表

古音は wi, we, wo で有つた事が考へられる。今も「魚」「硫黄」と言ふ様な場合には、母音の同和で uwo, yuwo となるのであるが、それは特例である。我が標準音では、通例キエヲをイエオと同じに發音してゐる。

以上は凡そ我が國語の直音に就いて說いたのである。左にホイットネー氏の音韻表を借りて、以上の母音と父音とを總括し、音韻關係を明かにしよう。

（左の表を應用する注意）從前、五十音圖の上で漠然と音通と呼び、經の通ひ、緯の通ひなどと說いた事は、左の表によつて合理的に說明される。例へば、鳩翁道話に引いた鞍馬口の人の訛りに「霍亂」を「ハくらん」と云ふのは、閉止音の k が氣息音の h に變つたもので、k も h も無聲音で口蓋音である。諸方の訛りに「茶釜」を「ちやマガ」と云ふのは、鼻音の m と ng との轉換である。「席」を「ミしろ」と云ふのは、母音 u が i に變つたのである。

語音の誤り

父音

母音	a				
	e	o			
	i	u			
半母音	y	r	w		
鼻音	ng	n	m		
氣息音	h				
摩擦音 シビラント	zh (j)	z			
	sh	s			
摩擦音 スピラント			f		
閉止音	g	d	b	有聲音	
	k	t	p	無聲音	
	口蓋音	舌音	脣音		

右の表に依つて、左の如き語音の訛り又は轉換の出來る理由が分かり、從て之を正す次第も考へられる。

○「鉛筆(えんぴつ)」をインピツまたはエンペツ　○「虹(にじ)」をネジ　○「席(むしろ)」をミシロ

○「螢」をホタロ　○「心」をケケレ　○「風呂敷」をフルシキまたはフドシキ　○「ランプ」をダンプ　○「枝」をエラ　○「鼠」をネルミ　○「地震」をリシン　○「水差」をミルザシ　○「紅葉」をモミリ　○「風車」をカラグルマ　○「門松」をカロマツ　○「驚く」をオロロク　○「五つ宛」をイツツルツ　○「雪達磨」をユキラルマ　○「おめでたい」をオメレタイ　○「禮」をデー　○「錢」をデニ　○「座敷」をダシキ　○「蟬」をセビ　○「塞ぐ」をフタグ　○「東」をシガシ　○「人」をシト　○「身體」をカラまたはカダラ　○「小刀」をコガタラ　○「釣瓶」をツブレ　○「油」をアルバ　○「拘る」をカカラウ　○「晦」をツモゴリ　○「卵」をタガモ　○「茶釜」をチャマガ

これから拗音の事を說かう。拗音とは、二合父音と母音との熟音である。それで、前に述べたチとツの如きは、實は拗音に這入るべきものである。全體、從來の拗音表と云ふも

のは、假名書きに拘泥し、不完全で有つて、右の如く拗音であるべきものが這入つて居ないし、又その反對に、拗音で無い筈のものが這入つて居る。

カ行の清濁拗音

kya	キャ	(kwa)	(クヮ)	gya	ギャ
kyu	キュ	(kwe)	(クェ)	gyu	ギュ
kyo	キョ			gyo	ギョ
				(gwa)	(グヮ)
				(gwe)	(グェ)

これはカ行の清拗音と濁拗音である。一語の中か下においては、濁拗音は鼻へかかつて鼻拗音ġya, ġyu, ġyo, ġwaとなること、左の通り。

○行脚（あんぎゃ）　angya　　悪逆（あくぎゃく）　akuġyaku

○汗牛（かんぎゅう）　kanġyū　　闘牛（とうぎゅう）　tōġyū

○金玉　kingyoku　崩御　hōgyo
○因果　ingwa　圖畫　zugwa

一語の始にあるgを鼻濁に發音するのは、訛りであるから、正さねばならぬ。（再說）

前にカ行の直音の所に述べた如く、ガ行の鼻音の無い地方では、濁拗音のまゝで發音することを許容して宜いが、鼻拗音の事は、少くとも一通り心得さすべきである。

ガ行の鼻音の無い地方の人に、其の鼻拗音を強ひて發音させると、アンニャ（行脚）、トーニュー（鬪牛）、ハンニャシンニョー（般若心經）などと訛り易い。

クェとグェとは、「法華」「源氏」などの場合に、假名遣として殘つてゐることがあるけれども、今は一般に、ケ及びゲと同

様と發音してゐる。

カとクヮ、ガとガヮとの別は、九州、四國、北陸道（以上の大部分）大阪奈良、和歌山、鳥取、島根、秋田、青森などの諸府縣に存在してゐる。その他では、クヮはカに、グヮはガに合併された。

即ち東京語を始め「藥罐、觀音、火事、喧嘩、願掛」をヤカン、カンノン、カジ、ケンカ、ガンガケと發音してゐる。但し、その拗音が存在してゐる地方では、之を許容して然るべきである。

サ行とタ行との清濁拗音

シャ	シ	シュ	ショ	ジャ	ジ	ジュ	ジョ
sha	shi	shu	sho	a	i	ju	
チャ	チ	チュ	チョ	ヂャ	ヂ	ヂュ	ヂョ
cha	chi	chu	cho	ja	ji	ju	jo

前にサ行の直音の所に述べた通り、shもjも各々一つの父音であるから、實は拗音とは云はれない。たゞ假名の字體から見た分類で、シとジとを除く外を假に拗音圖に入れるまでである。

前に說いた通り、チとツとは、實は拗音であるけれども、假名の字體などの都合によつて、之を拗音圖に入れないのである。

チとツとの濁拗音は、標準音では皆變じてシとスとの濁音と同一になつてゐる。但し、チとツとの濁拗音が存在してゐる地方では、之を許容して然るべきである。ヅはもとヘボン式ではdzuと綴つたのであるが、ローマ字會式では、標準語にヅとズとの別が無いと認め、之を直音とし

てNと改め、後にヘボン氏もローマ字會式に從つた。

nya	ニャ	nyu	ニュ	nyo	ニョ	hya	ヒャ	hyu	ヒュ	hyo	ヒョ
pya	ピャ	pyu	ピュ	pyo	ピョ	bya	ビャ	byu	ビュ	byo	ビョ
mya	ミャ	myu	ミュ	myo	ミョ						
rya	リャ	ryu	リュ	ryo	リョ						

（その他の拗音）

前に掲げた音韻表によつて「龍宮（りゅうぐう）」をジューグー、「脈（みゃく）」をニャク、「心經」をシンニョーと訛る類ひの理由も、之を正す次第も考へられる。

凡そ拗音は直音より發音がむづかしいから、拗音を直音に訛る地方があり、特に小兒などは、之を訛り易い。例へば「野宿」をノジク、「旅順口」をロジンコー、「從順」をジージン、「屏風」をボーブと訛る類ひである。正さねばならぬ。

拗音は、字音を呼ぶのに用ゐる事が最も多い。且つ短母音の拗音よりは長母音の拗音が、更に多く我が字音に用ゐられる。また拗音は、國語の寫聲又は擬態の語に用ゐることが少く無い。例へば、

○キャッと叫ぶ　○キョロ〳〵眺める　○ギャー〳〵と泣く
○ギョッとする　○チュー〳〵と鳴く　○ボチャ〳〵と洗ふ
○チョロ〳〵流れる　○グンニャリとする　○ニュッと出る
○ニョッポリと立つ　○ヒューと鳴らす　○ヒョイと飛び出す
○ピュッとやる　○ピョン〳〵飛ぶ

長母音

是から長母音や重母音や撥音に就いて說かう。

アー　イー　ウー　エー　オー

ā　ī　ū　ē　ō

和語の「嗚呼」「兄さん」「夕」「蝶」「蝙蝠」など、漢語の「牛乳」「丁寧」「東京」など、洋語の「ヤード」「ビール」「アルミニューム」「ページ」「ソーダ」などを發音するに、東京語を始め、大體においては、假名遣の如何に拘らず、長母音を用ゐるのである。但し、地方によつては之をāi, īi, ūi, ōまたはāu, ōまたはōiなどと二母音に發音する所も有るけれども、それは標準音とはならない。

ローマ字綴りの長母音は、フランス語の綴字風にâ, î, û, ô, êとして山形の長音符を附けることが、近來行はれてゐ

る。また發音は長音で有つても、ōをōōとしてōの母音字を以て書くことが、從來の綴字法である。

重母音

アイ　ウイ　オイ　アウ　オウ　等

ai　ui　oi　au　ou

「愛」「外」「郎」「朔」「逢」「追」等を發音するに重母音を用ゐる。尤も「逢」「追」の如きは、長母音に發音する場合もある。

撥音

ン

n または m

撥音は、鼻へ氣息を洩らして鼻にひゞかす音である。撥音に左の四種の別がある。

(一) 次に來る音が母音またはs shの如き摩擦音の場合は、舌中のン。例へば「親愛」「檢査」「印紙」のン。

(二)次に來る音がtdnの如き舌端音の場合は、舌端のン。例へば「前途」「運動」「神嘗」のン。

(三)次に來る音がkgの如き舌本音の場合は、舌本のン。例へば「軍旗」「金魚」のン。

(四)次に來る音がpbmの如き脣音の場合は、脣のン。例へば「散歩」「天罰」「殘務」のン。

(一)のンはñ(二)のンはn(三)のンはṅ(四)のンはmとして區別し得るけれども、通例は前三つのンをnに兼ねさせてゐる。歴史的字音假名遣、例へば「天」のテヌ「金」のキム などの撥音の區別は、我が現代の國語音では混一となつてゐる。

促音

最後に促音の事を說かう。

促音は、或父音が、舌または脣などに支へられて摩擦するか、或は急につまつて出來るものである。それで、別に促

音と云ふものが有るわけでは無いが、慣例に從つて、之を促音として說かう。促音に左の四種の別がある。

(一)摩擦音(s又はsh)が擦れきしる場合。例へば「一切」「決心」

(二)舌端音(t)が閉ぢて促る場合。例へば「一旦」「一等」

(三)舌本音(k)が閉ぢて促る場合。例へば「學校」「別家」

(四)脣音(p)が閉ぢて促る場合。例へば「立派」「佛法」

促音は、ローマ字綴りでは、促る父音の字を重ねて、

(一) issai, kesshin.　(二) ittan, ittō.

(三) gakkō, bekke.　(四) rippa, buppō

と書いてゐる。假名書きでは「つ」または其の小字などを用ゐて「いつさい」「いつさい」「いっさい」「いッさい」などと書

いてゐる。

第二節　語音變化の事

國語音の單位

前節に述べた標準音は、種々の聲音元素から出來て、我が國語音の單位となるのである。各〻の語は、一箇乃至數箇の單位から成立ち、中には古往今來、種々な發音上の變化を生じた。我等は文章を讀むのに、語音變化の事を心得て置かねばならぬ。語音變化は千態萬狀であるけれども、先づ左の五種類として見られる。

語音變化の五種類

第一　一語に含む或音が近緣の音に變るもの。例へば「木の葉」をコノハ（キの母音變化）「酒屋」をサカヤ（ケの母音變化）「栗」をアワ（ハの父音變化）「山田」をヤマダ（タの父音變化）といふ類。

第二　一語に含む或音が互に入り換るもの。例へば「新

し」をアタラシ「山茶花」をサザンカといふ類。

第三　一語に含む或音が脱落するもの。例へば「衝立」をツイタテ（キの脱落）「家」をイエ（ヘの脱落）「問ふ」をトウ（フの脱落）「文箱」をフバコ（ミの脱落）「本意」をホイ（ンの脱落）といふ類。

第四　一語に或音を増加するもの。例へば「詩歌」をシイカ（母音の増加）「八日」をムイカ（同上）「馬」をウマ（同上）「澤庵」をタクワン（父音の増加）「專」をモッパラ（姑く促音の増加と説く）といふ類。

第五　一語に含む二つの短母音が一つの長母音に變るもの。例へば「廊下」をローカ（アウがオーとなる）「申す」をモース（同上）「工事」をコージ（オウがオーとなる）といふ類。

尤も右の五種類の中の一種類以上が、一語に同時に又は次第に起つたものも少くは無い。例へば「雨戸」をアマド「今日」

をキョー「蝙蝠(かはほり)」をコーモリ「笄(かうがい)」をコーガイといふが如きものである。

右の如き語音變化は、主として發音勞力の經濟、音聲調節のために起つて來て、遂に一般に是認されるに至つたものので有る。　語音變化は、時代が立つに從つて、段々增してゐる。

發音と綴字

同樣の語音變化で有つても、未だ一般に是認されて居ないものは、方言または訛誤として取扱はれるのである。

言語の發音は、時代の推し移る間に變遷するから、昔の綴字即ち假名遣と今の發音と一致しないものが出來てゐる。

字音假名遣

先づ字音假名遣から云へば、「　」の中の例は第一父音を濁るもの

○おう(應)あう(櫻)あふ(押)わう(王)……(發音)オー

○こう(工)　かう(豪)　こふ(劫)(業)　かふ(甲)　くわう(光)……コー
○そう(宗)(増)　さう(壯)(像)　さふ(挿)(雜)……ソー
○とう(東)(同)　たう(當)(堂)　たふ(答)(納)……トー
○のう(能)　なう(腦)　なふ(納)……ノー
○ほう(峯)(謀)　はう(方)(亡)　はふ(法)(乏)(音漢)　ほふ(法)(乏)(音呉)……ホー
○もう(蒙)　まう(盲)……モー
○よう(用)　やう(様)　えう(要)　えふ(葉)……ヨー
○ろう(樓)　らう(郎)　らふ(蠟)……ロー
○きよう(共)(凝)　きやう(京)(仰)　けう(敎)(堯)　けふ(協)(業)……キョー
○しよう(升)(丞)　しやう(正)(常)　せう(小)(饒)　せふ(涉)……ショー
○ちよう(徵)　ちやう(長)(丈)　てう(朝)(條)　てふ(蝶)(帖)……チョー
○によう(女)　にやう(孃)　ねう(尿)　ねふ(捻)……ニョー

○ひよう(氷)ひやう(病)へう(評)へう(廟)……ヒヨー
○　みやう(明)めう(妙)……ミヨー
○りよう(陵)りやう(良)れう(料)れふ(獵)……リヨー
○いう(右)　ゆう(勇)いふ(邑)……ユー
○きう(牛)きゆう(宮)きふ(急)……キユー
○しう(獸)しゆう(從)しふ(十)……シユー
○ちう(畫)ちゆう(重)ちふ(蟄)……チユー
○にう(柔)にゆう(乳)にふ(入)……ニユー
○りう(流)りゆう(隆)りふ(立)……リユー

と片假名書きの通りに發音してゐる。　さうして「空」「數」「通」「風」をクー、スー、ツー、フー、「永」「計」「制」「貞」「寧」「平」「明」「例」「衞」をエー、ケー、セー、テー、ネー、ヘー、メー、レー、エーと發音し、又「伊」も「爲」もイー、「衣」も「惠」

二語連合の字音

もエ「於」も「惡」もオ「加」も「果」もカ「氣」も「華」もケ「自」も「治」もジ「主」(坊主)も「圖」もズ「山」も「三」もサンと發音してゐる事は、前にも說いて置いた。二語又は二語以上が連合するときに、左の例の如き音便の出來ることがある。

○「銀杏」をギンナン、「延引」をエンニン、「云々」をウンヌン、「萬葉」をマンニョー、「觀音」をカンノン「親王」をシンノー。

○「三位」をサンミ、「陰陽師」をオンミョージ。

○「佛恩」をブットン、「新發意」をシンボッチ。

○「北方」をホッポー、「六本」をロッポン。

○「日本」をニッポン、「七寶」をシッポー。

○「雜報」をザッポー、「立腹」をリップク。

實は入聲とハ行古音との殘留と見るべきであらう尙左に之を說く

漢語の入聲が日本字音の二綴音に變じたものが、カサタハ

四行の或音に接する時は、元の入聲を保存することがある。例へば「學校」「擊劍」「一册」「月蝕」「甲冑」「法度」「末輩」の如きである。

和語假名遣

次に和語假名遣においても、ほぼ字音假名遣と同樣の現象がある。先づ、長母音に發音するものの例から云へば、

○こうぢ(小路)　とうとう(遂)　いぬぼうざき(犬吠崎)
いもうと(妹)　みよう(將見)　しろうと(素人)
○かうべ(頭)　おさう(將押)　たうげ(峠)　はうむる(葬)
まうす(申)　やうやく(漸)　まらうど(客)
○おふて(追手)　きのふ(昨日)　もよふす(催)
○あふぎ(扇)　さふらふ(候)　とほたふみ(遠江)
はふはふ(這々)　すまふ(相撲)
○おほし(多)　こほり(氷)　とほたふみ(遠江)　ほほ(頰)

○あかほ（赤穂）　なほし（直衣）
○とをか（十日）
○あをめわた（青梅綿）　あかを（赤魚）
○うけう（將受）（上方語）　みませう（將見）　てうづ（手水）　めうと（夫婦）
○けふ（今日）　なにてふ（何云）　うれふ（憂）
○おほきう（大）　しうと（舅）　おちうど（落人）　ひうが（日向）
○やぎふ（柳生）　はにふ（埴生）　きりふ（桐生）
○あ（嗚呼）　かあ（鴉聲）　さあ（誘聲）　まあ（先）
○おほきい（大）　うれしい（嬉）　にいさん（兄様）　ひいき（贔負）
○いひ（飯）　しひ（椎）　ちひさい（小）　にひなめ（新嘗）　ひひな（雛）
○ひきゐる（率）　もちゐる（用）
○にくう（憎）　うすう（薄）　あつう（暑）　かるう（軽）

○くふ（食）　すふ（吸）　ゆふべ（夕）　ふるふ（震）
○ちうせい（小枕草子）　ねいさん（姉様）　へいへい（唯々）
○あかえひ（赤鰒）　めひ（姪）　かれひ（鰈）
○うれへ（憂）

語中または語尾及び豆爾乎波の「はひふへほ」は、「河」「鯛」「危い」「蛙」「勢」「私は」「西洋へ」の例の如く、ワイウエオと發音する。但し、稀に「母」「鵞」「内」「障」「眼」「虎斑」「屠」「拔穂」の如きは、假名遣の通りに發音し、「葵」「煽る」「仰ぐ」「例る」の如きは、その「ふ」をオと發音する。「井戸」「居る」「聲」「桶」「惜しい」の如き語の「ゐ」「ゑ」「を」は、すべてイエオと發音し、「富士」「蛆」の「じ」も「藤」「氏」の「ぢ」も、ジと發音し、「葛」「見ず」の「ず」も「屑」「水」の「づ」も、ズと發音する。

また漢語の入聲に類似した音便も出來てゐる。例へば、

○「提ぐ」をヒッサグ　「幾日」をイッカ
○「討手」をウッテ　「待ちて」をマッテ　「奴」をヤッコ
「全し」をマッタシ　「最」をモットモ　「服部」をハットリ
○「尊し」をタットシ　「新田」をニッタ　「夫」をオット　「謂ひつべし」をイッツベシ　「專」をモッパラ　「適」をアッパレ
○「欲す」をホッス　「當りて」をアタッテ
なほ梵唄や謠曲などでは、「世尊は」をセソンナ、「涅槃を」をネハンノ、「今日は」をコンニッタ「山伏と云へば」をヤマブシトイッパといふ類ひの讀み癖がある。

文語文と口語文

さて文語文は古の京畿の言語に基づき、口語文は今の東京語に基づくもので、讀み方のちがふ所がある。殊にハ行活用動詞の音便や終止形や連體形において著しい。例へば、

（古代系の文章）　言うて　逢うて　逢ふ　追ふ　買ふ　乞ふ
　　掃ふ　拾ふ（尤も古代語の發音そのまゝでは無い）
（東京語の文章）　言つて　逢つて　逢ふ　追ふ　買ふ　乞ふ
　　掃ふ　拾ふ

アクセント

アクセントは地方によつて違つてゐるが、大體において東京中心と京都中心とを擧げて、二つの最大代表として見られる。さうして少くとも口語文のアクセントは、東京語のそれを以て標準とすべきである。曩に伊澤樂石學院長は、國定小學讀本の口語文の音韻及び「音勢」の研究「國定小學讀本正讀法」を發表され、波岡茂輝氏らも、其の音韻及びアクセントの研究「ローマ字世界」に載せた「國定讀本の讀み方」を發表された。それらの研究に據るに、二音語のアクセントは、東京語と京都語と反對になるものが

甚だ多く、三音語のアクセントは、雙方とも第二音に附くのが通例であり、四音語以上のアクセントは、雙方の間に異同がある。例へば、（上に記したのは東京語、下に記したのは京都語）

○ハタ（旗）ハタ（旗）　○ハト（鳩）ハト（鳩）　○マメ（豆）マメ（豆）

○ツノ（角）ツノ（角）　○イケ（池）イケ（池）　○トラ（虎）トラ（虎）

○ハオリ（羽織）ハオリ（羽織）　○ハカマ（袴）ハカマ（袴）

○オミヤ（御宮）オミヤ（御宮）　○ケライ（家來）ケライ（家來）

○ワタクシ（私）ワタクシ（私）　○ムラサキ（紫）ムラサキ（紫）

○マツカゼ（松風）マツカゼ（松風）（マツ（松）マツ（松）カゼ（風）カゼ（風））

漢字三音考に「皇國の言語の法、連用の便に隨ひて、同言も三聲（平上去）轉聲することにて、其の轉聲に依りて義の種々に分るゝことあり。日は平聲、樋は上聲、火は去聲なるを、日影

と云ふときの日は上聲、掛樋と云ふときの樋は去聲、火箸と云ふときの火は上聲となり、山は平聲なるを、山風、山松などと云ふときは去聲となり、東山、西山などと云ふときは上聲となり、宇治は去聲なるを、宇治川と云へば上聲、宇治橋と云へば平聲となる如く、何れの言も皆その聲轉ずるを、もし本音のまゝに呼ぶときは、その義異なり。　かの山風、山松の如き、山を本音のまゝに平聲に呼べば、山と風と二つの事になり、山と松と二つの事になるを、轉じて去聲に呼ぶによりて山の風、山の松の事になるが如し。」云々と說いてある。　これは上方（かみがた）の發音を例にしたので有るから、東京語の發音に一致しない所がある。　特に「日樋」「火」の如き一音語を、京都などでは長音に發音し、東京などでは短音に發音するから、前

同じ綴字の語音

人名のアクセント

者においては、單獨でも一音語の平上去が明かに區別されるけれども、後者においては、單獨では之を區別しかねるわけがある。尙その外に雙方個々の異同はあるけれども、轉聲の事實は、やはり東京語にも存在するので有る。

アクセントの最も必要な所は、同じ綴字の語においてである。例へば、東京語において、

○ハシ(橋)　ハシ(箸)　ハシ(端)

○キリ(桐)　キリ(霧)　キリ(錐)　キリ(切)

○ハタ(旗)　ハタ(機)　ハタ(畑)　ハタ(端)　ハタ(將)

と云ふが如きである。わが國語のアクセントは中々に複雜である。更に今一つ心得べき事は、動物や植物などの名を人の姓名とした場合には、本のアクセントと反對に呼ぶ

ことである。例へば「虎」(トラ)をトラと呼び「丑」(ウシ)をウシと呼び「竹」(タケ)をタケと呼び「菊」(キク)をキクと呼び「柳」(ヤナギ)をヤナギと呼び「東」(ヒガシ)をヒガシと呼ぶ類ひである。精しく一一の語音にアクセントをつけることは、辭書の務めである。然るに我が國の辭書には、この事が缺陷となつてゐる。今後の標準語辭書には、この缺陷を補充さるべきものである。

第三節　發音練習の事

「勸學院の雀、蒙求を囀る」とは、浸潤の力を云つたものである。曾て或少年が何時の間にか吃音の癖となつた原因を調べて見たれば、教師に吃音の人が有つた。その教師が吃音を直したれば、其の少年の吃音も自然に直つたと云ふこと。

模範と練習

かやうなわけで、良き發音には、第一に、明確で用意周到なる模範が必要である。さて第二に、注意深くして秩序好く進む練習が必要である。その參考のため、左に發音練習に關する諸方法を擧げて見よう。

母音を主とする練習

○母音を主とする練習

母音は語音の要素として甚だ大切なものである。かの方言に「兄(あに)」と「姉(あね)」「死(し)んだ」と「濟(ず)んだ」「石屋(いしや)」と「椅子屋(いすや)」と混亂する所のあるのは、母音が正しくないからである。母音を正しくするのは、發音の礎と云つても宜い。母音を主とする練習法には、

一、短母音を種々の順序に呼ぶもの。

一、長母音を種々の順序に呼ぶもの。

一、短母音と長母音とを錯綜して呼ぶもの。

一、五十音圖のア段乃至オ段を連呼するもの。

一、アット、イッソ、ウットリ、エッサ、オットなどの促音に續けて呼ぶもの。

一、凡そ父音を拔きにして先づ「兄(あに)」をアイ、「姉(あね)」をアエ、「死んだ」をインア、「濟(す)んだ」をウンアの例に唱へ、さて後に本の父音を加へて呼ぶもの。この法は、吃音矯正に能く用ゐられるものである。

父音を主とする練習

○父音を主とする練習

父音は種々に分類して見られるから、その練習も種々に出來る。そこで、父音を主とする練習法には、

一、夫々の直音又は拗音を含むもの。

(p)ピー(b)ブー(y)ヤー(w)ワー(k)カーカー(gy)ギャーギャー(sh)シシ(s)ススス(ch)チチ(ts)ツツ(t)トントン(d)ドドン(j)ジャンジャン(py)ピョンピョンの類。

一、拗音や直音の錯綜。

キョート(京都)　トーキョー(東京)　ショージョー(猩々)　キューヨー(急用)　ジュージュン(從順)　リョジュンコー(旅順口)　シャカニョライ(釋迦如來)　ハンニャシンギョー(般若心經)　チョージューチューギョ(鳥獸蟲魚)の類。

一、促音を含むもの。

モッテ(以)　ユックリ(緩々)　ワスレッポイ(健忘)　チョット(一寸)　ショッコー(職工)　シュッチョー(出張)　ジュッスー(術數)　チュッチョク(黜陟)の類

一、鼻音を含むもの。

エンニン（延引）　ゼンナク（善惡）　サンミャク（山脈）

ナガサキ（長崎）　クギヌキ（釘拔）　コグスリ（粉藥）

クゲヌマ（鶴沼）　ビンゴカッパ（備後合羽）の類

一、類似の聲音の錯綜。

カラダ（身體）　アブラ（油）　ツルベ（釣瓶）　ヤワラ（柔術）

シュス（繻子）　シュスズリ（朱硯）　コクギカン（國技館）

キャラマクラ（伽羅枕）　マエガミ（前髪）　マキガミ（卷紙）

ナガモチ（長持）　ナマゴメ（生米）　オアワレミ（御憫）の類

○アクセントの事

アクセントの練習

アクセントの練習において注意すべきは、

一、同じ綴りがアクセントを異にして語を異にする例。

アメ(雨)　アメ(飴)
マメ(豆)　マメ(健康)
ハシ(橋)　ハシ(箸)　ハシ(端)

二、同じ語が熟合によつてアクセントを異にする例。

アメ(雨)　アメカゼ(雨ト風)　アメフリ(雨降)
カワ(川)　ヤマガワ(山ノ川)　ヤマカワ(山ト川)
カゼ(風)　カザグルマ(風ノ車)　ハルカゼ(春ノ風)
ハシ(橋)　ハシバ(橋場)　タカハシ(高橋)

○語音の斷續及び清濁等の事

語音の斷續

歌または文章において、語音の斷續及び清濁などを明かにしなければ、その意味が不分明となり、又は非常な誤りが出來るのである。「べんけいがなぎなたをもち」とか「かすみそ

のへのにほひなる」などと云ふことが、よく例に引かれる。實際において、子供が「ニハトリ　ガ　キル」。を二羽の鳥が居るやうにも讀み、「ニハ　ニ　ハ　トリ　ガ　キル」。を二羽の雞が居るやうにも讀むことが、折々あるのである。

時鳥（ほとゝぎす）ほどときすぎずきすぎずに
　まづまつ我に初音きかせよ

と云ふ歌も、語音の斷續にまごつく例として引かれる。百人一首などを讀みあげる人が、斷續をまちがへて、同じ所を同じ様に誤讀することが有り勝である。

誰をかも知る人にせむ高砂の（藤原興風）
　松も昔の友ならなくに（「ならぬに」の意であるから「なら泣くに」と讀むのは誤）
吹くからに秋の草木のしをるれば（文屋康秀）

言語の紛亂

むべ山風を嵐といふらむ（「宜なるかな、山風」の意であるから斷ること）

（紀友則）久方の光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ（「しづ心」は長閑な心の意であるから續けること）

（アクセントの注意等）

○ナラナクニは正、ナラナクニは誤。

○ムベヤマカゼは正、ムベヤマカゼは誤。

○シヅゴコロは正、シヅココロは誤。

なほ意味の不了解から、甚だしい言語の紛亂の起る場合がある。例へば、

（在原行平）立ち別れいなばの山の峯におふる

まつとし聞かば今歸りこむ（「生ふる」を「居る」と讀むのは大誤り）

（慈鎭和尚）おほけなく憂き世の民におほふかな

わが立つ杣にすみぞめの袖（「覆ふ」を「思ふ」と讀むのは大誤り）

語音の清濁

また濁點を附けない例の短册や官報などを讀むのには、能く語音の清濁に注意せねばならぬ。

庭の雪に我か跡つけて出てつるを（慈鎮和尚）

とはれにけりと人や見るらむ

これは「て」も「は」も清むのであるが、之を濁つて讀めば、狂歌となると云ふこと。百人一首などを讀みあげる人も、隨分と清濁の間違をする。

ちはやぶる神代も聞かず立田川（在原業平）

唐紅に水くゝるとは（「くゝる」は絞り染にすること中を濁れば意味を成さない）

山川に風のかけたるしがらみは（春道列樹）

流れもあへぬ紅葉なりけり（山の川の意なれば連濁すること）

人はいさ心も知らず故郷は（紀貫之）

花ぞ昔の香ににほひける（「いざ心も知らず」と讀むのは誤り）

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと（小野篁）

人には告げよ海士の釣舟（海は「わた」で有つて「わだ」では無い）

朝ぼらけ宇治の川霧たえ〳〵に（藤原定頼）

現はれわたるせゼの網代木（「瀨々」を「膳所」のやうに讀んではならぬ）

きのふこそ早苗取りしかいつの間に（古今集、讀人不知）

稲葉そよぎて秋風の吹く（「こそしか」は係結である「取りしか」と讀むのは誤）

散りのこる花もやあると打群れて（新古今集、藤原道信）

深山がくれを尋ねてしがな（願ひの「がな」であつて感歎の「かな」ではない）

かの土佐日記の正月七日の條に、「歌主またまからずと云ひて立ちぬ」とある。これを「またまからず」と讀んで「又參じませう」の意に解して有つたのを、三宅米吉博士は「まだまからず」

と讀んで「未だ歸りませぬ」の意に解されたと云ふ。

○發音矯正の事

百人百癖

百人百癖とは、發音においても云はれる事である。眞に完全無缺の發音と云ふべきは、殆ど有り得べからざるほどである。或は吃音があり、訥音があり、或は訛音があり、或は人人夫々の癖がある。さうして語音が種々雜多で有つて、中には發音に困難な言葉も少くは無いのである。それで、大方の人に、多少は發音を矯正すべき所が有るものである。

矯正法

その矯正法は種々あるけれども、普通簡易に用ゐられる方法は、語學的にして心理的のもの。即ち心理的とは、發音者は虛心平氣にし、又その矯正を助ける人が有る場合には、その人は溫和靜肅である事である。そうして語學的とは、左

小聲發音法

の如き方法を用ゐる事である。

一、小聲發音法＝先づ、さゝやき程から始めて、段々大きくなるやうに幾度か發音するもの。例へば、

クリガハゼタ……クリガハゼタ……クリガハゼタ

オアワレミ……オアワレミ……オアワレミ

キマキガミ……キマキガミ……キマキガミ

徐々發音法

二、徐々發音法＝先づ徐々と始めて、段々速さを増すやうに幾度か發音するもの。例へば、

クーリーガーハーゼータ　　オーアーワーレーミ　　キーマーキーガーミ

クーリーガーハーゼータ　　オーアーワーレーミ　　キーマーキーガーミ

クリガハゼタ　　オアワレミ　　キマキガミ

母韻發音法

三、母韻發音法＝言語を構成する諸音の父音を取除けて幾度か之を唱へ、然る後に、本の父音を加へて發音するもの。

例へば、

ウイアアエア……ウイアアエア……クリガハゼタ

オアアエイ……オアアエイ……オアワレミ

イアイアイ……イアイアイ……キマキマギ

母韻發音法は「ク・ク・クリガハ・ハ・ハゼタ」の如く、能く父音と母音とが熟合しない場合、即ち吃音狀態に試みれば、最も利目がある。なほ右の諸方法を混成した方法も立つのである。

例へば。

ウイアアエア……クーリーガーハーゼータ……クリガハゼタ……クリガハゼタ

オーアーワーレーミ……オーアーワーレーミ……オアワレミ

イーアーイーアーイ……キーマーキーガーミ……キマキガミ

混成法

○呂律廻しの事

發音練習のため、語呂が面白くて、殆ど無害な意味の文句を

呂律廻し

唱へることが、何れの國語にも有る。これは我が國で、呂律廻し又は早口(はやくち)などと呼ぶものである。國語教授において、折を見て少年に適度な呂律廻しを試みさせる事は、興味があり且つ有効である。しかし之を過度に試みさせる事は、愼しまねはならぬ。左に呂律廻しの例を擧げて見よう。

國語の例

○びんご(備後)かつば(合羽)、く。
○なまたまご(生卵)、ながばかま(長袴)。
○このつるべ(釣瓶)、つぶれたつるべ。
○なまかべに(生壁)、なぜ、たけたてかけた(竹立)。
○おまへのまへがみ(御前髪)、さげまへがみ(前下)。
○ながもちのうへに(長持上)、なまごめ(生米)ななつぶ(七粒)。
○このきやく(客)は、よくかきをくふきやく(柿食)。〔これなどは面白くても下品であるから、好ましくない〕

○こごめのなまごめ、ココンこごめのコンなまごめ。
○たうじんが、ちやうちんを、とをつけてとほる。
○あかまきがみか。あをまきがみか。きまきがみか。
○ありまげんばさんの、げんくわんばんのばんがつぱ。
○むかふのたんぼのたんぼのはなに、とんぼがとまつた。
○なますぎは、なますぎは、ふたつあはせて、ふたなますぎは。
○かへるピョコ〳〵、みピョコ〳〵、あはせてピョコ〳〵
むピョコ〳〵。
○かんだかぢちやうのかどのかんぶつやで、かちぐりかつたれば、かたくてかめない。

○きやう(京)のさんじふ(三十)さんげんだう(三間堂)の、ほとけ(佛)のかず(數)をかぞへてみれば(見)、さんまんさんぜん(三萬三千)、さんびやくさんじふ(三百三十)さんたいご(三體御)ざるとの。

○びんご(備後)のびんぼふな(貧乏)おばう(御坊)さん(樣)、ぶんご(豐後)へいつて(行)、ぶんごのびやうぶ(屏風)に、びんごのびんぼふなおばうさんの(書)をかいた。

○うたうたひのまへで(前)、うたうたふやうな(樣)、うたうたひならうたうたひのまへで、うたうたふけれども、うたうたひのまへで、うたうたふやうな、うたうたいでないから、うたうたひのまへで、うたうたふこと(事)がでぎぬ(出來)うたうたひ。

我が國語におけるものは、凡そ右の種類である。即ち、その

呂律廻しの性質、

共通の性質は、外國語の呂律廻しと等しく、同類の語音もしくは同一の語音を繰返すことで、發音の困難であるに拘らず、文句が無害で語呂が面白いのに釣り込まれて、好んで練習するやうに出來てゐる。

英語の例

因みに英語の例を參考として二つ三つ。

○A bad big growling dog.　（惡い大きな吠える犬）

○I met the man in the middle of the market.

（町の眞中で人に出會つた）

○Peter Piper pecked a peck of pepper.

（ピーター、パイパーは一ペックの胡椒（ペッパー）を喙んだ）

○My grandmother sent me a new-fashioned three-cornered cambric country-cut handkerchief. Not an old-fashioned three-cornered cam-

bric country-cut handkerchief, but a new-fashioned three-cornered cambric country-cut handkerchief.

（私の祖母が新形の三角の細麻布の田舍製のハンケチを吳れた。古風の三角の細麻布の田舍製のハンケチではない、新形の三角の細麻布の田舍製のハンケチだ）

支那語の例

なほ支那語の例を參考として一つ二つ。（官話の發音に據る）

○東洞庭（トンチン）、西洞庭（シートンチン）。洞庭山上（トンチンシアンシアン）一根（イーコン）籐（トン）。籐上掛銅鈴（シアンコワトンリン）。

風動籐動銅鈴動（フオントントントンリントン）。風定籐定銅鈴定（フオンチントンチントンリンチン）。

（東洞庭、西洞庭。洞庭の山上に一本の籐がある。籐の上に銅鈴を掛けてある。風が動けば籐も動き銅鈴も動く。風が定（レヅ）まれば籐も定まり銅鈴も定まる）

○山前（シアンチエン）有（ユー）一箇（イーコ）顏圓眼（イエンユアンイエン）、山後（シアンホウ）有（ユー）一箇（イーコ）顏眼圓（イエンイエンユアン）。一人（アルレン）山前去（シアンチエンチユ）、比眼（ピーイエン）。不知（ブチー）還是（ヘイシー）顏圓眼的眼睛圓（イエンユアンイエンテイエンチンユアン）、還是（ヘイシー）顏眼圓的眼睛（イエンイエンユアンテイエンチン）

圓。

（山前に一箇の顏圓眼があり、山後に一箇の顏眼圓がある。二人が山前において眼を比べる。何れが顏圓眼の眼玉であるか、何れが顏眼圓の眼玉であるか、知れない）

○蘇州元妙觀、東西兩判官。東判官姓潘、西判官姓管。管判官不要管潘判官、潘判官不要管管判官。

（蘇州の元妙觀に東西の兩判官がある。東の判官の姓は潘、西の判官の姓は管。管判官は潘判官を管するに及ばぬ、潘判官は管判官を管するに及ばぬ。）

第五章　表出法

文章の思想感情を音聲にあらはす方法を此に表出法と云ふ。前章に發音法を說いた時に、言語に正しい明かな發音を要するのを、活字版に正しい鮮やかな活字を要する樣だと述べたが、さて適當にして感興のあるやうに思想感情の表出を要するのは、恰も其の活字を工合好く趣味あるやうに組み上げて活字版を作るが如きものである。活字版には、句讀點があり、活字の大小があり、或は太文字（ゴシック體）を交ぜ、或は批點を附け、さうして字行の變化も色々あると云ふやうに、朗讀における表出法には、語音の斷續・强弱・昇降・高低・緩急などと云ふ多種多樣の趣がある。これから其の表出法

について段々と說いて行かう。

第一節　句讀一名休止

文章に含む思想感情の工合に應じて讀み聲を斷續させる事を此に句讀と云ふ。（增韻に曰く「語絶處謂之句。語未絶而點二分之一以便二諷詠一謂之讀」）これに語法的句讀と美辭的句讀とある。

句讀

語法的句讀一名論理的句讀

先づ語法的句讀とは、語法において說く如く、語意の斷續に從つて讀み聲を斷續させて、語意を明かにする事である。一に之を論理的句讀とも云ふ。句讀は、凡そ句と讀とに分けられる。句とは、文意の終止する場合を云ひ、讀とは、文中で語意の少しく斷れる場合を云ふ。現代は通例、句點には。（マル）を用ゐ、讀點には、（テン）を用ゐ、名詞を並列する場合には・（ポツ）を用ゐ、挿入の語句には特に「（カギ）」又は『（フタヘカギ）』を用ゐる。そこで、語法

的句讀は、語法に據る符號の如く斷續するものである。その句點の例は、

○天川屋義平は男でござる。（尋常止め）

○誰だ、第一に上陸したのは。（顚倒止め）〔この場合には述語の下に讀點を切る〕

○生きて歸る者僅かに三人。（省略止め）

讀點の例は、

○嗚呼、忠臣楠子の墓、（獨立の感動詞の下）

○神よ、この苦難を救ひたまへ。（呼掛の語の下）

○彼も人なり、我も人なり。（同趣の文の間）

○身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐ。（同趣の述語の中止法の場合）

○學も博く、德も高き人。（同趣の修飾語句の間）

○今こそ斯く在れ、我も昔は男山。（複文の間）

○境内は、老杉枝を交へて、晝も暗し。（從屬節が挿まる場合）

○老杉枝を交へて、境内は晝も暗し。（從屬節が上になる場合）

○余は常に、神は誠の人を護り給ふを信ず。（間接に修飾する場合）

○教育の進歩せること、實に吾人を驚かす。（語を略した場合）

○清盛、維盛らをして源氏を討たしむ。（主語と客語とを別つ場合）

○家光は、家康の孫、秀忠の子、家綱の父なり。（同格の語を別つ場合）

○日本三景とは、嚴島・松島・天橋立をいふ。（並列する名詞の間）

また挿入の例は、

○古語に曰く「忠臣は必ず孝子の門に出づ。」

○ソクラテスは「生きんがために食ふ。」と云へり。

挿入語句の終りを「と」でうけた場合には、通例そこで讀み聲を斷らないで、その「と」を前後より小さく讀む。それで、この

挿入

場合には句點を省く例も有るのである。

美辭的句讀

次に美辭的句讀とは、(甲)文中の或語を特に強めて言ふため、(乙)韻文または整句文の口調をとゝのへるために用ゐるものである。

強め

(甲) 強めの句讀

一、強めた語の後に休止する例。

○同盟は　破るべからず。

○今こそ　勝敗の分れ目なれ。

二、強めた語の前に休止する例。

○勝つか、然らざれば　討死すべし。

○天川屋の義平は　男でござるぞ。

整調

(乙) 整調の句讀

一、韻文の句讀

○敷島の（本居宣長）　大和心を　人問はゞ　朝日に匂ふ　山櫻花。

○櫻咲く（正岡常規）　御國しらすと　百敷の　千代田の宮に　神ながらいます。

○古池や（芭蕉）　蛙とびこむ　水の音。

○春の（慈鎭和尚）　やよひの　あけぼのに、四方の山邊を　見わたせば、花ざかりかもしら雲の、かゝらぬ峯こそ　なかりけれ。

二、整句文の句讀

○天文廿三年（琵琶歌、川中島の一節）、秋の半ばの頃かとよ、上杉謙信は八千餘騎を從へて、川中島に打つて出づ。　われ此の度の戰は、武

田信玄を追つ詰めて、親しく雌雄を決せんと、渦巻き返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。

○不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨の、何時か我がみのをはりなる、熱田の八劔伏し拜み、汐干に今や、なるみ潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にし有れば、たれか哀れと夕暮の、晩鐘なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

（太平記、東下りの一節）

（注意）美辭的句讀は、語法的句讀の法を以て律すれば、破格のものである。それで、兩方の句讀の一致しないことがある。例へば「しら雲の、かゝらぬ峯こそ」の如き、（イ）「渦巻き返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。」の如き、（ロ）「晩鐘なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。」の如きである。（ハ）語法的句讀から云へば、（イ）や（ロ）の如きは、讀點を切らない所であ

り、(八)の如きは、讀點を切る所である。

休止の長さ

句讀の箇所を如何に長く休止すべきか。それは、緩やかに讀む文章と急に讀む文章とに由つて、程度がちがはねばならぬ。特に美辭的句讀は、同じ文章の中でも、思想感情の變化に應じて、程度がちがはねばならぬ。しかし凡その標準はどうか。之について、サンダース氏(C. W. Sanders)は、讀の最も短い休止(コンマの場合)は一と數へる間、つぎに短い休止(コロンの場合)は一二三四と數へる間を置き、句における最も長い休止(セミコロンの場合)は一二、やゝ長い休止は一二三四五六と數へる間を置くべき事を說いてある。つまり、これは凡その心得に過ぎないから、場合によつて斟酌すべきものである。

第二節　重念

重念一名エンファシス

理解的重念の二種

一般的のもの

特殊的のもの

重念とは「重く念へる」といふ意義の支那語である。英語に之をエンファシス Emphasis と呼び、或語をその前後より強く發音することである。しかし重念といふ方が、一層適切で且つ稱へ易いやうに思ふから、此に重念の名稱を用ゐたのである。

重念は理解的重念と表情的重念とに別たれる。

さて理解的重念は理解を助けるための重念で、之を一般的のものと特殊的のものとに別たれる。一般的の理解的重念は、平生格別氣付かずに居るもので、例へば「鯨は獸類だ」と言ふときには、おのづと「鯨」と「獸類」とが重念になつて居る。支那語においても同様に「鯨是獸類」と言ふのである。即ち、主要の語は重念、其の他の語は輕念となるのは、自然である。しかし是は一般的の事で、特殊の場合には、補助の語でも重

念になるのである。例へば「鯨は獸類で有るか無いか。」との疑問に對しては「獸類だ。」と答へねばならぬ。かやうなのを特殊的の理解的重念と呼ぶ。

特種的の理解的重念は、場合に應じて起るものであるから、一般的のものの樣に一定してゐない。例へば、次の言葉は、重念の附け方で四通りに理解される。

私は決して之を話さなかつた。（他人が話しただらう）

私は決して之を話さなかつた。（これまでに一度も）

私は決して之を話さなかつた。（他の事を話した）

私は決して之を話さなかつた。（思つた事は有るが）

それで問を受ける場合にも、能く重念の有り所に注意せねばならぬ。試みに左の問に答へて見るも、亦一興である。

主眼

（問）林君は昨日來たか。

（答）否林君の使が。

（問）林君は昨日來たか。

（答）否、今日。

（問）林君は昨日來たか。

（答）否、斷り狀が。

對比や對照

思想の關係において、前と後と對比または對照を成す所は、重念せねばならぬ。例へば

古の奈良の都の八重櫻（伊勢大輔）
けふ九重に匂ひぬるかな。

また平家の御大將重盛の宣言は、

「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平家なれば」（平治物語）

云々。

と重念すべく、又かの天正の三傑（織田と豐臣と德川との三公）を三幅對にした十七文字は、

啼かざれはころしてしまふ時鳥
啼かざれば啼かせてみせう時鳥
啼かざれば啼くまで待たう時鳥

と重念すべきてある。　緣語や諷喩の語なども、やはり重念するが宜からう。

衣のたては綻びにけり
年をへし絲の亂れの苦しさに
（義家と貞任との連歌）
（松平定信）この船のよるてふ事を夢のまも
わすれぬは世の寶なりけり（黑船の畫の贊）

緣語や諷喩

（元木工綱）世の中を何のへちまと思へども
ぶらりとしては暮されもせず

（蜀山人）早蕨が握り拳を振りあげて
山の横面はる風ぞ吹く

表情的重念

次に表情的重念は、強い感情をあらはすための重念で、理解的重念よりも更に強くすべきものである。表情的重念に色々の場合がある。即ち、

重ね

（イ）同じ語を重ねる場合

○予は決して降伏せず、決して決して。

○桃太郎は凱旋しました。めでたし〳〵。

引延し

（ロ）語を引延して言ふ場合

○蜀山（阿房宮賦）兀として阿房出づ。

○公は實に公明正大、清廉潔白の人なり。

（八）大聲で叫ぶ場合

叫び

○高綱（平家物語）大音聲をあげて、「宇多の天皇に九代の後胤、近江の國の住人佐々木三郎秀義が四男、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣ぞや。」と名乘つたる。

（二）語の間を休止する場合

とぎれ

○ケーザルはルビコン河の畔に留れり。何故　彼は留りたりや。

○此の期に及び、申上ぐる言葉も無し。（忠臣藏、由良之助の詞）たゞ御最期の尋常を　願はしう　存じます。

（三）の場合において、餘り多く又は餘り長く休止するときは、重念の効力を減ずる事になる。右の如く四種に分けて見

たけれども、二種以上同時に起る事が屢〻有る。特に我等國民の心の底から溢れ出る「萬歲の三唱」即ち、

萬ー歲ー、萬ー歲ー、萬ー歲ー。

に至つては、實に四種の表情的重念が一時に起るものでは無いか。

重念の度合

重念の度合は聲の强弱大小を以て表すものであるが、しかし甚だ深い重念が、時としては却て「さゝやき」を以て表出されることがある。さては「此時無聲勝有聲」などと云ふことも、決して詩人の空想では無いのである。

第三節　昇降一名抑揚

昇降

昇降とは言葉のあげさげ、即ち昇調と降調とを指して云ふ。同じ言葉でも「地球は圓い。」と降調にいへば定說となり「地球

は圓い。」と昇調にいへば疑問となる。降調を抑聲、昇調を揚聲と云ふこともある。

先づ降調の場合の大要を擧げて見れば、

降調の場合
意味完結

一、意味完結のとき、

○氏より育ち。

○成吉思汗は大英雄なり。

○雁は北へ去り、燕は南より來る。

○筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど、君がみかげにますかげはなし。（古今集）

單に「然り」「否」と答へられない問

二、單に「然り」又は「否」と答へられない問のとき、

○誰だ。

○何か。

○何處に居る。
○何時來るつもりの。
○あの人の年齢は幾つであるか。

假の問

三、假に設けた問のとき、
○それでも本氣か。（本氣で有るまいぞの意）
○行かうぢや無いか。（行かうの意）
○なんと面白いぢや無いか。（甚だ面白いの意）

命令又は宣告

四、命令又は宣告のとき、
○此處へ寄れ。
○今後不都合の無いやう心得よ。
○何々の罪によつて何々の刑に處す。

憤怒又は憎惡

五、憤怒又は憎惡のとき、

○おのれ師直、眞二つ。放せ本藏、放しやれ。（忠臣藏）

○總じて此の程につくしにくしと思ひつるに、いで物見せてくれん。（謠曲安宅）

六、意味が完結しないでも、強め又は感激のとき、

○一、二、三。

○萬歲、萬歲、萬歲。

○天顏に咫尺し、誠に恐懼の至に堪へず。

強め又は感激

次に昇調の場合の大要を擧げて見れば、

昇調の場合

一、意味未完結のとき、

意味未完結

○燕は南へ去り、雁は北より來る。

○我が國の梅の花とは見たれども、大宮人はいかゞいふらむ。（安倍宗任）

單に「然り」又は「否」と答へられる問

二、單に「然り」又は「否」と答へられる問のとき、

○御壯健か。

○使は未だ歸らぬ。

○君も行かなければならないの。

仁愛と有望と歡喜

三、仁愛か有望か歡喜のとき、

○近う寄つて話すがよい。

○必ず成就するにちがひ無い。

○ああ、うれしや。

絶叫

四、絶叫のとき、

○やあ、勝つた。

○遠からん者は音にも聞け。

崇拜と稱讃

五、崇拜か稱讃のとき、

○實に生如來樣ぢや。
○よく成就した。

驚愕と疑惑

六、驚愕か疑惑のとき、
○あの人が死んだ。
○これは不思議。

祈禱と懇願

七、祈禱か懇願のとき、
○神よ。助け給へ。
○どうぞ御聽き下さい。

單調

右の例によつて、此の外の場合も類推される。さて、抑揚のない表出を單調といふ。單調は森嚴莊重の文章を讀むのに用ゐるが宜い。

なほ複合の昇降がある。その一つは複合昇調（〜）で、一度さ

複合の昇降

げて急にあげるもの、今一つは複合降調（∨）で、一度あげて急にさげるものである。複合の昇降は、反語（即ちアイロニー）や皮肉や頓智や、その他裏表（うらおもて）の表出をする語に用ゐる。例へば、

○貴公〉は賢（く）い。（たゞ「君は賢い。」と正面から云へば、尋常の意味となる。この例の如く複合の昇降を用ゐて云へば、「君は馬鹿だ」の意味となる）

○飯を食ふ字引〉だ。（「無用の學者」といふ意味を、皮肉つて斯様に云ふのである）

の如きである。即ち、通例では昇調を用ゐる場合に、特に複合昇調を用ゐ、降調を用ゐる場合に、特に複合降調を用ゐるのである。

第四節　調　子

即ち高低、強弱、緩急

調子

調子と云ふ語は、狹い意味では、單に音の高低をさす。しかし、廣い意味では「調子が高い、低い、強い、弱い、急い、緩い」などと云つて、音の高低も強弱も緩急などをも云ふのである。

聲帶と聲門

手を喉頭に當てゝ見ると、俗に喉佛といふ凸つた軟骨に觸れる。この軟骨の所の內側の喉笛に、聲門といふがある。聲門は聲帶のかこむ所で、略三角形の孔である。肺臟から速く空氣を吐き出す時には、聲帶は振動を起す。その振動が、即ち聲である。聲門は、常の呼吸をしてゐる時は開いてゐるが、聲帶の附屬筋の働きで、半開きにもなり、全く閉ぢる樣にもなる。聲帶が張れば調子が高くなり、弛めば低くなる。

音の高低

絃樂器にたとへると、絲が張れば音が高く、弛めば低くなると同じ理である。音の高い低いと云ふことは、一定の

時間に聲帶に起る振動の數の多い少いを指すのである。音樂の方では、一秒時間に二百五十六振動即ち「は調」第一音を眞中とし、それから上も下も幾音階かに分けてある。一音階は順次に二倍の振動を爲すものである。即ち

人聲の音域

樂器の音域	||| は	4096
	||| は	2048
人聲の音域	||| は	1024
	||| は	512
	||| は	256
	||| は	128
	||| は	64
	||| は	32
	||| は	16

男聲と女聲

さうして聲帶などの構造によつて、女や小兒の聲は男人大の聲より高い。そこで、人聲の音域を左の如くに分ける。

（注意）肺臟内の空氣の量が、女は男より少い。そこで、小壜に小口、大壜に大口の響て、聲門が女は男より狹く張つてゐる。それで、男聲は强さに優り、女聲は高さに優る。從て男聲は莊重の方、女聲は輕快の方が得意。

人聲
- 女聲
  - 高聲―高音部 (Soprano)
  - 低聲―中音部 (Alto)
- 男聲
  - 高聲―次中音部 (Tenor)
  - 低聲―低音部 (Bass)

音の強弱

聲帶の張りは同じでも、肺臟から吐き出す空氣の力が強大であれば、聲帶の振動が強く、その力が弱小であれば、その振動が弱い。その力は空氣の分量の大小による。音の強弱を音の大小などとも云ふ。音樂の方では、通例之を甚軟 (Pianissimo) 軟 (Piano) 中 (Mezzo forte) 強 (Forte) 甚強 (Fortissimo) の五段に分けてある。

音の緩急

調子の緩急とは、發音と時間との關係をいふ。一定の時間に發する音數の尋常より多いのが急、少いのが緩である。

例へば、一秒時間に「ほととぎす」の五音を發するのを尋常とすれば、同時間に「こうし」の三音を發するのは緩で、「ほととぎすとぶ」の七音を發するのは急である。音樂では、通例之を緩徐(Largo)緩(Adagio)中(Andante)急(Allergo)急速(Presto)の五段に分けてある。

音色

さて人々各々の發音機關の工合や習慣がちがふから、同じ調子で有つても、百人は百色、千人は千色の音色が出る。それで、「あれは誰の聲だ」と識り別けられるのである。また男女により、年齢・氣質などにより、音聲に高低の差がある。それで、齊唱又は齊讀の時は、或者は高音部、或者は低音部、或者は中音部、或者は次中音部(尚この外に中間音部がある)を以てすれば、音聲の調和が出來るのである。

音聲の調和

これを「調子が揃ふ」とも「調子が合

感情と調子

ふ」とも云ふのである。

凡そ調子は感情によつて變化する。母の愛や觀音の慈悲を語る時は、柔和な聲になる。驚いた時、怒つた時は、荒い聲になる。愛してゐる人に語ると同じ調子で、憎んでゐる者に物言ふことは有るまい。親切に語る時と冷淡に話す時とは、調子がちがふ。哀しい時には聲が沈み、嬉しい時には聲に活氣がある。讓歩服從しようとする時の聲は、おのづと弱くなり、論破屈服させようとする時の聲は、知らず識らず强くなる。今、朗讀の調子を、高・中・低と强・中・軟と急・中・緩との各三段に分け、之に多少の程度をつけて說く事とする。

凡そ中揃の調子は、尋常の對話や引用や說述など、すべて尋常の表出に用ゐる。左に種々の心情の調子を表としよう。

調子一覽表

心情	高低	強弱	緩急	例を含む文章及び所在
莊重	低	中	緩	勅語　祝詞（のりと）　宣命
畏敬	低	中	緩	勅語奉答
稱讃	中高	中	中緩	頌德表　感謝狀
勝喜び	高	強	中急	戰勝報告
歡喜	高	中	中急	祝辭
滿足	中	軟	緩	賀詞
謙遜	中	軟	中緩	答辭　謝辭
謹愼	中	軟	緩	「配所の菅公」（大鏡）
悲哀	低	混合	緩	弔辭　祭文
愁嘆	高	混合	中	「新島守」（增鏡）
沈鬱	低	強	緩	「小萩が下」（源氏物語）

不平	高	軟	中急	「信賴謀反の事」（平治物語）
憂懼	中高	軟	中急	「重盛の諫言」（平家物語）
哀訴	低	軟	緩	「腰越狀」（平家物語）
失望	低	中	緩	「俊基朝臣の關東下向」（太平記）
壯美	中高	強	緩	「國引」（出雲風土記）
壯快	高	中	急	「辨慶の太刀取」（義經記）
上機嫌	高	軟	急	「皇后關白御對面」（枕草子）
怨恨	中	強	急	「判官腹切の場」（忠臣藏）
報復	低	強	中急	「義士燒香の場」（忠臣藏）
激怒	高	強	急	「太閤と長政」（藩翰譜）
叱責	中高	強	中急	「十一歲の信綱」（藩翰譜）
自慢	中	強	中緩	「榮螺の自慢」（鳩翁道話）

侮蔑	高	強	中急	「爲朝の方略」（保元物語）
嘲笑	高	強	中	「西光が嘲笑」（平家物語）
滑稽	高	軟	中急	「狂言記」
戲弄	高	軟	中	「孔冀の怪氣焰」（浮世床）
驚愕	高	強	急	「富士川の夜逃」（平家物語）
恐怖	高	中	急	「元暦の大地震」（方丈記）
畏懼	低	混合	中緩	「保昌と袴垂」（宇治拾遺物語）
煩悶	中低	軟	緩	「仁和寺の法師」（徒然草）
疑惑	中低	軟	緩	「現八冤鬼に遇ふ」（八犬傳）
優柔	中	軟	緩	「宗盛父子の恩愛」（平家物語）
祕密	低	軟	中緩	「籠城の計畫」（桐一葉）
羞恥	中低	軟	緩	「今參り」（枕草子）

懺悔	中高	中	中急	「盛遠の發心」（源平盛衰記）
柔和	中低	軟	中	「幼物語」（即興詩人）
仁慈	中低	軟	緩	「朗圓上人の垂訓」（五重塔）
安寧	中	軟	中緩	「平安城」（平安朝文學史）
優美	中	軟	中	「鶯宿梅」（大鏡）
壯烈	高	強	急	「太白山の占領」（肉彈）
慷慨	中高	強	中緩	「松下松塾」（吉田松陰）
豪邁	高	強	中緩	「芳流閣上の格鬪」（八犬傳）
勇武	高	強	中緩	「川中島の戰」（琵琶歌）
祈願	低	中	中急	「扇の的」（平家物語）
熱誠	中	中	中急	「最期の參內」（太平記）
確信	中高	強	中	「人臣の道」（神皇正統記）

調子の變化

右によつて、その他の心情の調子も類推される。さて右は大體の標準を示したもので、委細に云へば、同じ文章の中にも、種々の變化に應じて、調子の變化がなくてはならぬ。その變化は、歡喜・壯快・滑稽・激怒・熱誠等の心情を表はす場合に著しい。調子の變化が無ければ、即ち單調となる。單調を善用するのは、莊重・畏敬・恐懼等の心情を表はす場合である。しかし、その單調といふ事も、實は單調に近いまでで、如何なる朗讀にも、絕對の單調は有るべからざる事である。

單調

因みに、竹本播磨掾（はりまのじょう）の淨瑠璃祕曲抄の中に見える語り樣を左に拔萃して、參考としよう。

淨瑠璃の表出法

時代物　地あひも詞も、位をつけて、ゆつたりと語るがよし。されど餘りのびすぎたるは、きゝにくし。

世話物　常に物言ふ心持にて、詞づかひさら〳〵とねばらぬ様に言ふがよし。地あひの工合も同じ心得なるべし。

位有る人　地あひ詞とも、上品に、ぎごつならぬ様、やすらかに語るべし。同じ雲の上人にても、官位の高下により、それ〳〵の心持あるべし。

爺婆　すべて老人の趣、詞づかひに心をつくべし。さればとて滅多に齒拔けのまねするはわるし。

子供　愛らしく、かんがちに素直なるがよし。されど餘り子供の聲色する様なるは、初心らしく、きゝにくし。

うれへ　うさも辛さも自身の事と思ひ取り、涙のこぼれる程に身を入れて語るべし。

手負　音聲は亂れ、調子揃はず、ひく息甲斐無く、つく息ばかりの様に語るがよけれど、餘りハア〳〵と騷がしきはわるし。

ちやり　詞づかひ拍子好く、輕う語るが、第一と心得べし。

酒の醉　あたま勝ちに、しりへのもつれる様に、卷舌にて言ふがよし。

ども　言ひだしが出かね、言ひかけると、けつく口早に續けて言ふものなり。

詰合　男女のつめ合は、自然と聲の甲乙ありて分り易し。男どしのせりふは、よく心得ねば、どちらが言ふやら分り難きものなり。さればとて、きりかはりたる聲をつかふも、けたゝましう聞えてわるし。たゞ聲のつかひ方工夫あるべきなり。

掛合　地あひ詞ともに、うけとり渡しあひの隙かぬ樣、かぶせうけて語るがよし。物によりて樣々なれば、それ〳〵程よく心がくべし。

音曲は節を用ゐるもの、朗讀は節を用ゐないものゆゑ、固より兩者の表出法は同一ではない。けれども、心情の如何によつて高低・强弱・緩急などを異にすることは、兩者が相似てゐる。それは、朗讀法が音曲を參考すべき所である。

第五節　詞品と表出法

詞品は、文章の効力と趣味とを增すために極めて大切なも

のであるから、之を朗讀するのに格別の注意を要する。これまでにも所々に詞品に觸れて朗讀の方法を說いたが、此の章には、詞品の朗讀において注意すべき諸點を揭げて見よう。

直喩

直喩、即ち「恰も」「譬へば」「如し」「似たり」などの語を用ゐた譬喩は、通例は、その前後より稍低く稍急に讀む事。

○譬へば水の如し。

○風前の燈に異ならず。

○恰も風前の燈に似たり。

○まさ〳〵といますが如し魂祭。（季吟）

○今朝見れば露岡寺の庭の苔、さながら瑠璃の光なりけり。（西國第七番御詠歌）

諷喩

諷喩の語は、それとほのめかして讀む事。

○七重八重花はさけども山吹の、みの一つだになきぞかなしき。（兼明親王）（少女も亦この歌の意をかりて太田道灌に諷した事がある）

○太平のねむりをさます上喜撰、たつた四杯で夜もねられず。（黒船が浦賀に來た頃の狂歌）

寫聲と擬態

寫聲及び擬態の語は、實際に似通ふやうに讀む事。

○かあ〳〵と啼く鴉。

○むら雀ぱつと飛び立つ。

○つく〴〵と此の樣子を見てゐた。

○駒もとゞろと踏み鳴らす瀨田の長橋。

○あれ松蟲が鳴いてゐる。ちんちろ〳〵ちんちろちん。

○誕生日覩ふ頃ほひより、ちよち〳〵あわゝ、天窓てんて

ん、かぶり〳〵振りながら、同じ子供の風車をほしがる。

（注意）漢文から採つた「春色駘蕩」「秋風颯々」「櫻花爛漫」「蟲聲唧々」「車聲轔々」「鞭聲肅々」「光彩陸離」「山岳崢嶸」「喋々」と辯ず」「呶呶」を要せず」などの形容も、寫聲又は擬態である。

そのつもりで之を讀まねばならぬ。　國語や支那語は、此の類ひの語に富んでゐる。

擬人

擬人の語は、擬人の意に叶ふやうに情を含めて讀む事。

○からす〳〵勘三郎。

○尾花の手を出して招くがをかし。

○よく日光の見舞ふ家には、醫者は見舞はず。

○向ふに寢たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらず。

誇張

誇張の語は、引延して強く讀む事。

○白髮三千丈。

○一日千秋の思あり。

○三人寄れば文珠の智慧。

○大砲の響は、天も落ち海も裂くるかと思ふばかりなり。

引用

引用の語は、通例は尋常の調子で讀む事。

○吾と吾を制したるは「己を屈せよ。」との教訓なりき。

○支那の傳說に「蜃氣樓は蜃(はまぐり)が氣を吐いて樓臺を爲せるものなり。」と云へり。

ぼかした語

○名古屋は此の城あるによりて名高く、「尾張名古屋は城で持つ。」とうたはれたり。

ぼかした語は、強く讀まぬ事。

○御は文字様でございます。
○不東者なれど、少しは心得て居ます。

枕詞と序詞

枕詞または序詞は、強く讀まぬ事。
○久方の（菅公の母）（月の枕詞）月の桂も折るばかり、家の風をも吹かせてしがな。
○浪間（萬葉集）より見ゆる小島の濱ひさぎ（以上は「ひさしくと云ふための序詞」）ひさしくなりぬ君に逢はずして。

掛詞

掛詞は、兼合ひを示す心して、稍緩かに讀む事。
○これは〳〵（貞室）とばかり花のよしの山。
○立ちわかれいなばの山の峯におふる、まつとし聞かば今歸りこむ。（在原行平）
○かぞふれば明日は五月のみかの原、けふまづ奈良の都（一條兼良）

出でつゝ。

緣語

緣語は少し強く讀む事。

○奈良法師栗子山までしぶり來て、いか物の具をむきぞ取らるゝ。（平家物語）（山法師の狂歌）

○比叡法師阿波の上座にはかられて、きびしく獄につかれけるかな。（奈良法師の答詠）

語路合せ

語路を合はせた語句は、原の語句と同じ趣で讀む事。

○玄關に席を改めて口上をきく。（白氏文集に曰く「林間暖酒燒紅葉」）

○主人「コレ留、もつと敷居の脇を能く掃けェ。幾ら云つても、掃き落しやあがる。」弟子「アイ。」孔糞「帚千里、これ留が掃かざる所なりだ。（詩經に曰く「邦畿千里、惟民所止」）アハヽヽヽ留は奥を潤し床は身を潤す（大學に曰く「富潤屋、德潤身」）と云ふから、髮結

床の際には、奥の用をたして水でも汲むがいい。」

反覆

反覆の語句は、速度を加へて讀む事。

○高い高い山。

○春が來た、春が來た。

○決して決して、降伏しない。

重出の語

前後に重出させてある語句は、同じ調子で讀む事。

○(上略)嗚呼哀しいかな。回顧すれば四十七年前(中略)嗚呼哀しいかな。君の訃電聞す。(中略)嗚呼哀しいかな。

○かあ〳〵烏が啼いて行く。　からす〳〵どこへ行く。

お宮の森へ、お寺の屋根へ、かあ〳〵烏が啼いて行く。

綜合と演繹

名稱聚散の場合には、降調の後に昇調を用ゐる事。

○小野道風・藤原佐理・藤原行成、之を三蹟と稱す。

言ひ直し

列叙

顚倒

○近江八景、即ち石山、秋月、勢多、夕照、矢橋、歸帆、粟津、晴嵐、三井、晩鐘、唐崎、夜雨、堅田、落雁、比良暮雪を觀たり。

言ひ直しの場合には、降調の後に昇調を用ゐる事。

○敵軍は敗北せり、否、豫定の退却を行へり。

○家に有りたきは梅、櫻、松、楓、それよりは金銀米穀ぞかし。（日本永代藏）

列叙は、文の始の方では昇昇降昇の例、文の終の方では昇昇降降の例、但し、數多の列叙には便宜中間に降調を挿む事。

○一富士、二鷹、三茄子。

○酒井、榊原、井伊、本多は家康公の四天王なり。

○五倫とは、君臣、父子、夫婦、長幼、朋友を云ふ。

○十惡は、殺生、偷盜、貪欲、愚痴、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、瞋恚。

顚倒の場合には、昇降も換る事。

○走れよ、走れよ、ころばぬやうに。

○圖らざりき、今日復た源氏の興るを見んとは。

語句を省略し、餘韻を含めて中止または終止した場合には、降調にする事。

省略

○目には青葉(を見、耳には)山ほとゝぎす(を聞き、口には)初がつを(を味はふ)。(素堂)

○行きかふ千船百船の、楫緒もほさぬ大港、あゝ賑はしき大阪市。(大阪市の歌の中)

○君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巖となりて苔のむすまで。(古今集)

對語對句

對語や對句は、文句の位置次第で昇降か降昇の事。

○白砂、青松。

○耳も目も、聾ひず霞まず。

○人は死して名を留め、豹は死して皮を留む。

○君に忠を致し、父に孝を竭せるは、小楠公なり。

漸層

漸層には、昇調（終は降調）を用ゐ、層一層高めて讀む事。

○日に新にして、日日に新に、又日に新なり。

○熱い涙、血の涙、ねばい涙を打越え、熱鐵の涙が溢れる。

○身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにす。

反語・皮肉

反語・皮肉など、裏表の意味の語には、複合の昇降を用ゐる事。

○貴殿はお偉い。

○雪ほど黑いものは無し。

疑問

疑問には昇調、但し、疑問代名詞を用ゐる場合には降調、兩岐の疑問には昇調と降調とを用ゐる事。

○鹿を馬といふ。
○姓名は何の誰といふか。
○何處に斯の如き事がある。
○名にしおはゞいざ言問はむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやと。（在原業平）
○鐘が鳴るのか、撞木が鳴るか。　鐘と撞木の間が鳴る。

假設の問

假設の問には降調の事。
○雪を黑しと云ふべきか。
○豈樂しからずや。

語路の急轉

語路の急轉には、調子も急變の事。
○これぞ此の國の―おう―富樫の介。
○山の端白くほの〴〵と―あれ寺々の鐘の聲。

感歎

稱讃や歡喜や驚愕の如き感歎には昇調、恐懼や落膽の如き感歎には降調の事。

○ああ、忠臣なるかな。

○うれしうれしや、うれしやな。

○すは、一大事よ。

○ああ、おそれ多しや。

○あはれ、あはれ、望みは絶えたり。

連鎖の語

連鎖の語には、降調と昇調とを用ゐる事。

○夕暮に咲く月見草、月見の頃も近づきぬ。

○來いと云たとて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十九里波の上。

○其（方丈記）のあるじと住みかと無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝

顏の露に異ならず。あるは露落ちて花殘れり、殘れり、といへども朝日に枯れぬ。あるは花凋みて露なほ消え、消えず、といへども夕を待つこと無し。

整調の文句

整調の文句は、通例の句讀に拘らない事。

○かさゝぎ（大伴家持）の渡せる橋におく霜の、白きを見れば夜ぞ更けにける。

○落花（太平記）の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅宿（たびね）となれば物憂きに、恩愛のちぎり淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行末も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。

言葉の畫

朗讀者の心得

第六章　朗讀雜話

なほ、朗讀について說きたい事を、雜話として此の章に述べよう。

○言葉の畫

「言葉は繪の具、聲は畫筆、心は畫工だ。」とも、「朗讀や談話などにおける表出は、言葉の彩色畫だ。」とも云ふ。

武士（鎌倉右大臣）の矢並つくらふ籠手の上に
　　霰たばしる那須の篠原

讀み上げて見れば、なるほど言葉の畫が出來る。

○朗讀者の心得

ベーンハム氏（G. W. Baynham）は、朗讀者に九箇條の心得を與へて曰く、

一、樂に立ち、肩を後に引き、頭を柔かに起せ。書物は左手で程よい距離に持て。前の頁の終りの數語を讀み了せぬうちに、次の頁を開け。

二、よく口を開け。齒を閉ぢて讀むな。息立てず、鼻の孔から呼吸せよ。（口から呼吸するな）讀み始める前に深く吸氣せよ。よく胸を張つて呼吸し、長く讀める間空氣を肺臟に蓄へるやうにせよ。

三、アクセントや重念や調子などの工合を會得するため、朗讀する前に、よく其の文章を閲讀して置け。

四、始終、朗讀者の心の中に、朗讀する文章の觀念を明かにして居よ。これは最も大切である。

五、成るたけ文章の性質と讀み聲とを一致させ、他人の作

つた文章を讀む時にも、其の樣にせよ。

六、始終、おちついて讀め。さうして常々談話する場合より緩かな位に讀むのを大凡の法とせよ。急いで讀むのは、失策の種となる。

七、音調は室の大いさに適當にし、よく讀み聲が室内に行きわたるやう、徐ろに讀め。

八、最も遠い所にゐる聽者に讀み聲の達する程合に聲をあげよ。

九、話すやうに讀むことを勉めよ。發音は明瞭に、表出は確實にして流暢であれ。しかし、如何ほど美しい音聲でも、傲慢や曲り根性が有つては、いけない。

○教師の心掛

マイクルジョン氏(J. M. D. Meiklejohn)は、朗讀の教授に就いて七箇條を示して曰く、

一、學級の中から、感受性も發音機關も共に優れた朗讀者二三人を選び、之を、他の者の朗讀を練習させる助けとせよ。

二、試驗を課す場合には、書物を持たないで、學生の朗讀を傾聽せよ。

三、明かな發音と適當な句讀と正しい重念とを要求せよ。

四、時々學生を指名して、話をさせ、又は文意を解說させよ。

五、自宅で快速に練習するやう、時々サウジ(R. Southey)の"The Cataract at Lodore"(ロドーアの瀧)の如き詩(急に讀むべきもの)などを與へ、又は adaptability, incommensurable などの如き長い

單語の表を示せ。これは發音練習のためになる。〔呂律廻しをさせるのである〕

六、朗讀の課業の間ばかりで無く、すべて授業時間には、良い發音を要求せよ。

七、時々、朗讀者を除くほか學級一同に、書物を閉ぢて朗讀を傾聽させよ。

なほ同氏は、朗讀における教師の骨折として、左の三箇條を示してある。

一、發音の力を養ひ、明瞭な發音の習慣をつける事。

二、學生をして、十分に先づ文意を會得させ、さて次に之を發表させる事。

三、學生をして、文章の美を感じ、さて又その美を他の聽者

に感じさせる事。

朗讀と人數

さて朗讀練習について、人數の上から云へば、左の諸方法を擧げることが出來る。

單獨朗讀　一人をして單獨で朗讀させること。

隨伴朗讀　優等朗讀者に劣等朗讀者を隨伴させて朗讀させること。

順番朗讀　順番によつて次々に朗讀させること。

掛合朗讀　兩人又は數人をして掛合で朗讀させること。

一齊朗讀　數人以上をして一齊で朗讀させること。

右の中、順番朗讀は、同一の文章を繰返し、又は長い文章を區分して之を行ひ、掛合朗讀は、文章中の應對人物に擬し、兩人又は數人を選んで之を行ひ、一齊朗讀は、數人乃至全體をし

て打揃つて之を行はせるのである。

○惡　讀

惡讀の數々を擧げて見れば、句讀をおろそかにするもの、變な抑揚をつけ、無暗に重念して文意を亂すもの、少しも抑揚や重念を用ゐないで文意を失ふもの、唱歌や吟詩の出來そこなひの樣なもの、アーとかカーとか耳障りの音を挿んで滯り讀みするもの、早口に走り讀みするもの、雨垂拍子で讀むもの、鶩の呻るやうなもの、蛙の鳴くやうなもの、など。

惡讀は、發音の不明瞭、地方訛りの音、呼吸の整はないこと、文章の思想感情が能く分つてゐないこと、朗讀する文章に專心一意でないこと、讀み始めの調子が適當でないので始終調子はづれになること、などから出來るのである。

癖なほし

注意の仕様

○癖なほし

朗讀の癖をなほすのは容易くは無い。癖は長い間に出來て、深く浸み込んでゐるから、之をなほすにも、可なり長くかゝつて矯正の功を積まねばならぬ。癖をなほすには、他の指導を受けるのみならず、獨り靜かに修錬せよ。それには、はじめは演說文や韻文や整句文などを用ゐない事。さうしなければ、また癖が出たがる。それで、普通の散文や對話文や日々の實際生活に密接した材料を用ゐるが宜い。さうすれば、不自然な讀みをなほし易い。はじめから上手に讀まうと云ふ野心を起さず、先づ無難に讀むことを努めよ。朗讀の名木は、さう早速には成長しないものである。

○注意の仕様

朗讀を練習する時に、いつも生徒に向つて「その發音が明かで無い」とか、「もう一度その言葉をいひ直せ」とか注意しないが宜い。　さう云へば、注意を受けた者は、その音や言葉に拘はつて、却て出來がわるくなり勝ちである。　それよりは「能く分らない」とか「まだ分らない」と云ひたい。　さう云へば、注意を受けた者は、能く分るやうにしたいと反省し、修正して分るやうにして來る。　それでも分るやうに出來なければ、「斯うだ」と正しい模範を聽かせて、之を習はせるがよい。

朗讀と呼吸

○朗讀と呼吸

子供は呼吸が速く、大人は呼吸がおそい。　それで、大人より子供が速く讀むのは、自然である。　しかし子供は、呼吸の比例よりも速過ぎる傾向がある。　一分時間の呼吸の通例の

數を云へば、初年の四十四が、五歳では二十六、尋常小學時代では二十四ぐらゐ、中學時代では二十ぐらゐ、二十歳以上では凡そ十八ぐらゐである。呼吸の比例で云へば、大人が三行を讀む間に尋常小學兒童は四行を讀み、また大人が五行を讀む間に中學生は六行を讀むのが、通例となる。さうして一定の時間に明かに發音の出來る數は、各個人及び其の年齢などによつて差があるけれども、大人は一秒時間に凡そ四音乃至五音が通例であらう。子供は大人より呼吸數が多い上に、取急ぐ傾向があるから、子供は、呼吸の比例以上に速く發音する。それで速過ぎる傾向があるのである。しかし速過ぎるのは、聽く者も聽取りにくく、讀む者や話す者も、呼吸衞生のため、品格修養のために惡い。まづは呼吸

の數の比例ほどにするのが宜からう。

○呼吸演習

朗讀の資本は聲音であり、聲音は呼吸によつて出來る。呼吸を整へ且つ之を自在にする事が出來なければ、朗讀も旨く出來ないわけである。それで、朗讀や唱歌の準備として呼吸演習を行ふことが有効である。國語や唱歌の授業時間なれば、始めに之を行ふ。その演習は左の如く種々あるが、一度には數種を選んで數回づつ之を行ふが宜い。

（一）吸氣演習

深く空氣を吸込んで腹の底まで滿たし、さて之を尋常に吐き出すこと。

（二）呼氣演習

（イ）ハ――と徐かに唱へ、水の流れ出る樣に空氣を吐くこと。

（ロ）ハ――と急に唱へ、何物か逐ひ出す樣に空氣を吐くこと。

（ハ）ハ――と小聲で迅速に唱へ、物の爆發する樣に空氣を吐くこと。

（三）呼吸演習

（甲）サイイング（sighing）

○尋常に吸つて尋常に吐くこと。

○急に吸つて尋常に吐くこと。

○尋常に吸つて急に吐くこと。

○急に吸つて急に吐くこと。

(乙)ガスピング(gasping)

暴く吸つて徐々に吐くこと。

(丙)パンチング(panting)

急に暴く吸つて幾度にも吐くこと。

呼吸演習の時、殊に多數の者に一齊に之を行はせる時には、教師は教鞭を以て、吸氣には之を上げ、呼氣には下げ、急な呼吸には急に上下し、徐々な呼吸には徐々に上下して見せるが宜い。呼吸演習は立つて行はすべきである。

屋外の練習

○屋外の練習

空氣の清らかな、靜かな屋外で、時に呼吸演習を行ふ事は望ましい。また朗讀をするのは、室内とは限らない。式辭朗讀の如きは屋外の事もある。時には屋外(特に野外)に出て、

人の妨げとならない限りにおいて、之を練習するのが宜い。

○聲の異狀

風邪に罹り、又は大聲を發したために、喉頭特に聲帶に充血を起した時などには、明瞭な音を發することが出來ない。斯樣な場合には、なるたけ發音を休ませて、故障の去る時を待たせるのが宜い。　また男子が十六歲前後となり、大人期に移りかはり目の時は、聲帶などが俄かに發育するから、從て發音の工合がかはり、いはゆる「こゑがはり」の時期がある。この時期には、當人が聲變りを恥ぢ、朗讀を好まない。　それで、この時期の者には、朗讀を强ひないが宜い。　なほ、發音の不自由な者即ち吃音などには、特別の發音練習を施さねばならぬ。　伊澤樂石學院長の「吃音矯正の理論及實際」などに、

聲の異狀

素讀と朗讀と諳誦

その方法を說かれてある。吃音は眞似によつて傳染するから、警戒せねばならぬ。

○素讀と朗讀と諳誦

世に素讀といふ事がある。即ち文章の意義を能く會得することなく、たゞ文字面だけを讀む事である。然るに朗讀は、能く文意を解した上で、論理的に又は審美的に讀む事であるから、素讀よりむづかしく、大いに修錬されねばならぬ。朗讀の練習は、先づ短い文章からはじめ、漸次に長い文章に進むべきである。且つ、むづかしい文章を練習するはじめには、ゆつくりと讀み、漸次に其の文章相當の緩急に合ふやうにするが宜い。

諳誦する文章は、既に朗讀を練習した文章の中で特に優れ

た文章を選ばねばならぬ。良くない文章は、勿論、朗讀する價値もなく、ましてや諳誦する甲斐はない。諳誦した文章は、自ら之を書き記して見れば、完全に諳誦が出來たか、何處に誤脫が有つたかと云ふことが分る。完全に諳誦した文章は、學藝の會合などで之を發表するが宜い。西洋では、さう云ふ所へ諳誦をも持出して、喝采を得ることが行はれる。我が國でも、追々諳誦を學藝會などに持出すが宜からう。晴れの場で諳誦する時に、もしや少しぐらゐ失念する箇所が有つても、これに屈詫せずに、其の所の意味の續くやう、當意即妙の補ひをつけて、すら〳〵と諳誦をしおほすべきである。

○韻文の朗讀

韻文の朗讀は、西洋においても困難とされてゐる。巧に散文を朗讀する人でも、韻文の朗讀に上手であるとは限られぬ。韻文の朗讀は、とかく吟詠振になり易い。吟詠振といふは、即ち歌ひ讀み、引摺讀みであり、詩歌の言語を音節不明瞭に長らめて、重念や抑揚などを取亂す事である。これは矯正すべき事である。だと云つて、韻文を散文と同じに朗讀するのは、韻文を殺すのである。ウォーカー氏(J. Walker)は、韻文を散文のやうに讀めと云つてあるが、しかし「散文のやうに」で有つて、「散文と同じに」では無い。同氏自らも、音樂的流暢のない韻文は、精神のない肉體のやうで有ると云つてある。謂はゆる音樂的流暢とは、長短や昂低や押韻である。漢詩は、五言や七言に平仄を配置して長短昂低を律し、平韻や仄

韻文と散文

音樂的流暢

韻で韻をふんである。和歌は、國語音の性質が母韻に豐富であるので、韻をふまないけれども、五七とか七五といふ音の數で長短を律してある。そこで、

櫻咲く御國しらすと百敷の千代田の宮に神ながらいます

といふ和歌を、散文と同じに讀むならば、

櫻咲く御國しらすと、百敷の千代田の宮に、神ながらいます。

と句讀を切るのであるが、それでは和歌としての趣味が、さつぱり無くなる。どうも、

櫻咲く　御國しらすと　百敷の、千代田の宮に　神ながらいます。

といふ様に美辭的句讀を用ゐたくなる。また、

親しく雌雄を決せんと渦卷き返す犀川を渡つて陣をぞ取りにける

といふ琵琶歌の句を、常並の散文と同じに、

親しく雌雄を決せんと、渦卷き返す犀川を渡つて、陣をぞ取りにける。

と句讀を切つて讀むならば、前後の調子が狂つてしまふ。どうしても、

親しく雌雄を決せんと、渦卷き返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。

と讀まなければ、整句文にならない。之を語法的句讀から見れば、破格の句讀と云はねばならぬが、美辭的句讀では之

を承認するのである。しかし美辭的句讀は、意味を害しない範圍において成立つものである。もし、

渦卷き返す犀川を、渡つて陣をぞ取りにける。

と朗讀して意味を害するならば、この句讀は成立たない筈であるが、こゝの音樂的流暢は、少しも意味を害しないのである。斯う云ふ風に、流暢と意味との兩全は、すべての韻文作者が心掛けて置かねばならぬ事である。さうして韻文を朗讀するには、長短や昂低や押韻における音樂的流暢を失はない限りにおいて、散文のやうに讀むことを心掛くべきである。

韻文と音樂

さても韻文と音樂とは接近するものである。言語の形式においては、韻文は音樂と共通のものであり、韻文を音樂に

變ずることは、自然の傾向である。しかし音樂は、時間上の形式に結合した、音節不明瞭の長らめた音の發表である。韻文朗讀は、時間上の形式に沒頭しない、音節明瞭な、長らめない音の發表である。けれども一歩を轉ずれば、和歌などの持前の長短法や、英詩などの持前の昂低法は、時間上の形式に變じ、之に從つてその語音の發表も、音樂のやうに變ずるのである。これが、韻文朗讀が吟詠振になり易いわけである。それで、歌ひ讀み、引摺讀みをするのは、韻文朗讀の禁物で有るが、しかし韻文の音樂的流暢を、聽く人に能く感じさせるためには、凡そは散文の朗讀より少し緩やかに讀む方が宜い。

なほ韻文における韻の讀み方に云ふべき事がある。全體、

我が國の歌には、特に韻といふものを踏まないのは、支那語や歐羅巴諸國語とちがひ、父音で終る單語の種類が甚だ少いから、自然と單語の母韻の協和が行はれるからで有らう。

しかし、

○伊勢は津で持つ。　津は伊勢で持つ。　尾張名古屋は城で持つ。

○伊勢は照る照る。　鈴鹿は曇る。　間(あひ)の土山雨が降る。

と云ふ風の例が無いでは無い。西洋では、詩歌の韻について、之を少しは重念した方が好いと云ふ說と、いや之を重念しない方が却て好いと云ふ說とがある。我が國語で、右の如き韻文を讀む場合には、この二說の何れに從ふべきもので有らうか。しかし、西洋でも、韻文の朗讀練習には、先づ無

韻の詩からはじめ、次に不規則な押韻の詩を選び、その次に規則正しい押韻の詩にうつれと云ふ說がある。これは韻に拘泥する惡い朗讀を防ぐためで有る。して見ると、右の二說の中で重念說が善いと假定しても、それは實際においてむづかしく、且つ變になり易いから、非重念說に從ふ方が先づは無難である。

宗教書の朗讀

○宗教書の朗讀

宗教書の朗讀も實に容易ならぬ事である。佛典やバイブルや祈禱書などの朗讀は、他の書物を上手に朗讀する人でも、中々上手に出來ないと云ふ。

宗教書の朗讀は、とかく坊主臭い調子になるものである。此の坊主臭い調子は、一種特別の神聖なものとして、態とら

しく朗讀することから出來はじめ、積み重なつて、とう〳〵變な調子となるのである。それで、之を普通の書物と見做して、神聖な意味の所だけは神聖に、そのほかは普通に朗讀すれば、坊主臭い所が拔けるわけである。

宗教書を上手に朗讀する練習の一法としては、はじめは之をすら〳〵と輕快に讀み、次に稍緩かに讀み、その次に敬ひ深く讀むが宜い。この間に再び惡習慣の出て來ない樣に用心して、適當な表出をする習慣を養ふべきである。即ち宗教書は、寺院傳來の惡習慣を襲がない樣に、先づ通例の書物のやうに讀み、追々と審美的に朗讀するが宜い。

語物や謠物と朗讀

○語物（かたりもの）や謠物（うたひもの）と朗讀

淨瑠璃や平家琵琶の如き語物、謠曲の如き謠物は、それ〴〵

役者と朗讀

特殊の節をつけて語り又は謠ふものであるから、その節を朗讀の參考とすることは出來ない。しかし、その節をつけるのは、主として地の所である。詞の所は、そのエロキューションを實地から取つて磨きあげたものであるから、對話文の朗讀などには、必ず之を參考すべきである。但し、詞のエロキューションとても、淨瑠璃には淨瑠璃、謠曲には謠曲の型即ち技巧が加はつてゐる。それで、朗讀には、それらのエロキューションに共通な所、數學に譬へてみれば最大公約數といふべき所を取らねばならぬ。うつかり眞似をすれば、語物や謠物に囚はれた朗讀となる。

○役者と朗讀

役者は、譜記による朗讀即ち譜誦を爲し、同時に身體の動作

をして、心情の表出を成すものである。即ち、眞に迫つて諳誦すると、之に調和するやうに動作するとは、役者の技藝である。

上手な朗讀者となるには、幾分か役者の才能がなくてはならぬ。役者の技藝の一半は、實に朗讀者の仕事である。世に或癖のある朗讀をさして役者風だと云ふ人がある。これは、下手な役者のやうな聲つきで朗讀するのを云ふ。下手な役者こそ、徒らに虛飾したり、誇張したり、哀れがつたり、沈み聲を出したり、歌ふが如くしたり、或は單調な懶け聲をしたりする。上手な役者は、さうで無い。上手な役者の言葉は、審美的朗讀と合致するものである。

晴れの朗讀

○晴れの朗讀

詔勅・勅語・勅諭の捧讀、賀表・祝辭・謝辭・告辭・訓辭・答辭・弔辭・祭文の朗讀、報告書や議案の朗讀、乃至は朗讀演說、そのほか讀み法談、義士傳讀みなど、公會における總べての朗讀は、悉く晴れの朗讀である。特に立憲帝國民においては、朗讀の必要がますゝ多くなる。

近來は初等教育や中等教育の諸學校において、エロキューションの練習が大いに行はれる樣になり、年に幾回とか月に一回とか開く學藝會などにおいて、朗讀や談話や演說などが錬り上げられるのである。小學校における例は、

一、開會の辭　二、唱歌　三、讀本朗讀　四、讀本朗讀
五、談話　六、自作朗讀　七、讀本朗讀（讀對）　八、談話
九、教師の談話　十、唱歌　十一、談話　十二、讀本朗讀

十三、自作朗讀　十四、自作朗讀　十五、教師よりの批評　中休み
十六、唱歌　十七、談話　十八、對話　十九、教師の談話
廿、唱歌　廿一、讀本朗讀（讀對）　廿二、自作朗讀　廿三、談話
廿四、對話　廿五、讀本朗讀　廿六、教師の朗讀　廿七、自作朗讀
廿八、自作朗讀　廿九、教師よりの批評　卅、唱歌　卅一、閉會の辭

また中等教育の學校における例は、

一、開會の辭　二、唱歌　三、讀本朗讀　四、自作朗讀
五、英語朗讀　六、對話　七、自作朗讀　八、讀本朗讀（讀對）
九、自作朗讀　十、英語會話　十一、演說　十二、讀本朗讀
十三、自作朗讀　中休み　十四、唱歌　十五、英語通譯
十六、演說　十七、讀本朗讀（讀對）　十八、英語朗讀　十九、自作朗讀
廿、演說　廿一、討論（時間制限）　廿二、國語批評（教師）　廿三、英語批評（教師）
廿四、唱歌　廿五、閉會の辭

この種類の會における朗讀などは、半ば晴れのものであつて、實益の上から見ても、趣味の上から見ても、少年や青年に誠に結構な修養となる。

○朗讀會

こゝに市町村の青年團體もしくは青年有志者、又は壯年以上の有志者に向つて、趣味と實益とを兼ねた一つの修養機關として、朗讀會或は讀書會といふものを設けられたいと思ふ。會する日は、毎月何の日と定めるも宜からう。或は「三餘の讀書」といふ事があるから、悉くは定日としないで、此の次には月初めの雨の日に寄合はうとか、來月は何日の夜に會しようとか、冬の間は毎月何曜毎に集らうとするも宜からう。或は會の幹事に、折々の寄合日を見計らつて沙汰

してもらふも宜からう。會した時には、前會にきめて置いた人々と若干の有志者とが朗讀し、都合で暗誦や演說などをもし、さうして終りに會衆が之を批評するが宜からう。讀み上げる文章の種類は、成るたけ偏らないやうにし、記事・叙事・論說・式文・書翰・詩歌、古文に今文、內國種に外國種、文藝・宗教・教育・政治・軍事・實業・社交等の多種多面にわたるが宜からう。古人も「讀書と尙友とは君子の事なり」と云つてある。朗讀會は實にこの二つを兼ね備へたものである。

（本文終り）

國文朗讀法附錄　國文抄

この附錄は、國文朗讀の材料として、種々の國文の中から代表的のものを若干ぬき出したのである。

國文朗讀の方法は、既に說いて置いたから、この國文抄には、一々之を附說しない。古語や難語其の他特に說明を要する事項は、「參考」の中に說いて置く。これは、朗讀の前に能く文意を會得されたいからである。

この國文抄には、國文朗讀法第五章第四節の中、調子一覽表の文例に目當とした所の文章を含んでゐる。同じ題目の文中にも、人物や事情の變化があり、詞品も多種多樣である場合には、その表出の變化も、之に伴なふべきものである。

□祈年祭の祝詞

これは、醍醐天皇の勅命に依つて編せられた延喜式の卷八に載せてあ

る祝詞である。祝詞は宣言の義、祭神の德を頌する詞。祈年祭は、二月四日に年穀の豐かであるやうに、國民に代つて朝廷から神祇に祈らせられる古來の祭である。今も伊勢神宮に勅使を立て、全國の官幣社及び國幣社に奉幣して之を行はせられる。この祝詞は、奈良朝以前の文章であつて、言辭は古雅、思想は敬虔で且つ莊重雄大である。斯の如き上古文の寶が傳へられてゐる事は、誠に有りがたい。

集侍れる神主・祝部等、もろ〳〵聞しめせと宣る。

高天原に神留ります、皇が睦つ神漏伎の命、神漏彌の命以て、天つ社國つ社と稱辭竟へ奉る皇神等の前に白さく、今年二月に御年初め賜はむとして、皇御孫命の宇豆の幣帛を、朝日の豐逆登に稱辭竟へ奉らくと宣る。

御年の皇神等の前に白さく、皇神等の依さし奉らむ奥津御年を、手肱に水沫かき垂り、向股に泥かき依せて、取り作らむ

奥津御年を、八束穂の茂し穂に、皇神等の依さし奉らば、初穂をば、千穎八百穎に奉り置きて、瓮の閇高しり、瓮の腹滿て雙べて、汁にも穎にも稱辭竟へ奉らむ。大野原に生ふる物は、甘菜・辛菜、青海原に住む物は、鰭の廣物、鰭の狹物、奥津藻菜、邊津藻菜に至るまでに、御服は明妙・照妙・和妙・荒妙に、稱辭竟へ奉らむ。御年の皇神の前に、白き馬、白き猪、白き鶏、種々の色物を備へ奉りて、皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。（中略）言別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇大御神の見はるかします四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲のたなびく極み、白雲の墜坐向伏す限り、青海原は棹柁ほさず、舟の艫への至り留る極み、大海原に舟滿ち續け

て、陸より往く道は、荷の緒縛ひ堅めて、磐根・木根履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道ひまなく立ち續けて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さしまつらば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積みおきて、殘をば平らけく聞しめさむ。又皇御孫命の御世を、た長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸へ奉るが故に、皇吾が睦つ神漏伎神漏彌の命と、鵜じもの頸根衝拔きて、皇御孫命の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。（中略）言別きて、忌部の弱肩に太だすき取掛けて、持ゆまはり仕へまつれる幣帛を、神主・祝部ども受け賜はりて、事過たず捧げ持ちて奉れと宣る。

【參考】今も神官が巧妙に祝詞をよむのを聽けば、傳つて來た調子の莊重謹嚴なことが知られる。さて祈年祭の祝詞は、其の日神祇官廳に參集した神主や祝部らに中臣氏が　天皇の御意を宣りきかすものである。「何々と宣る」と讀み上げる度毎に、神主や祝部らは「唯」と稱へて之を拜聽する定めである。「神主」「神留」の「神」は、カンと讀む。

「神留」の「神」は、崇めてそへる詞。「神漏伎」は皇祖男神、「神漏美」は皇祖女神。

「二月」は陰曆二月、但し今は陽曆二月四日を以て祈年祭を行はせられる。

「御年」は穀物。「宇豆の幣帛」は、うづ高い奉り物。「白さく」は「白す」「奉らく」は「奉る」の延言。「高天原に」の一段は、「天上にまします、朕が親しい神祖の勅命を以て、天つ神の社、國つ神の社と崇めて御德を頒し奉る諸神の前に白す。今年二月に農作をはじめ給はうとて、天皇よりうづ高い嚴めしい奉り物を頒ち給ひ、朝日が盛に映え昇る吉き時に、諸神に頒德の辭をのべ奉るとの仰せを宣りきかす」の意である。

「依さす」は「依す」の敬語。「奥津御年」は晩稻であるが、五穀を兼ねて云ふ。

「八束穂の茂し穂」は長くて大きい穂。「千穎八百穎」は數多くの稻穂。「甕」は酒をかもす大きいかめ。「汁」はもろみ酒。「甘菜」は蕪や薺の類。「辛菜」は韮や大根の類。「奥津藻菜」は沖の海草。「邊津藻菜」は磯の海草。「明妙照妙」は五色の彩ある織物。「和妙荒妙」は細絲の織物と太絲の織物、即ち絹布と麻布。「御年の皇神等」の一段は、「穀物を司る神々に天皇の白させ給ふ事は、その神々の御與へになる五穀を、肱には水沫をかき垂らし、兩股には泥をかきよせて耕作する其の五穀を、豐熟させ給ふなら、秋季報賽の新嘗祭に、初穂を澤山に供へて、又甕の頭(神前に奉る酒瓶の頭)を高く並べ、甕の腹(酒瓶のふくれた所)を滿たせ並べて、其に供へたもろみ酒にも拔穂にも頌德の辭をのべ奉らう。大野の產物は、蕪や大根など、大海の產物は、大魚に小魚に、沖の海草に磯の海草に至るまで、御服の料は色彩ある織物に絹布に麻布を捧げて頌德の辭をのべ奉らう。特に大和の葛木御歳神(かつらぎみとしのかみ)の前に、潔き白い馬、白い猪、白い馬、その他種々の物を供へ奉つて、天皇よりのうづ高い嚴めしい奉り物を以て頌德の辭をの

べ奉るとの仰せを宣りきかす」の意である。

「四方の國」は、都から四方の地をさして云ふ。「天の壁」は天の限り。「履みさくみて」は、ふみ通つて行くこと。「荷前」は諸地方の貢物の初穂。「手長の」は長き意、「手」は「た易き」の「た」の如く接頭語。「堅磐に常磐に」は、永久にの意。「茂し御世」は繁昌の御世。「鵜じもの」は鵜のやうにの意。「頸根つきぬき」は頸を地に垂れついて敬ふ意。「言別きて伊勢にます天照大御神」の一段は、「豐年を祈るに就いて、別に伊勢にまします天照大御神の大前に天皇の白させ給ふ事は、大御神の照臨し給ふ四方の國は、天の壁の立つはてまで、地の遙かに天につくはてまで、青雲のたなびくはてまで、白雲が地に接するはてまで、大海には貢の船の棹柁をほさず、舟の艫先の至り留るはてまで、外國往來の船を滿ち續け、また陸にて往來する道には、租調の荷の緒を結ひ堅めて、岩根や木の根を踏み通つて、馬の爪の至り留るはてまで、長き道を間斷無く立ち續けて、狹い國は廣くし、峻しい國は平かにし、遠い國は多くの綱を打掛けて引き寄せる如く、大御神

が國を御委託になるならば、貢物の初穂を大御神の大前に、横山の如く澤山に獻じ積み置いて、その殘りをば平安に召し上るであらう。又天皇の御代を永き御代として長へに祝ひ奉り、繁昌の御世として幸を與へ給ふ故に、朕が親しい神祖の勅命として、鵜のやうに頸を地に垂れつゝて敬ひ、天皇よりのうづ高い嚴めしい奉り物を以て頌德の辭をのべ奉るとの仰せを宣りきかす」の意である。

前の中略の所は、大御巫（おほみかんなぎ）らの齋き奉る神々への頌辭、後の中略の所は、縣の神と山の神と水の神とへの頌辭を宣り聞す所である。

「忌部」は、祈年祭の奉り物を司る家柄。「弱肩」と「太だすき」とは、對照の形容。「ゆまはり」は、いみきよめる意。「言別きて忌部」の一段は、「終に臨んで別に、仰せられるは、忌部の人の肩に襷を掛けて、持ち清めて奉仕する奉り物を、さあ、神主祝部ら受け賜はつて、過ちなく謹んで捧げ持つて、天つ神の社、國つ神の社に捧げ奉れとの仰せを宣りきかす」の意である。

祝詞において注意すべきは、對語對句の甚だ多いことである。「神漏伎

の命、神漏美の命」「天つ社國つ社」「手肱に水沫かき垂り、向股に泥かき寄せ」など一々擧ぐる遑がないほどである。

□乃木大將ヘノ感謝狀

明治三十七八年の役、旅順陷落の時、旅順攻圍軍司令官乃木陸軍大將へ呈せられた感謝狀の數ある中、これは、時の東京帝國大學總長理學博士山川健次郎氏が、同大學を代表して呈せられたものである。

旅順ハ東清ノ咽喉ニシテ、露國ノ據ツテ以テ東亞ヲ窺ヒシ所ナリ。其ノ地タルヤ、山海ノ險ヲ扼シ、峯巒深固、露國以テ要塞ト爲シ、經營十年、人工ヲ窮極シ、號シテ「難攻不落」ト稱ス。將軍第三軍ヲ督シ、聯合艦隊ト水陸相應ジ、合圍半歲、其ノ堅壘ヲ拔キ、其ノ巨艦ヲ殲シ、遂ニ敵帥ヲシテ手ヲ束ネテ降ヲ乞ヒ、城ヲ開キテ命ヲ寄スルニ至ラシム。其ノ戰鬪ノ烈、勳

功ノ偉、古來未ダ比數ヲ見ズ。是レ聖天子偉德ノ隆赫ニ由ルト雖モ、亦將軍以下、忠誠勇武、鞠躬盡瘁ノ致ス所ト云ハザルヲ得ズ。夫レ鋭ヲ挫キ、强ヲ破リ、命ヲ土芥ニ比シ、公ノ爲メ私ヲ忘レ、以テ君國ニ盡スハ、臣子ノ大節、而シテ將軍以下實ニ是レヲ以テ終始ス。豈所謂「道理貫心肝、忠義塡骨髓」モノニ非ズヤ。獨國威ヲ中外ニ發揚スルノミナラズ、東亞治安ノ端モ亦、將ニ由ツテ開カレントス。健次郎等此ノ盛事ニ際シ、其ノ關係スル所重且大ナルヲ以テ、感激ニ勝ヘズ、功勞ヲ稱讃シ、復辭ノ口ヲ衝イテ出ヅルヲ禁ゼザルナリ。

【參考】「難攻不落」「道理貫心肝」云々の引用語句は、低徊の氣味で徐ろに讀むこと。「是レ」の下の闕字の所は、少し休止して後に「聖天子偉德ノ隆赫」と莊重に讀み、「健次郎等」は、小聲にて謙遜の心を以て讀むこと。「道理貫」

心肝、」云々は、蘇東坡が李公擇に與へた書に、「吾儕雖老且窮、而道理貫心肝、忠義埋骨髓、直須談笑於死生之際。」とある。

□芳宜園大人を祭る文

これは、村田春海の歌文集「琴後集」の名文。芳宜園は加藤千蔭の號。千蔭も春海も縣居大人賀茂眞淵に學び、歌人として文章家として名高い。

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海謹みて芳宜園大人のおくつきの御前に、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらをたきて、うなねつきてまうさく。あはれかなしきかも。君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさに盛りの齡におはして、吾はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びにゆきかひたる時、あしたにまゐるとては、君のみはかしの

しりへに從ひ、ゆふべにまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子はらからにも何か異ならむ。　書よむとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、吾をおとゝいのつらにぞ敎へたまひける。

中ごろにして、君は仕への道にいとまなくおはし、われは世のさがにかゝづらひて、おのづからうとき方にて過ぎつるを、君仕へを退きたまひて後は、われも同じ街にうつりすめば、花をたづぬとては、われ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひのり、憂きことも共にうれへ、うれしきふしも共によろこびて、世にありふるわざの、まめごとも、あだごとも、かたみに隔てなく、心をかはせること、今に二十とせ、その初をくりかへし數ふれば、あひ友たること、すでに五十と

せにぞ餘りける。　さるを今おくれ奉りて、いつの世にかあひ見む、いづれの時にかことはむ。　常なきは人の身のならひぞと知るも、これをいかでか嘆かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。

あはれかなしきかも。　文の林世々におとろへ、言の葉の道日日にくだりゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてゝ古にかへり、青雲の高き心しらひをもとめ、賤機のあやあるみやびごとをたふとみいへれど、株を守り、舟にきだつくる輩、かれになづみ、これにひかれて、猶あやしみとがむる類ひは多く、たまあひて、よくうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、あまねくさとし、廣くいざなひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かになびきて、古ぶり

の歌世に盛りになりにたるなり。

そのみづから詠みいでたまへる歌をみるに、古き調べ、新しき姿とり〳〵にそなはらざるはなし。その古をうつせるは、藤原寧樂の御代におよび、後のたくみにならへるは、堀河・鳥羽の御時にくだらず。心に思ふことは、口につくさゞることなく、目にふるゝものは、言葉にのせざることなむ有らざりける。これを見て、高きもみじかきも、めでたふとまざる人なし。また事好みの人は、その名を君にしられては、身の面おこしと思ひて、世にもほこり、君のひと歌をえては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深くよろこびける。さるを今、こがねの聲忽ち止みて、玉のひゞき再び聞えずなりぬるは、わがどちの嘆きのみかは、大方の世の人のうれへともい

ひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。あはれかなしきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかにきこしめし、天翔りても遙かにみそなはせとなむまうす。

【參考】「おくつき」は墓。「うなねつきて」は首を垂れて。「あはれかなしきかも」は漢文の「嗚呼哀哉」に同じ。「十といひて一とせのこのかみ」は十一歳の年上。「そのかみ」は其の昔。「みはかし」は御佩刀。「うるはしみまつる」は親しみ奉る。「はらから」は兄弟。「おとといのつら」は弟子の列。「仕へ」は仕官。「世のさが」は世俗の事。「同じ街」は江戸京橋の八丁堀。「まめごとも、あだごとも」は眞面目な事も徒ら事も。「古にかへり」は國文復古の學をさす。「青雲の」は「高き」の修飾。「賤機の」は「あや」の修飾。「株を守り、舟にきだつくる」は、謂はゆる「守株刻舟」にて、舊に泥むの譬喩。「たまあふ」は精神が相合ふこと。「うべなふ」は承け入れること。「藤原寧樂の御代」

は、大和高市郡藤原宮にましました持統文武の二帝、並に大和生駒郡寧樂宮にましました元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七帝の御代。「堀河鳥羽の御時」は平安朝の盛運が傾いた時。「高きもみじかきも」は貴きも賤しきも。「こがねの聲、玉のひびき」は、歌調の優秀なることの譬喩。「泉の下」は黄泉の下。「天翔る」は、死者の靈が此の世に現はれ來ること。

この祭詞は、擬古文で、前の祝詞の文章に似て、對語對句が多い。但し、文の結構は唐宋の文章に學んだ所がある。しかも韓退之の「祭十二郎文」に優る位であらう。

□配所の菅公

これは、大鏡から抄出した。大鏡は我が國文體歴史の元祖で、平安朝の末つ方になつて出來たもの。作者は藤原爲業であると云ふ。左の一節は、讒言によつて、一朝にして大臣の榮職から太宰權帥に左遷された菅公の忠誠謹愼の事をしるす。

筑紫におはします所の御門も固めておはします。大貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などを、心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺の有りければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔香瓦色（わづかにかはらのいろをみる）　觀音寺只聽鐘聲（かねのこえをきく）

これは文集の白居易の「遣愛寺鐘欲枕聽、香爐峯雪撥簾看」といふ詩にもまさざまに作らしめ給へりとこそ、昔の博士どもは申しけれ。又かの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、このおとど作らしめ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御衣たまはり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞその折おぼし

めし出でて、作らせ給ひける、

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

【參考】「固めておはします」は閉門謹慎をいふ。「大貳」は太宰府の次官で、當時は藤原興範。「樓」は太宰府の官衙である都府樓をさす。「觀音寺」は天智帝敕建の名刹。「都府樓」云々は、菅家後集の「不出門」と題する律詩の頷聯。「文集」は白氏文集の略、唐の白居易(號樂天)の詩文集。「遺愛寺」云々は「香爐峯下、新卜山居草堂、初成三首」の一の頷聯。「まさざま」は優る樣。「內裏にて菊の宴」云々は、醍醐帝昌泰三年九月九日重陽節の翌十日に、菊の宴を清涼殿において催し給ひ、其の時菅公は「秋思」といふ敕題に應じ奉つて「秋思應制」の律詩の頸聯に「君富春秋臣漸老、恩無涯岸報猶遲」と申されたのを叡感有つて、御衣を賜はつた事を云ふ。「おとど」は大臣。

□小萩が下

これは、源氏物語桐壺の巻の一節で、いはゆる野分の段である。源氏物語は、光源氏の君を主人公とした小説で、紫式部の筆に成つた平安朝第一の大作である。御寵愛を蒙つた桐壺の更衣(女官の名)の歿後に、若宮(後の光源氏)は更衣の里で祖母君に育てられて居られたが、野分の夕に御門が一入御物思ひになり、御使をかの里方へ立てさせられる所が、この一節である。

野分立ちて、にはかに膚寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靫負の命婦といふを遣はす。夕月夜のをかしきほどに、出し立てさせ給うて、やがてながめおはします。斯う様の折は、御遊びなどせさせ給ひしに、心異なる物の音をかきならし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異な

りし氣はひかたちの、面影につとそひて思さるゝも、闇の現には、なほ劣りけり。

命婦かしこにまかで着きて、門引き入るゝより、氣はひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てて、目安きほどにて、過ぐし給ひつるを、闇にくれて、ふし沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらず、さし入りたる。南面におろして、母君もとみにえ物ものたまはず。「今までとまり侍るが、いと憂きを、かゝる御使の蓬生の露わけ入り給ふにつけても、いと恥づかしうなん」。とて、實にえ堪ふまじく泣い給ふ。『參りては、いとゞ心ぐるしう、心肝も盡くるやうになん。』と、内侍のすけの奏し給ひしを、

物思ひ給へ知らぬ心地にも、實にこそいと忍びがたう侍りけれ。」とて、やゝためらひて、おほせごと傳へきこゆ。

『暫しは夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひしづまるにしも、覺むべき方なく堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひあはすべき人だになきを、忍びては參り給ひなんや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中にすぐし給ふも、心ぐるしう思さるゝを、疾く參りたまへ。』など、はか〴〵しうも宣はせやらず、むせかへらせ給ひつゝ、かつは人も心よわく見奉るらんと、思しつゝまぬにしも有らぬ御氣色の心ぐるしさに、承はりも果てぬやうにてなん罷で侍りぬる。」とて、御文たてまつる。「目も見え侍らぬに、かく畏きおほせごとを光にてなん。」とて見たまふ。

「程へば少しうちまぎるゝ事もやと、待ちすぐす月日にそへて、いと忍びがたきは、わりなきわざになん。いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさを、今はなほ昔の形見になずらへて、物したまへ。」など、こまやかに書かせたまへり。

「宮城野の露吹きむすぶ風の音に、
小萩がもとを思ひこそやれ。」

とあれど、え見たまひはてず。「命ながさの、いとつらう思うたまへ知ららるゝに、松の思はんことだに恥づかしう思ひたまへ侍れば、百敷にゆきかひ侍らんことは、ましていとはばかり多くなん。畏きおほせごとを度々うけたまはりながら、みづからは得なん思ひたまへ立つまじき。若宮はい

かに思ほし知るにか、參りたまはん事をのみなんおぼし急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつり侍るなど、うちうち思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゝしき身に侍れば、かくておほしますも、いま〳〵しう忝く。」などのたまふ。「宮は大殿ごもりにけり。見たてまつりて、くはしく御ありさまも奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらんを、夜ふけ侍りぬべし。」とていそぐ。

【參考】「野分立つ」は、初秋の頃あらしめいて風の吹くこと。「常よりも」云云は、折柄とて御門は常よりも桐壺の更衣を思ひ出し給ふことが頻りであること。「靱負」は命婦の名。「命婦」は内侍司の下級の女官。「をかしき」は面白きこと。「やがてながめ」は、御物思ひが深いから、命婦を御遣しになつて、そのまゝ夕月夜をながめて、茫然として居たまふの意。「斯う樣の折」は、かやうに夕月夜の面白い時。「御遊び」は管絃の遊びをさす。

「心異なる物の音」は、琴や琵琶の格別なる音曲。「はかなく」云々は、一寸申し上げる言葉。「氣はひ」は氣まへ。「かたち」は容貌。「つとそふ」は、ひたと面影の立つ意。「闇の現」云々は、古歌に「うばたまの闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり」とあるが、その「闇の現」の方が、死後の面影よりましてあるとの意。

「まかて着く」は、御所から退出して御里方につく意。「門引き入る」云々は、牛車を門から引き入れる時からが、もう哀れな樣子である意。「やもめ住み」は、故更衣の母君は、按察使大納言といふ夫に早く後れて寡居して居られた事を云ふ。「人ひとり」云は、更衣一人を後見するために彼是と住居を修理して、見苦しくは無い程度にくらされたこと。「闇にくれて」は、藤原兼輔の歌「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ路にまどひぬるかな」をにほはせて、更衣をかなしむ嘆きにくれまどひて母君の伏し沈みたまふこと。「月影」云々は、紀貫之の歌「とふ人もなき宿なれど來る春は、八重むぐらにも障らざりけり」をにほはせてある。「八重葎」は、茂つ

たむぐらと云ふ草。「南面におろし」云々は、家の正面に命婦を牛車から下して母君が對面されたが、互に默して、直ぐには言葉をかけかねられること。「今まで」云々は、母君が「今まで生き殘つて居ますのが、いかにも辛いに、斯樣な御使が、荒れた宿の草の露をわけて御尋ね下されたについても、いかにも御はづかしう存じます」と云つて、いかさま堪へきれぬ樣に泣かれたこと。「參りては」云々は、「御里方へ參つて見奉れば、一入御氣の毒で、心肝も消えるかと思はれる程である」と、先に御使に參つた典侍（内侍の次官）が申されたが「只今參つて見奉れば、物事の分別を能く存じませぬ愚かな心にも、誠に御氣の毒に存じて堪へきれませぬ」と、命婦が暫しちうちよして後に、徐ろに御門の仰せ言を傳へられること。「暫しは」云々は、「御門の仰せ言で、「更衣が世を去つた後暫くは、たゞ夢のやうに思ひたどられたが、段々思ひしづまつて見ても、その夢心地がさめさうにも無く、堪へがたいのは、どうしよう事かと語り合はされる人さへ無い故に、母君には、そつと參内されたい。若宮がいかにも心もとな

く、露深い里方で月日を過されるのも、氣の毒に思はれる故に、早速參内したまへ」との御意。以下は命婦の詞で、「はき〳〵とも仰せられず、御涙にむせばせられつゝ、又一つには、人からも心よわく見奉るであらうと、御自身に御氣兼ねあそばされぬでもない御樣子が、御氣の毒さに、少々承はり殘すやうで、こちらへ參りました」と申して、御書を渡されたこと。「目も」云々は母君の詞で、「老いぼれて目も能く見えませぬが、斯樣に畏れ多い仰せ言を光と致して拜讀仕りませう」の意。

「程へば」云々は御書の文面で、「時がたてば、少し思ひ紛れる事もあらうかと、待ちくらすに、どうして益々堪へがたくなるのは、仕樣のない事である。幼い人もどうして居るかと思ひやりつゝ、そなたと共に養育せぬのが心もとない故に、今は若宮を更衣の形見ぞと思つて、若宮をつれて參内したまへ」との御意。「宮城野の露」云々は、「野分立つて、禁中においても涙が催されるについて、若宮の事が思ひやられる」との御意、陸前の宮城野といふ萩の名所を禁中に言ひよせ、小萩(實は木萩)を以て若宮に言

ひよせ給うてある。「露ふきむすぶ」は、細き露を風が吹きよせて玉の露を成すを云ふ。

「命ながさ」云々は母君の詞で、「みすぼらしく命長らへて居るのが、いかにも辛く思ひ知られますので、古歌に「いかにして在りと知られし、高砂の松の思はんことも恥づかし」と申す事を思ひますれば、禁中に出入仕るといふ事は、格別にも憚り多う存じます。勿體ない仰せ言を度々戴きながら、自身には、とても參内の決心を致すことが出來かねます。併し若宮は、どのやうに思し召されるであらうか、參内する事ばかり思ひ急がれる様に見えますから、御尤もと悲しう見奉つて居ますなどと、内々思つて居ます事情を奏上したまへ。いま〳〵しい私の身でございますれば、斯うして此處に若宮がゐらせられるのも、世間も憚り、勿體なう存じます」の意。

「宮は大殿ごもり」云々は命婦の詞で、「若宮は御寢成つてゐらせられる様でございます。實は御目にかゝつた上で、委しく若宮の御有様をも奏

上仕りたいので御座いますが、御門が御待ちになつてゐらせられように、夜も追々更けてゆきませう」と歸りを急ぐこと。

□俊基朝臣の關東下向

これは、太平記の「東下り」である。太平記は南北朝の末頃に出來た戰記であるが、著者は明かでない。本文は、元弘元年藤原俊基朝臣が北條氏の討滅を圖つて、六波羅に召捕られ、夫から鎌倉へ送られる道行である。

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後召し捕はれて、鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、實にもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら隱謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召し捕はれて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さゞるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ。路次に

て失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと、思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅宿となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行末も知らず思ひ置き、年久しくも住み慣れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞあはれなる。憂きをば留めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏み鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世を宇彌の野に鳴く鶴も、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく森山の木の、下露に袖ぬれ

て、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎ行けば、鏡の山は有りとても、泪に曇りて見え分かず。　物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を留めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。番馬・醒井・柏原・不破の關屋は荒れ果てて、猶漏るものは秋の雨の、何時か我がみのをはりなる、熱田の八劔伏し拜み、潮干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に、引く人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にし有れば、誰かあはれと夕暮の、晩鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。　元暦元年の比かとよ、重衡中將の東夷のために囚はれて、此の宿に着き給ひしに。

東路の埴生の小屋のいぶせきに、
故郷いかに戀ひしかるらん。

と長者の女が詠みたりし、其の古のあはれまでも、思ひ殘さぬ泪なり。　旅館の燈かすかにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶へて、天龍河を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。　隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇れば、餉進らする程とて、輿を庭前に昇き止む。　轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなりと答へければ、承久の合戰の時、院宣受けたりし咎に依りて、宗行卿關東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡
今東海道菊河　宿西岸而終命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかゝるためしをきく川の、
おなじ流れに身をやしづめん。

大井河を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと、思ひ續け給ふ。島田・藤枝に懸りて、岡部の眞葛裏枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道も無し。昔業平の中將の住所を覓むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、斯くやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ泪を催され、向ふはいづく三保が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高峯を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひにくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、憂き世を廻る車返、竹の下道行きなやむ、足柄山の巓より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもは無けれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

【參考】「先年」は、鎌倉討伐の謀が發覺した正中元年。「今度の自狀」は、法勝寺の僧の自狀に俊基主謀とある。「落花の雪」は、藤原俊成の歌に「またや見む片野(河内)の御野の櫻狩花の雪ちる春の曙」。「紅葉の錦」は、藤原公任

の歌に「朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦きぬ人ぞなき」。「打出の濱」は大津の湖畔。「宇禰の野」は近江、古今集に「近江より朝立ちくればうねの野に、たづと鳴くなる明けぬ此の夜は」。森山は近江、紀貫之の歌に「白露も時雨もいたくもり山は、下葉殘らず色づきにけり」。「鏡の山」は近江、大伴黑主の歌に「鏡山いざ立ちよりて見て行かむ、年へぬる身は老いやしぬると」。「老蘇の森」は近江。「故郷を雲や隔つらむ」は、韓退之の「雲横秦嶺家何在」と同意。「番馬、醒井、柏原」は近江。「不破の關」は美濃、藤原家隆の歌に「人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにし後はたゞ秋の風」。「我がみのをはり」は「身の終り」と「美濃尾張」との掛詞。「熱田の八劒」は尾張の熱田神宮の八劒殿に祀つてある寶劒八口。「鳴海潟」は尾張の愛知郡邊の內海、藤原秀能の歌に「小夜千鳥聲こそ近くなるみがた、更けゆく月に潮滿つらむ」。「いづくと遠江」は「遠し」と地名との掛詞。「あはれと夕暮」は「云ふ」と「ゆふぐれ」との掛詞、但し假名ちがひ。「池田」は遠江。「長者」は熊野といふ者。「小夜の中山」は遠江、西行法師の歌に「年たけて又こゆべしと思ひき

や、命なりけり小夜の中山」。「陸行く駒の足早み」は月日の早く立つ喩。「亭午」は正午。「菊川」は遠江。「宗行卿」は史實に據つて「光親卿」を訂正。「南陽縣菊水」は支那の河南省に在る。風俗通に「南陽縣有甘谷、谷中水甘美、上有大菊、落水流下、得其滋液、谷中人家飲此水、上壽百二三十、七八十者則爲夭」。「龜山殿」は、京都の西、嵯峨の龜山離宮、後醍醐帝が行幸になつて後基らも陪從した所。「龍頭鷁首の船」は貴人の乘用にて、其のへさきに水難除けとして、龍の頭、又は鷁といふ水鳥の首を飾つた船。「島田・藤枝・岡部・宇都の山」は駿河、在原業平の歌に「駿河なる宇都の山邊のうつゝにも、夢にも人に逢はぬなりけり」。「清見潟」は昔の關所。「三保ヶ崎・興津・蒲原」は駿河。「富士」云々は、藤原家隆の歌に「ふじのねの煙はなほぞ立ちのぼる、上なきものは思ひなりけり」。「浮島ヶ原・車返・竹ノ下」は駿河。「あり立つ田子の白らもうき」は源氏物語の歌句による。「足柄山・大磯・小磯・小餘綾・伊蘇」は相模、小野小町の歌に「陸奥に世をうき島もありといへば、關こゆるぎのいそがざらなむ」。「袖にも波はこゆるぎ」は、涙にむせぶ情を含めてゐ

る。この東下りは、多くは七五調の整句文になつてゐる。その文章の中で特に注意すべきは、掛詞の甚だ多い事である。即ち「山路を打出の濱」「行きかふ人に(逢)近江路」「世を(憂)宇禰の野」「時雨も痛く(濡)森山」「夜の間にも老蘇」「我がみのをはり」「汐干に今や(成)鳴海」「いづくと遠江」「あはれと(云)夕暮」「ためしを(聞)菊川」「浮世をめぐる車返」「波はこゆるぎのいそぐ」と巧に掛けてある。なほ對語對句もあり、引用語もあり、其の他修飾に富んでゐて、而も煩しさを感じないで、興趣の盡きないことを覺えるのである。

□國引

これは、出雲風土記に見える「意宇」といふ地名の傳說である。出雲風土記は、天平五年に出來上つた出雲の地誌である。意宇は、元一郡の名として有つたが、明治廿九年に島根・秋鹿の二郡と併せて八束郡とされた。

國引きませる八束水臣津野命の詔り給はく「八雲立つ出雲の國は、狹布の稚國なるかも。初國小さく作らせり。かれ

如き擬態語や「おる」の如き擬聲語を讀むには特に注意あるべきこと。

□辨慶の太刀取り

これは、源義經の事を主として叙述した義經記の一節である。義經記は、作者は分らないが、蓋し室町時代の作であらう。この一節は、西塔の武藏坊辨慶が「人の重寶は千そろへて持つぞ。奥州の秀衡は、名馬千疋、鎧千領持つ。松浦の大夫は、やなぐひ千脚、弓千張持つ。我は人の佩きたる太刀千振取つて、我が重寶にせん。」と志し、夜な夜な京中に行んで、人の太刀を九百九十九振取つて、千振目に義經の太刀を取らうとする所である。

六月十七日辨慶五條の天神に參りて、夜と共に祈念申しけるは、「今夜の御利生に、良からん太刀を與へてたび給へ。」と祈誓し、夜深ければ、天神の御前に出で、南へ向つて行きけれ

ば、人の家の築地の際に佇みて、天神へ參る人の内に、良き太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。曉方になりて、堀河を下りに行きければ、面白く笛の音こそ聞えけれ。辨慶これを聞きて「面白や、小夜ふけて天神へ參る人の吹く笛は、法師やらん、男やらん。良からん太刀を持ちたらば取らん。」と思ひて笛の音の近づきければ、さしくゞみて見れば、未だ若き人の、白き直垂に、胸板を白くしたる腹卷に、金作りの太刀の心も及ばぬを佩かれたり。辨慶これを見て「あはれ、太刀や。何ともあれ取らんずるものを。」と思ひて待つ所に、後に聞けば恐ろしき人にてぞ有りける。辨慶は爭でか知るべき。御曹子は見給ひて、あたりに目をも放たれず。木の下を見給ひければ、けしからぬ法師の、太刀わきばさみて立ちたる

を見給へば、「きやつは徒者ならず。此の比都に人の太刀を奪ひ取る者は、きやつにて有るよ。」と思はれて、少しもひるまず、かゝり給ふ。辨慶、「さしも健氣なる人の太刀をだにも奪ひ取るに、まして是程なる優男、寄りて乞はゞ、姿にも聲にも怖ぢて、出さんずらん。實に吳れずば、突き倒し奪ひ取らん。」と支度して、あらはれ出でて申しけるは、「只今靜まりて敵を待つ所に、けしからぬ人の、物の具して通り給ふこそ怪しく存じ候へ。左右なく得こそ通すまじけれ。然らずば、その太刀こなたへ給はりて通られ候へ。」と申しければ、御曹司これを聞き給ひて、「この程、さる烏滸の者ありとは聞き及びたり。左右無く得こそ取らすまじけれ。欲しくば、寄りて取れ。」とぞ仰せられける。「さては見參に參らん。」と

て、太刀を抜いて飛んでかゝる。　御曹司も小太刀を抜いて、築地の下に走り寄り給ふ。　辨慶これを見て、「鬼神とも云へ、當時我を相手にすべき者こそ覺えね。」　とて、もつて開いて丁と打つ。　御曹司、「きやつは健氣者かな。」　とて、電の如くに左手の脇へ、つと入り給へば、打ち開く太刀にて、築地の腹に切先打ち立て、拔かんとしける隙に、御曹司走り寄りて、左手の足をさし出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀をがらりと捨てたるを取つて、「えいや」と云ふ聲の中に、九尺ばかり有りける築地にゆらりと飛び上り給ふ。　辨慶、胸痛く踏まれぬ。　鬼神に太刀取られたる心地して、呆れてぞ立つたりける。

【參考】「六月十七日」は承安三年、義經時に十五歳。「金作りの太刀」云々は、

黄金で飾つた太刀の、欲しくてたまらぬもの。「御曹司」は、源氏本家部屋住みの子息をいひ、此は義經をさす。「きやつ」は彼奴即ち「あいつ」。「物の具して」は鎧着て。「左右なく」は、とかう無く。「烏滸の者」は馬鹿者。「見參」は御相手の意。

□鹽冶判官最期の場

これは、假名手本忠臣藏の四段目判官腹切の場である。この淨瑠璃は竹田出雲・三好松洛・並木千柳の合作であり、時代を憚つて、江戸を鎌倉に、吉良上野介を高師直に、淺野内匠頭を鹽冶判官に作りかへ、家老大石内藏助を大星由良之助、その子主税を力彌と變名してある。此の場は、鎌倉の扇が谷の上屋敷に閉居中、上使が立つて、判官に切腹申付けられる所である。

力彌御意を承り、兼て用意の腹切刀、御前に直せば、心靜かに肩衣取退け、座を寛げ、「コレ〳〵御檢使、御見屆下さるべし。」

と、三方引寄せ、九寸五分押戴き、「力彌、力彌。」「ハア。」「由良之助は。」「未だ參上仕りませぬ。」「フウ、エヽ、存生に對面せで殘念、ハテ殘多やな、是非に及ばぬ、是迄。」と、刀逆手に取直し、左手に突立て引廻す。御臺二目と見も遣らず、口に稱名、目に涙。廊下の襖踏開き、驅込む大星由良之助、主君の有樣見るよりも、ハツと計りにドウと伏す。跡に續いて千崎・矢間其外の一家中、バラ〳〵と驅入りたり。「由良之助、待兼ねたはヤイ」。「ハア御存生の御尊顏を拜し、身に取つて何程か」「オヽ我も滿足滿足、定めて仔細聞いたであろ、エヽ無念、口惜しいはヤイ」。「委細承知仕る。此の期に及び、申上ぐる詞も無し。只御最期の尋常を願はしう存じまする。」「オヽ言ふにや及ぶ。」と兩手を掛け、グツ〳〵と引廻し、苦しき息をホツと吐き、「由良

之助、此の九寸五分は汝へ遺物、我が鬱憤を晴らせよ。」と、切先にて氣管刎切り、血刀投出し俯伏に、ドウと轉び息絶ゆれば、御臺を始め列居る家中、眼を閉ぢ息を詰め、齒を喰ひしばり控ふれば、由良之助にじり寄り、刀取上げ押戴き、血に染まる切先を、打守り打守り、拳を握り、無念の涙ハラ〳〵。判官の末期の一句、五臓六腑に染渡り、扨こそ末世に大星が、忠臣義臣の名を揚げし、根ざしは斯くと知られけり。

【參考】「御檢使」は石堂右馬之丞。「御臺」は「御臺所」の略名はかほよ御前。「稱名」は念佛。「千崎」の名は彌五郎。「矢間」の名は重太郎。「言ふにや及ぶ」は言ふに及ばぬの意。「氣管」は喉笛。「五臓六腑に染渡る」は、心にしみわたるの意。五臓は肺・心・脾・肝・腎。六腑は大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱。

□榮螺の自慢

これは、鳩翁道話から抄出した。この書は、柴田鳩翁の道話を其の子武修が聞書きしたものである。翁は中年に盲となり、諸方で心學を講說した、京都の人である。

あの榮螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。そこで、あの榮螺が、何ぞと云ふと、内から蓋をピツシヤリ締めて、丈夫な事ぢやと思うてゐまする。鯛や鱸が羨ましがり「コレ榮螺や。御前の要害は、大丈夫なものぢや。内から蓋を締めたら最後、外からは手がさせぬ。さりとては、結構な身の上ぢや。」と云へば、榮螺が髭を撫でて「御前方が其の樣に云うてくれるけれど、あまり丈夫な事もない。しかしながら、マア斯うして居れば、まんざら難儀な事も無い。」と卑下自慢してゐるとき、ザツプリと音がする。榮螺

が内から蓋を締めて、ジツト考へてゐながら、今のは何であつたか知らぬ、網であらうか、釣針であらうか。是ぢやによつて、要害が常にして無いと、どうもならぬ。鯛や鱸は捕られたか知らぬ。さても心もとない無い事ではある。したが先づ俺は助かつた」と、とかくするうち時刻も移り、もう宜からうと、ソツト蓋をあけ、あたまをヌツトさし出して、そこら見まはせば、何と無う勝手が違ふやうな。よく〳〵見れば、魚屋町の肴屋の店に、この榮螺十六文と正札付に成つてゐました。ナント面白い話でござりませうか。おれがおれがを引さらへて、家も藏も、知慧も分別も、臺も後光も、丸で取られてしまうた事は知らず、氣の毒な榮螺。このやうな連中が、唐や天竺には、得て有るものでござります。とかく、

おれが〳〵は頼みにはなりませぬ。或人の道歌に、

階無うて雲のそらへは登るとも、
おれが〳〵は頼まれはせず。

これを「放其心而不知求。」と孟子が仰せられたのでございます。

【參考】この話は、巧に榮螺を擬人にしたもので、鳩翁の達觀はおほむね此の類ひ。「唐や天竺」と云ふは、暗に聽衆を諷したのである。

□西光が嘲笑ひ

これは、平家物語からの抄出。平家物語は、主として平家の榮枯盛衰を叙述したもの。作者は信濃前司行長であると。西光は藤原師光の法號、後白河法皇に仕へ、中納言家成の族と稱し、加賀守となる。子師高ら白山の僧徒と爭ひ、僧徒は延暦寺に依つて之を訴へた。西光大いに之

を怨み、天台の座主明雲を法皇に讒して流罪にあはせた。その後、西光は、一味の者と鹿谷に密會して平家討滅を圖つた事が泄れ、捕へられて遂に斬られた。この一節は、一代の豪傑清盛と大剛の者西光との應對である。

入道相國大床に立ちて暫し睨まへ「あな惡くや、當家傾けうとする謀反の奴がなれる姿よ。しやつ爰へ引き寄せよ。」とて、西光を緣の際へ引き寄せさせ、物履きながら、しやつらをむず〳〵とぞ踏まれける。「本より己等が樣なる下臈の果を、君の召し使はせ給ひて、なさるまじき官職をなしたび、父子共に過分の振舞をすると見しに合せて、過たぬ天台座主、流罪に申し行ひ、剩へ當家傾けうとする、謀反の輩に與してけるなり。有りのまゝに申せ。」とこそ宣ひけれ。西光

本より勝れたる大剛の者なりければ、ちとも色を變ぜず、わろびれたる氣色もなく居直り、あざわらひて申しけるは、「院中に近く召し使はるゝ身なれば、執事の別當、成親の卿の軍兵催され候ふ事にも、與せずとは申すべき樣なし。それは與したり。但し、耳に當る事をも宣ふものかな。他人の前は知らず、西光が聞かんずる所にて、さやうの事をば得こそ宣ふまじけれ。そも〳〵御邊は故刑部卿忠盛の嫡子にておはせしが、十四五までは出仕もし給はず。故中御門の藤中納言家成卿の邊に立ち入り給ひしをば、京童は例の高平太とこそ云ひしが。然るを保延の頃、海賊の張本三十餘人搦め進ぜられたりし勸賞に四品して、四位の兵衞佐と申ししをだに、人皆過分とこそ申し合はれしか。殿上の交りを

だに嫌はれし人の子孫にて、今太政大臣まで成り上つたるや、過分なるらん。固より侍程の者の受領・檢非違使に至る事、先例法例無きにしもあらず。何かは過分なるべき。」と憚る所も無う言ひ散らしたりければ、入道相國餘りに腹をすゑかねて、暫しは物をも宣はず。やゝ有りて入道宣ひけるは、「しやつが首左右無く斬るな。よく〳〵糺問して、事の仔細を尋ね問ひ、その後河原へ引き出でて、頭を刎ねよ。」とぞ宣ひける。

【參考】「しやつ」は夫奴の轉訛。「しやつら」は夫奴が面の義。「下薦」は下位下官。「わろびれ」は臆して見苦しいさま。「成親」は藤原家成の子、檢非違使別當、權大納言に進み、鹿谷密會の主謀である。「得こそ宣ふまじけれ」は、宣ふことを得ざれの意。「御邊」は「そこもと」に同じ。「高平太」は、高下駄

をはいて歩く平家の太郎の意。「張本」は首謀。「勸賞」は手柄の褒美。「四品」は四位、實は親王の位に何品といふべきもの。「殿上の交り」云々は、忠盛が初めて昇殿を許された時に、同席をきらはれた事をいふ。「受領」は國守、西光は加賀守となる。「腹をすゑかね」は、我慢しきれずして怒ること。「左右無く」は、直ちにの意。「河原」は鴨川の河原。

□入間川

狂言記の「入間川」を此に抄出した。狂言は、能樂(謠曲)と共に町時代に發達した。謠曲と狂言との文學は、室町時代の特色を具へてゐる。さて「入間川」は、武藏野の入間川において、八幡大名と入間の何某とが問答する喜劇である。入間川は、武藏の川越町の西から北へ流れて荒川に入る川。大名は、訴訟が叶つて京から國元へ歸る所、何某は、用事が有つて川向ふへ行く所である。

(上略)大名「最前に川の名を問へば、入間川といふ。渡瀨はと問

へば、こゝは深い、上へ廻れといふ。　總じて入間詞には、逆詞をつかふにより、こゝを深いといふは、淺いといふ事、上へ廻れといふは、こゝを渡れといふ事と心得て、渡つたれば、諸侍に欲しうもない水をくれた程に、成敗するぞ。」入間何某「さては、こなたには、入間詞をよく御存じで、御つかひなさるゝナ。」大名「中々知つて居る。」入間「何と成敗せうと仰せらるゝは、定で御座るか。」大名「中々定ぢや。」入間「とてもの事に御誓言で承りませう。」大名「何が扨、弓矢八幡、成敗いたす。」入間「ヤラ心安やざつとすんだ。」大名「是はいかな事。成敗せうといへば、アラ心安や、ざつとすんだといふは、どうした事ぢや。」入間「されば其の事ぢや。　こなたは入間詞を御存じて御遣ひなさるゝによつて、成敗せうと仰せらるゝは、弓矢八幡、成

敗せまいといふ事ぢやと思うて、アラ心安や、ざつとすんだと申す事で御座る。」大名「是でほうどした。助けずばなるまい。」太郎冠者「お助けなされたが宜う御座りませう。」大名「コレ〳〵我御料の命を最早助くるでもおりないぞ。」入間「身共が命を助けもなされねば、忝うも御座らぬ。」大名（大笑）「さても〳〵をかしい事かな。ヤイ〳〵太郎冠者。命を助かつて、忝うないといふは、をかしい事でないか。何ぞやつて入間詞を聞かう。」（中略）

入間「一段の仕合で御座る。賺さうと存ずる。」大名「ノウノウコレ〳〵先づ戻りやるな。」入間「イヤ是を置いて參るまい。」大名「イヤ用がおりない。先づ戻りやるな。」入間「何事でおりやる。」大名「何と其の如くに色々の物貰うて、眞實嬉

しいか、嬉しうないか、おしやれ。」入間「イヤ否うも御座らぬ。」大名「イヤ〳〵それは入間様。最早入間詞をサラリと捨てて、眞實嬉しいか、嬉しうないか、おしやれ。」入間「眞實は思し召しても御らうぜ。此の如くに、太刀かたな上下小袖まで下されて、何がさて否うも御座らぬ。」大名「ハテ扨くどい人ぢや。その入間詞をサラリと止めて、眞實をおしやれ。」入間「眞實は、何が御座らう。此の如くに結構な物さま〳〵下されて否うないといふ事が御座らうか。身に餘りて否う御座る。」大名「何と否い」入間「なか〳〵。」大名「否いとは否うないといふ事であらう。こちへ返せ。」入間「ヤイ〳〵、やることでないぞ。」大名「どうでも返さぬか。サア取つたぞ取つたぞ。」入間「ヤイ〳〵、たらしめ。どこへやる事でないぞ。

やるまいぞ〳〵〳〵。」

【參考】「諸侍に欲しくもない水をくれた」は、武士を溺らせたことをいふ。「成敗するぞ」は、手打にするぞの意。「中々」は、狂言では「さやう」と答ふる語。「定て御座るか」は、誠であるかの意。「弓矢八幡」は、弓矢の道の神八幡さまに誓言する時の語。「ほうどした」は、理詰めにされて「困つた」の意。「我御料」は其方の意　「おりないぞ」は「御座らぬぞ」。「太郎冠者」は、第一の家僕をさして云ふ。中略の所には、大名が京折の扇や、太刀や、上下小袖を與へて、入間詞を面白がる。「是を置いて」は、下され物を家に持ち歸り置いての意。「入間樣」は入間式の詞の意。「御らうぜ」は御覽ぜよ。「たらしめ」は詐欺師奴。

前に「何と成敗せうと仰せらるゝは定て御座るか」と何某がそらとぼける所と、後に「ハテ扨くどい人ぢや。その入間詞をさらりと止めて、眞實をおしやれ」と大名がそらとぼける所とは、前後相對して肝要の所である。

□孔糞の怪氣餤

これは、江戸時代の滑稽小說「浮世床」の一節である。「浮世床」は「浮世風呂」と共に、式亭三馬の名作であり、一方は洗湯に、一方は理髮店に入り來る、世の樣々の人物を巧に寫したものである。この一節は、その中の一人「孔糞」と名づける、世間知らずの漢學者の怪氣餤である。

油で煮しめた樣なる太織の綿入、藍天鵞絨の紋付、裾からぼろをさげて、薙刀形の草履をはき、頭は月代ぼう〳〵、髯むしやくしやとして、ぢぢむさき事いはん方なし。その癖に氣象高く、辯舌滔々として高慢を吐くは、素讀指南の先生、社盟を書き集めて、やうやく五六輩に過ぎざる貧書生と見えたり。「殘念閔子騫」といふ古風なる口癖あり。生國はいづれ片田舍の者、遊學の間四五年になれど、江戸の事はむちやな

り。　孔冀「どうだ、主人。夙に起き夜に寐ねて、かせぐものだの」。浮世床主人蠻五郎「ヤ先生さん。お早うございます。」孔「おれは清貧を樂しむ氣だから、早く起きる氣も無いが、家鹿の爲に起されたヤ。あたけて〳〵どうもならぬ。」蠻「嘉六が酒にでも醉つて來やしたかネ。」孔「この男は何を云ふ、鼠が酒に醉つて、たまるものか。ハヽヽヽ」「ヘエ。わつちは又筋向ふの嘉六が、例の生醉であたけたかと思ひやした。」孔「何さ。家鹿とは鼠の異名さ。」蠻「鼠にも表德がごぜえやすかネ、」孔「表德かは知らぬが、社君だの家兎だのと、色々異名がある。」　弟子留吉「左官だの壁だのとつけるも尤もだネ。あいつが壁へ穴を明けちやあ、左官さわぎだ。」「べらぼうめ、だまつて居ろ。」留「アイ」とへこんで門口を掃除してゐる。孔「獨居

してゐると、鼠までが馬鹿にしをる。『一屋無猫老鼠走白晝』と左傳にもある通り、おれを侮つて、どうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも欲しいものだア。」留「逐鼠丸とは京傳の本に書いてありやす。直さま買へやすはナ。」鬢「馬鹿アいへ。あれは讀書丸だは。」留「ほんにさうだつけ。」孔「どりや一つ剃つて貰はうか。」と、腰高の盥へ湯を汲み、月代をもんでゐる。鬢「コレ留。もつと敷居の脇を能く掃けェ。いけぞんぜえな箒棒だ。幾ら言つても掃き落しやあがる。留「アイ」。孔「箒千里、惟留が掃かざる所なりだ。アハヽヽヽ留は奥を潤し床は身を潤すと云ふから、髪結床の隙には、奥の用を足して水でも汲むがいい。」留「きつい御世話サ。閔子騫めェ。」孔「なんだ閔子騫だア。黄白には富みたいものだナ。汝が輩ま

で、おれを安んじをる。ハテ殘念閔子騫。」　留「オツト先づ一つ閔子騫。」　三人「ハヽヽヽヽ」

【參考】「月代」は、額から頭の中央へかけて髮を剃る當時の男の髮風。「素讀指南」は漢籍の讀方教授。「社盟」は同門生。「殘念閔子騫」は孔子の弟子の顏淵・閔子騫をもぢつた洒落。「先生さん」は、先生とばかりでは無禮に聞えると思つて、斯く云ふと、原文に說明してある。「家鹿」は、本草釋名に「嶺南人謂鼠爲家鹿。」と云ふ。「來やした」は、「來ました」の方言。「表德」は、表德の號、即ち異名の意。「べらぼうめ」は、罵る時の詞、一轉すればベランメーとなる。「逐鼠丸」は、酉陽雜俎に「王肅以銅爲逐鼠丸」とあり、留吉は果して又これを京傳の讀書丸と誤る。「京傳」は當時の戲作者で、三馬らの先輩。「いけぞんぜえ」は物事を粗略にすること。「いけ」は惡み强める意味の接頭語。「ぞんぜえ」は「ぞんざい」の訛り。「箒千里、惟留が掃かざる所は、大學の「詩曰、邦畿千里、惟民所止」の洒落。「留は奧を潤し、床は身を潤す」は、

同じく大學の「富潤屋、德潤身」の洒落。「黄白」は金銀のこと。「安んじ」は輕んじの意。

□富士川の夜逃

これは、平家物語から抄出した。治承四年源頼朝が伊豆に旗擧げをしたので、平清盛の嫡孫維盛が大將軍となり、三萬餘騎を率ゐて東征し、源氏の軍廿萬騎と富士川に對陣したが、安逸に馴れた平家方は、もろくも水鳥の羽音に驚いて夜逃をすると云ふ腑甲斐ない戰の話が、この一節である。

さる程に、十月廿四日の卯の刻に、富士川にて源平の矢合せとぞ定めける。廿三日の夜に入りて、平家の兵ども、源氏の陣を見渡せば、伊豆・駿河の人民百姓ら、軍に恐れて、或は野に入り山に隱れ、或は船に取り乘つて、海河にうかびたるが、營

の火の見えけるを、あなおびたゞしと、源氏の陣の遠火の多さよ、實にも野も山も海も河も、皆武者にてありけり、如何にせんとぞ呆れける。　その夜の夜半ばかり、富士の沼に幾らもありける水鳥どもが、何にかは驚きたりけん、一度にはつと立ちける羽音の、いかづち大風などのやうに聞えければ、平家の兵ども「あはや、源氏の大勢の向うたるは、昨日齋藤別當が申しつるやうに、甲斐・信濃の源氏等、富士の裾より搦手へやまはり候らん。　敵何十萬騎かあるらん、取りこめられては叶ふまじ。　こゝをば落ちて、尾張川・墨股を防げや。」とて、取る物も取りあへず、我先に我先にとぞ落ち行きける。　餘りにあわて騒いで、弓取る者は矢を知らず、矢取る者は弓を知らず、我が馬には人乘り、人の馬には我乘り、繋いだる馬

に乘つて馳すれば、杭をめぐること限りなし。或は首蹴割られ、或は腰踏み折られて、喚き叫ぶこと夥し。同じき廿四日の卯の刻に、源氏廿萬騎富士川に押し寄せて、天も響き大地もゆるぐばかりに、鬨をぞ三箇度つくりける。平家の方には鎭り返つて音もせず。人を入れて見せければ、「皆落ちて候。」と申す。

【參考】「卯の刻」は午前の六時頃。「はつと」はバットに同じ。「齋藤別當」の名は實盛。「搦手」は、城塞又は陣營の後門。「尾張川」は木曾川の古名。「墨股」は、美濃の長良川の下流で、岐阜と大垣との間。「鬨をつくる」は、ときの聲をあげること。

□元曆の大地震

これは、方丈記の一節である。方丈說は、鴨長明が山城の日野山に隱遁

して記した隨筆で、諸行無常を感じ、名聞利達を厭ひ、自然を友とするの樂しみを說いてある。方丈記の名は、その草庵の「廣さは方丈」といふに因る。

元暦二年のころ、おほなゐふること侍りき。そのさま世の常ならず。山くづれて川をうづみ、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水わきあがり、巖われて谷にまろび入り、汀ごく舟は浪にたゞよひ、道ゆく駒は足の立ちどをまどはせり。いはんや都のほとりには、在々所々堂舍廟塔、一つとして全からず。或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ちあがりて、盛なる煙のごとし。地のふるひ家のやぶるゝ音、いかづちに異ならず。家の中に居れば、忽にうちひしげなむとす。走りいづれば、また地われさく。羽なければ空へもあ

がるべからず。龍ならねば雲にのぼらむこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。

その中に、ある武夫のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家をつくり、はかなげなる跡無し事をして遊び侍りしが、にはかに崩れうづめられて、跡方なく平にうちひさがれて、二つの目など、一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲も惜しまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれに哀しく見侍りしか。子のかなしみには、猛き者も恥をわすれけりと覺えて、いとほしく理りかなとぞ見侍りし。

斯くおびたゞしくふる事は、しばしにて止みにしかども、そ

のなごりしば〳〵絶えず。世の常におどろくほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大方そのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種の中に水・火・風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。むかし齋衡の比かとよ、おほなゐふりて、東大寺の佛のみぐし落ちなどして、いみじき事など侍りけれど、猶このたびには如かずとぞ。すなはち人皆あぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁りもうすらぐかと見えしほどに、月日かさなり、年越えしかば、後は、言の葉にかけて云ひいづる人だに無し。

【參考】「元暦二年」の七月九日の午の刻。「なゐ」は地震の古語。「立ちど」は

立所。「在々所々」はあちこち。「たふれたる間」は、倒れたのでの意。「うちひしげなむとす」は、打挫かれんとすの意。「築地のおほひ」は、土塀の屋根。「はかなげなる跡無し事」は、はかない遊戯。「いとほしく」は氣の毒にの意。「理りかな」は尤の事よの意。「そのなごり」は餘震。「一日まぜ」は一日はさみ。「四大種」は、佛經にいふ地水火風の四大元素。「齋衡」は文徳帝の年號。「みぐし」は御頭。「心の濁り」は種々の慾情のために心のにごること。

□仁和寺の法師

これは、徒然草の一節である。徒然草は、兼好法師が生前閑居の中に書きやつて有つた隨筆を、歿後に取りまとめたもので、世間出世間にわたつて事實と評論とを書き載せてある。その開卷第一の文によつて徒然草と名づけたのである。

仁和寺の法師、童の法師にならむとする名殘とて、おの〳〵

あそぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて、頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏をさし入れて、舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限りなし。しばしかなでて後、ぬかむとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて、血たり、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うちわらむとすれど、たやすくわれず、響きて堪へがたかりければ、かなはで、すべき樣なくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きける。道すがら、人のあやしみ見ること限りなし。醫師のもとにさし入りて、むかひ居たらむ有樣、さこそ異樣なりけめ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞

えず。「かゝる事は、文にも見えず、傳へたる教へも無し。」といへば、また仁和寺にかへりて親しき者、老いたる母など、枕上により居て、泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。かかる程に、或者の云ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりは、などか生きざらむ。たゞ力をたてゝ引きたまへ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、金をへだてて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺け穿げながら、拔けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

【參考】「仁和寺」は、山城の葛野郡にある眞言宗の名刹で、俗に御室といふ。「足鼎」は、三足あるかなへて、食物を煮る器。「かなてて」は、舞を奏しての意。「異樣」は變なさま。「くゞもり聲」は分らぬ物言ひ。「などか生きざらむ」は、何とて助からぬ事があらうの意。

□鶯宿梅

これは、大鏡の一節で、村上天皇の御代の甚だ物優しい話として傳はつてゐる。

天暦の御時に、清涼殿の御前の梅の木の枯れたりしかば、もとめさせ給ひしに、某のぬしの藏人にていますかりし時うけたまはりて、「若き者ど」もはえ見知らじ。きんぢもとめよ。」とのたまひしかば、一京罷りありきしかども侍らざりしに、西の京のそこ〳〵なる家に、色濃く咲きたる木の樣態美しきが侍りしを掘りとりしかば、家あるじの「木にこれ結ひつけ候ひて、もて參れ。」といはせ給ひしかば、あるやうはこそとて、もて參りて候ひしを、「何ぞ」とて御覽じければ、女の手に

て書き侍りける、

勅なればいとも畏し鶯の

宿はと問はゞいかゞこたへむ

とありけるに、あやしく思し召されて、「何者の家ぞ」と尋ねさせ給ひければ、貫之のぬしのみむすめの住む所なりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな。」とて、あまえおはしましけり。

【參考】「藏人」は、天子の御前に奉仕する官職。「いますかりし時」は、居らせられた時の意。「きんぢ」は汝。「西の京」は、古の平安京の朱雀大路から西部をいふ。今の京都の大部分は、平安京の東の京にあたる。「樣態」はなりふり。「あるやうはこそ」は、仔細があらうの意。「貫之」は紀氏で、中古に國文を興した恩人。「遺恨のわざ」は殘念な事。「あまえ」は後悔の意。

□芳流閣上の搭闘

これは里見八犬傳の一節である。八犬傳は、江戸の瀧澤馬琴が南總の里見氏の八犬士を構へ、それが、足利氏の時に里見氏の復興をたすけた事を叙した歴史小説である。儒教の八德、仁義禮智、忠信孝悌を、犬江親兵衛仁・犬川莊助義任・犬村大角禮儀・犬阪毛野胤智・犬山道節忠與・犬飼現八信道・犬塚信乃戌孝・犬田小文吾悌順の八犬士に配し、勸善懲惡を旨としてある。この一節は、信乃が村雨丸の寶刀を古河の足利成氏公に獻じに參り、圖らずも現八と搭闘に及んだ所である。

さる程に犬塚信乃は、侮りがたき現八が、武藝に敵を得たりけり、と思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音懸聲、兩虎深山に挑むとき、錚然として風起り、二龍青潭に戰ふとき、沛然として雲起るも、斯くぞ有るべき。

春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹か、と視る計りなる、いと高閣の棟にして、死を爭ひし體たらく、世に未曾有の晴業なれば、現八は着込の鎌、肱盾の端を裏搔くまでに、切り裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて撓まず去らず、疊みかけて擊つ太刀を、現八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと懸けたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鍔際より、折れて遙かに飛び失せつ。現八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に引きつけて、迭に利腕しかと拿り、捩ぢ倒さんと曳聲合して、もみつもまるゝ力足、此彼齊しく踏み辷らして、河邊の方へころ〳〵と、身をまろばせし覆車の米苞、坂より

落すに異ならず。高低險しき棧閣に、削り成したる甍の勢、止るべくもあらざめれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、うち累りつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙纜丁と張り斷つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出されつ。しかも追風と引潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。

【參考】「芳流閣」は、足利底氏公の城廓內に在り、要害の物見の爲に建てられた三層の樓閣。八犬傳に「外濠は渺々たる大河にして、流れを閣の下に引きたる、水際に早船をつなぎたり。」とは世に坂東太郎と稱へて、八州第一番の大河たり」とある。「犬塚信乃」は、父の番作が鎌倉の足利家から預つてゐた村雨丸の寶刀を、惡者にすりかへられた事を知らず、古河へ持參したのは、贋の村雨丸て有つたので、敵の廻し者と誤解されて、捕

縛の仰せが下り、そこで芳流閣の屋の棟で、犬飼現八と格闘に及び、組討の果は閣の下の早船に落ちて、兩勇士共に下總の行徳へ流れ行き、犬田小文吾の父に助けられて、互に身の上を語り合つて兄弟の義を結ぶことになる。「十手」は、鐵の短い棒の中程に鉤のあるもので、犯罪者を捕へる時に之を以て打つ道具である。「曳聲」は「えい」と云ふ掛けごゑ。「やつと懸け」「はたと打つ」「丁と受け留む」「ころ〳〵と身をまろばす」「どうと落つ」「さんぶと音す」「丁と張り斷る」などには、擬聲又は擬態の語を用ゐてある。

□扇の的

これは、平家物語から抄出した、那須與一宗高が功名の事の一節である。元暦二年の春、屋島において海には平家、陸には源氏が對戰したが、勝負のまだ決せぬ二月十八日の夕方に、沖に一艘の小船が現れた。それは、玉蟲の前が美裝して、紅の扇を舷にはさみ立てゝ、源氏に何か註文して

ゐるのである。大將義經は後藤兵衞實基を召して、敵の計略を聞き、實基が推擧により、二十計りの若武者那須與一に、彼の扇を射よと命ぜられる。與一は大事を取つて、他の手利の人へと辭退したが、中々許しが無い。そこで御請けをして、太つた黑馬に金覆輪の鞍を置き、身には萌黃をどしの鎧着て、滋籐の弓を脇にはさみ、手綱かいくつて汀へ向ひ、少し海中に打入つた。扇との間は猶七八町程も有つた。

比は二月十八日酉の刻ばかりの事なるに、折ふし北風はげしう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。船はゆりあげゆりすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家船一面にならべて見物す。陸には源氏くつばみをならべて之を見る。いづれも〳〵晴ならずと云ふことなし。與一目をふさいで「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の

眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さむと思しめさば、此の矢はづさせ給ふな。」と心の中に祈念して目を見ひらいたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與一鏑を取つてつがひ、よつぴいて、ひやうと放つ。小兵と云ふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦ひゞくほどに長鳴して、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家舷をたゝいて感じたり、陸には源氏籠をたゝいて

どよめきけり。

【參考】「酉の刻」は午後六時頃。「串」は、扇をはさんで立てた棒をいふ。「くつばみ」は馬のくつわ。「南無」は、佛に祈る時冒頭に用ゐる語、當時は神佛混合で、神に向つても「南無八幡大菩薩」と稱へたのである。「我が國」は、與一の生國下野をいふ。「那須の湯泉大明神」は、與一が故郷の鎮守の神。「たばせ給へ」は「たまはせ給へ」の轉。「鏑」は、かぶら矢の略、木にて蕪の根の如き形に作り、中を空にし、三つの孔があり、かりまたを附けて射る矢であるから、空を通る時に響き鳴る。「よつぴいて」は「能く引いて」の轉。「ひやう」は矢の響き。「十二束三ぶせ」は、矢の長さが手十二つかみと指三本あること。「ひいふつ」は、矢があたり、串から扇がとび離れる時の擬聲の語。「皆紅」は、全部紅色であること、熟語であるから「皆、紅」と讀むは誤。

□最期の參内

これは、太平記からの抄出である。正平二年吉野勢との兩度の合戰に、

京勢大いに敗れたので、尊氏驚いて、高師直・師泰兄弟を兩大將とし、都合九萬餘の大軍を南下させた。この危急の時に當り、楠木正行らは深く決する所あつて、吉野の皇居に參内したのである。

京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參し、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成疵弱の身を以て、大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す處、かねて思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊河にして討死仕り候ひ訖んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴なはで、河内へ歸し、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に即け進らせ

よ。』と申し置きて死して候。然るに正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き、合戰仕り候はずば、且は亡父の申しし遺言に違ひ、且は武略のいふ甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習ひにて、病に犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間今度師直・師泰に懸け合ひ、身命を盡くし合戰仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らんために、參内仕つて候」と申しも敢へず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡らされける。

主上即ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨有つて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵今勢を盡くして向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする處なれば、今度の合戰手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけ、兎角の勅答に及ばず、たゞ是を最期の參内なりと思ひ定めて退出す。正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞・同紀六左衞門子息二人・野

田四郎子息二人・楠木將監・西河子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば、討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、おの〳〵名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

「返らじとかぬて思へば梓弓、
　なき數にゐる名をぞ留むる。」

と一首の歌を書き留め、逆修のためと思しくて、おの〳〵鬢髮を切つて佛殿に投げ入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へとぞ向ひける。

【參考】「雲霞の如く」は夥く群るたとへ。「淀・八幡」は共に山城の内。「尪弱」は虚弱。「先朝の宸襟」は後醍醐帝の大御心。「逆臣」は尊氏をさす。「我と

手を碎く」は自ら努力する意。「有待の身」は凡夫の身の意、法華經科註に「初心有待」とある。「戰の雌雄」は勝敗。「君の龍顏」は陛下の御尊顏の意。「傳奏」は武家の奏聞を取次ぐ職。「直衣」は四位以上の制服。「主上」は後村上帝。「南殿」は皇居の正殿である紫宸殿の別名。「玉顏」云々は、御機嫌うるはしく諸士に拜謁仰付けられたこと。「叡慮」云々は、大御心に憤りを休めたまふこと。「累代」は代々。「神妙」は奇特。「手を下す」は手をひかへる。「股肱とす」は手足と賴む。「兎角の勅答に及ばず」は、とやかくと何も奉答申し上げず。「先皇の御廟」は、後醍醐帝の塔尾（たふのを）の御陵で、如意輪堂の上にある。「如意輪堂」は、如意輪觀世音を安置し、その本堂に後醍醐帝の御影を奉安してある。「過去帳に書き連ね」は、亡者の名簿として書き並べること。「返らじと」の歌は、一度はなてば再び歸らぬ弓矢の如く、我等も再び歸らぬ覺悟ゆゑ、亡者の數に入る（梓弓を射る）と同音の緣語名を此の壁板に留め置くとの意。「逆修」は、生前に逆め（あらかじ）死後の冥福を祈ること。「敵陣」云々は、四條畷の決戰に赴くを云ふ。

□人臣の道

これは、神皇正統記の後醍醐天皇記の一節である。神皇正統記は、北畠親房卿が戰亂の中に筆を執つて、皇祖建國の旨を明かにし、皇統の正しくあるべき事を記して、常陸から遙かに吉野へ献ぜられた書である。

神代から書き起して後村上天皇記に筆を止めてある。

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡を愍びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。況てさせる功無くして過分の望を致すこと、みづから危むるはしなれど、前車の轍を見ることは、誠に有り難きならひなりけんかし。

中古までは、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を亡し、家を失ふためし有れば、戒めらるゝも理りなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべしといふ制符度々ありき。源平久しく武を執りて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。この比の諺には、一度軍にかけあひ、或は家の子郎從節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては日本國を賜へ。もしは半國を賜はりても足るべからず。」など申すめる。誠にさまで思ふ事はあらじなれど、

やがて是より亂るゝはしともなり、朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。

「言語は君子の樞機なり」といへり。白地にも君を蔑にし、人に驕ることは有るべからぬ事にこそ。「堅き氷は、霜をふむより至る」ならひなれば、亂臣賊子といふ者は、そのはじめ心言葉を愼まざるより出で來るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改まるにもあらじ。人の心の惡しくなり行くを末世と云へるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、その水をだにきたながりて渡らず。その人の五臟六腑のかはるにはあらじ。能く思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心思ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべき事をば、などかへりみざらん。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて、限なき人に分たせ給はん事は、推しても量り奉るべし。一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつと云ふとも、日本は五百九十四郡こそあれ。五百九十四人は喜ぶとも、千萬人の人は喜ばじ。況や日本の半ばを志し、みなながら望まば、帝王は何處をしらせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを、謀叛の始といふべきなり。昔の將門は、比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝる類ひにや侍りけん。（中略）

漢の高祖の天下を取りしは、蕭何・張良・韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は、高祖の師として、「籌を帷帳の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するは、この人なり。」と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留と云ひて、少きなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。

文治の比にや、頼朝、奥の泰衡を追討しに、みづから向ふ事ありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて極めて少き所を望み賜はりけるとぞ。これは、人に廣く賞をも行はしめんがためにや、賢かりけるをのこにこそ。また直實と

いひける者に、一所を與へ給ふ下文に「日本第一の剛の者なり。」と書きて賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるに、「褒美の詞の甚しさに、與へたる所の少さ。誠に名を重くして利を輕くしける、いみじき事」と、口々に褒めあへりけり。

【參考】「その跡を愍ぶ」は、有功者の子孫になさけをかけること。「きほひ爭ふ」は、賞功の競爭の意。「みづから危ひるはし」は、自ら危くする端緒。「前車の轍を見る」は、前車の覆へつた轍を見て後車の戒とするの意。「制符」は禁令。「宣旨」は朝命。「召し具す」は召しつれる。「かたらはるゝやから」は、源平の徒黨に引入れられる輩の意。「家の子」は一門の子弟。「郎從」は家來共。「半國」は日本の半分の意。「言語は君子の樞機」は、易經に「言行君子之樞機、樞機之發榮辱之主也」とあるを引く。「自地にも」は、かりそめにもの意。「堅氷」の譬は、易經に「履霜堅氷至」とあるを引く。「許由」と「巢

父」とは、帝堯の時の廉潔な隱士。「潁川」は、支那の安徽省の川の名。「その人五臟六腑」云々は、許由が耳を洗ひ、巢父がその水をきたながつたのは、腹の中が別にかはるわけではあるまい、たゞ精神に潔しとしなかつた爲であらうの意。「萬姓」は萬民。「日本の國郡の數」は、時代によつて沿革がある。「張良」云々は、高祖の「運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如子房」の語を引く。「帷帳」は、帷幄に同じく、作戰を計畫する陣所。「文治の比」云々は、文治五年頼朝がみづから奥州の藤原泰衡を討つて之を平げたこと。「平重忠」は畠山重忠。「長岡の郡」は、今の陸前の遠田郡等に廢合されてゐる。「直實」は熊谷直實。「下文」は、鎌倉幕府の政所から所領を與へる時に下す書付。

（國文抄終）

國文朗讀法參考

國文朗讀法の參考として、その本文に就いて原據・說明・註釋・補足などを此に記す。 鼇頭の數字は、本文の頁順と行順とを示す。

一の四 ○唐の詩人李義山が「與陶進士書」の中に「有始朗讀而中有失字壞句、不見本義者」とある。

一の六 ○爾雅には「明朗也」とあり、說文には「朗明也」とある。 康熙字典に「朗」は「朗」の本字としてある。「言語四種論」の著者鈴木氏の名に此の本字を用ゐて「あきら」と讀んである。

二の二 ○エロキューション(Elocution)といふ語は、もとエロクイ(Eloqui)即ち「言ひ出す」といふ意義のラテン語から出てゐる。

二の五 ○グラハム(W. Graham)氏は、"ELOCUTION"(能辯術)の著者。

二の七 ○フォルシス(J. Forsyth)氏は、"THE PRACTICAL ELOCUTIONIST"(實用的能辯家)の著者。

二の一一　○プラムプトル(C. J. Plumptre)氏は、"LECTURES ON ELOCUTION"(能辯術講話)の著者。

三の八　○エロキューションは、(一)Oratory(演說や談話の如きもの)と(二)Recitation(暗誦)と

五の四　(三)Reading(朗讀)との三種類に分けて見られる。

○聲明は、古代印度の學問たる五明(聲明と工巧明と醫方明と因明と內明)の隨一で、音韻や文字や語法の學に通達することを云ふ。それが佛敎に連れて、支那それから我が日本に傳はり、日本では、佛事法會等に行ふ梵唄、讚頌等をさして聲明と云つてゐる。

五の七　○兆民居士の述懷は、その著書「一年有半」に見える。

五の八　○竹本越路太夫は、實名は二見金助、大阪淨瑠璃界の泰斗と仰がれ、小松宮殿下から攝津大掾の稱號を賜はつた。大正三年七十九歲で退隱した。

六の四　○この返答は、浙江省の錢氏の書翰である。

七の七　○此處の引用語は、"THE ART OF READING"(朗讀法)の著者ライス(Rice)氏の語。

七の八

○フレミング(C. Fleming)氏は、"THE ART OF READING & SPEAKING"(朗讀及び談話の法)の著者。

七の一一

○この團十郎は、九代目市川團十郎をさす。その實名は堀越秀、明治時代の俳優の泰斗で、その藝道は同廿年四月天覽の榮を辱くした。同卅六年六十六歳で歿した。

七の一一

○遠藤武者盛遠は、誤つて貞女袈裟御前を殺し、月光に照して其の遺書を讀み、飜然大悟して僧となり、文覺と號する。

七の一二

○お園は、燈火の下で夫半七の書置を讀み、夫を怨まずして我が身を咎め、克く舅姑に孝行、夫に貞烈を盡くすの心を顯はす。

八の一

○山岡鐵舟も、三遊亭圓朝に「口で話さず、心で話せ。」と諭したと云ふ。

一〇の四

○ロック(J. Locke)は英國の哲學者、西暦一七〇四年に七十三歳で歿した。

一〇の六

○ジョンソン(B. Johnson)は英國の桂冠詩宗、西暦一六三七年に七十四歳で歿した。

一五

○國語音の標準については、ローマ字會の「ローマ字にて日本語の書き方」、文

部省圖書課の新舊假名遣對照語彙、國語調査委員會の音韻調査報告及び音韻分布圖などに據つた。

○悉曇は、梵語の Siddham の音譯で、梵語の字母の名稱である。その字母は、普通に母音字十六箇、之に父音字を加へて四十九箇としてある。五十音圖は、悉曇の順序に從つて、我が國語の古音を圖表としたものである。

○この頁の圖は、フィートル(W. Vietor)氏の "ELEMENTE DER PHONETIK" (聲音學原理)から略抄した。

○顎の開合から見た「母音三角」は、丁度この頁の圖を倒まにした「母音ピラミッド」となる。

○ハ行古音の考證は、上田(萬年)博士の「國語のため」の「P音考」に詳である。

○ホイトネー(W. D. Whitney)氏の音韻表は、その著書 "THE LIFE & GROWTH OF LANGUAGE" (言語の生命及び發達)から略抄した。

○古今集の東歌に「かひがねをさやにも見しがけゝれなく、よこほりふせるさやの中山」(甲斐歌)とある。「けゝれ」は「こゝろ」の母音轉訛。

一六の一

一七

一八

二六の七

三一の六

三三の一

三三の一以下

○ラ行音とダ行音との訛りは、鹿兒島などが殊に著しい。西郷從道侯の名は、實は「隆道」の字音訛りから來たと云ふ。

三六の一

○クヮ、グヮの分布區域は甚だ廣い故に、標準音制定上、尙考へねばなるまい。

三七の一二

○「靜岡」沼津」などを "Shidzuoka, Numadzu" の例に書くのは、舊式の綴りである。

四一の六

○こゝに母音同和の事を補つて置く。「場合」引合」工合」の如き熟語においては、母音が同和して、アがャまたはヮと響き、バャイ、ヒキャイ、グヮイの例に發音するのが、一般である。但し、斯樣に同和させない地方も有る。

四一の五

○次々の頁にも說く樣に、「逢ふ」追ふ」の如き語の發音は、地方的差異があり、且つ重母音の定義にも異論があるが、此には二母音の連續發音をいふ。

四五の九

○二つの母音が一つの短音に變つたのもある。例へば「高市」(Taka+ichi)がタケチ(Takechi)となり「靱負」(Yugi+oi)がユゲイ(Yugei)となるが如きである。尤も「負」は、父音が脫落してオイとなつてゐる。更にユゲイは、終の二つの母音が一つの長母音となり、ユゲーと發音するのである。

四六の一二以下

○この字音假名遣一覽表は、漢音吳音共に擧げてある。例へば「業」納」を「ごふ」

四八の八　なふ」とよむのは呉音で「げふ」「だふ」とよむのは漢音。

五一の四　○八行目の次に「ひう(彪)びう(謬)」の字音を脱した。その發音はヒュー、ビュー。

五二の一　○「うけう」(將受)は上方語。東京語では之を「うけよう」と云ふ。

○「食ふ」「吸ふ」「震ふ」の如きハ行四段活用動詞の終止形や連體形を、クウ、スウ、フルウの例に發音する所もあるが、最も廣くはクー、スー、フルーと長音の例に發音する。

五二の二　○「ちうせい」は、枕草子に、大進生昌が「姫宮のおまへの物は、例のやうにては、にくげに候はん。ちうせいをしき、ちうせいたかつきにてこそ、よく候はめ。」と申したとある語を採る。

五二の八　○「葵」「煽る」「仰ぐ」「倒る」は、アオイ、アオル、アオグ、タオルと發音する。

五三の八　○謠曲「安宅」に「それ山伏といつば、役の優婆塞の行義を受け」云々とあり、その假名も發音に從つてある。

五四の三と四　○「逢ふ」「買ふ」「掃ふ」などを、オー、コー、ハロー、または、オオ、コオ、ハロオなどの例に發音する地方もあるが、最も廣くはアウ、カウ、ハラウの例に發音する。但し口語

五四の三と四

○「追ふ」「乞ふ」「捨ふ」などを、オー、コー、ヒロー、または、オオ、コオ、ヒロオなどの例に發音する地方もあるが、最も廣くはオウ、コウ、ヒロウの例に發音する。（但し口語）

五四の五

○アクセントが地方によつて違つてゐるので、同じ小學讀本で東京語の口語文を讀むにも、そのアクセントは大概は地方のを用ゐてゐる。標準語におけるアクセントの統一は、望ましい事では有るが、甚だ容易ならぬ事である。音韻及びアクセントの地方的特色は、後々までも殘るものである。

五五の八

○「紫」の東京語アクセントは、「國定小學讀本正讀法」の音勢研究に據る。

五八の九

○勸學院は、藤原氏の子弟のため、冬嗣公が京都三條の北に創立した學校。

六五の九

○「立ち別れ往ぬ」と「因幡の山」と掛詞。「峰に生ふる松」と「待つ」とし聞かば」と掛詞。

六五の一一

○「すみぞめの袖」を「うき世の民に覆ふかな」の意。「わが立つ袖に住み」と「墨染」と掛詞。「わが立つ袖」は、傳教大師の歌に因つて比叡山延暦寺をさす。

六七の一一

○「又參じませう」の註解は、土佐日記俚諺解などに見ゆ。

七二の四

○「ありまげんばさん」は、有馬玄蕃頭（げんばのかみ）（舊越前丸岡藩主）

七四の一〇　○一ペックは、斗量の名、我が五升程。

七五の六以下　○官話は、北京語を整へた支那の一標準語。傍書の假名發音は精密でない。

七五の七　○「洞庭」は、湖南省にある支那第一の大湖で、中に島山が多い。

七六の四　○蘇州は、江蘇省にある支那の開港場で、上海を距る廿八里。元妙觀は寺觀の名稱。

八〇の九　○「忠臣は必ず孝子の門に出づ」は、千字文註の語。

八四の六　○休止時間の事は、サンダース(C. W. Sanders)氏の著書"UNION FOURTH READER"(ユニオン第四讀本)に據る。但し、一說には、コンマは一、セミコロンは二、コロンは三、ピリオドは四を數へる間休止するが宜いと云ふ。

八五の二　○エンファシス(Emphasis)は「語勢」などと譯してある。

九〇の七　○ルビコン(Rubicon)河は、アペニン山脈の東側を流れてアドリヤ海に注ぐ小河。ケーザルが此に停つて熟慮し、遂にポンペーウスの討滅を決心して渡河した所。「ルビコン河を渡る」は、決心斷行の意味に用ゐられる。

九四の二　○「につくしにくし」は反覆の語、速度が加はつて、上は長く下は短く言ふ。

九四の一一

九七の一二

一〇〇の一

一〇七の三

○安倍宗任が歌は、平家物語劍の卷に見え「是は如何に」と尋ねた大宮人の侮りに答へたもの。

○調子について特に參酌した書物は、ミラード(J. Millard)氏の "GRAMMER OF ELOCUTION" (能辯術語典)や、レーモンド(G. L. Raymond)氏の "THE ORATOR'S MANUAL" (能辯家要覽)など。

○高音部の最下音と低音部の最上音と相接し、兩部に一音階の差がある。

○調子の變化について注意すべき事は、Stress(ストレス)即ち聲の强め方である。レーモンド氏は、之を左の六種に分けてある。

一、頭部の强め(∨符)

壯烈や上機嫌や叱責や慷慨や報復の如き心情の文句。

二、末部の强め(∧符)

愁嘆や不平や、懺悔や熱誠や確信の如き心情の文句。

三、中部の强め(∧∨符)

莊重や滿足や壯美や優美の如き心情の文句。

四、複雜の强め（X符）
疑惑や嘲笑の如き心情の文句。
五、全部の强め（‖符）
勝喜びや激怒の如き心情の文句。
六、顫動の强め（〜符）
畏懼や悲哀の如き心情の文句。

○竹本播磨掾は、二代目義太夫の稱、淨瑠璃中興の祖と呼ばれ、延享元年五十四歳で歿した。

○詞品とは、美辭學において、文章修飾の方法をいふ。「樂し」といふ直說法を、「極樂のやうだ」の直喩法、「極樂だ」の暗喩法、「樂し樂し」の反覆法、「樂しいぢや無いか」の設問法、「あゝ樂し」の感歎法など、樣々の詞品に變ぜられる。詞品は詞姿とも詞藻とも云ふ。詞品の事は、五十嵐力氏の新文章講話などに詳である。

○「露岡寺」は「露置く」と「岡寺」との掛詞。岡寺は大和の高市郡高市村にある。

○文中で、前後より緩かに讀む所は、緊要又は格段の意味を示し、又前後より

一〇七の一
一〇九の一
一一〇の一

一一三の一以下
一一四の一と二
一一五の三
一一九の一と一二
同じく
同じく
同じく
一二〇の四

速く讀む所は、熟知又は反覆、當然の結果、輕き意味を示す。

○「御は文字樣で」は「お恥づかしう」「少しは」は「可なり」の意味。

○栗子山は、山城の久世郡にある。宇治橋より坤十五町許り。

○疑問の豆爾乎波「か」を單用する疑問は、必ずしも昇調を用ゐるに及ばぬ。

○聽き取りが不確かで、之を聽き返す時は、疑問代名詞を使つても昇調。例へば「何時御歸りの筈ですか。」「來月。」「何時とおつしやつたか。」「來月。」

○返答は大概は降調となる。但し、無頓着又は厭味を表はす返答は昇調。例へば「どちらを御好みか。」「どちらも好みません。」

○昇降のちがひで、問の意味がちがふ場合がある。例へば「御歸りは明日か明後日か。」「明後日です。」は兩岐の問答である。但し「御歸りは明日か明後日か。」「ハイ。」(兩日中の意)は單純の問答である。

○伊勢物語に、在原業平が隅田川に來た時に「白き鳥の嘴と足と赤き、鷗の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、これなん都鳥といふを聞きて、京の妻子の安否を思

ひ、この歌を詠んだとある。

○「佐渡は四十九里波の上」とは、能登の俚謠だと云ふ。　一二一の一

○二つの名言の中、前のは誰の語か分らない、後のはフレミング(C. Fleming)氏の語である。　一二三の五と六

○ベーンハム(G. W. Baynham)氏は、"ELOCUTION"(能辯術)の著者。　一二三の一

○マイクルジョン(J. M. D. Meikiejohn)氏は、"EXPRESSIVE READING"(表情朗讀法)の著者。　一二六の一

○サウジ(R. Southey)氏は、英國の桂冠詩宗、西暦一八四三年七十歳で歿した。　一二六の一

「ロドーアの瀧」の詩は、前條の著書に載せてある。この瀧は、英國カムバーランド州ケスウイック町の南三哩にある。　一三六の六

○聲變りの始るのに、早い者も晩い者もあり、その經過時期に、長い者も短い者もある。「十六歳前後」とは、大略をいふのである。　一三八の六

○諳誦は、英語にいはゆるレシテーション(Recitation)である。　一三九の六

○ウォーカー(J. Walker)氏は、"ELEMENTS OF ELOCUTION"(朗讀法原理)の著者。

一四四の七

一四六の一二

一四九と一五〇

一五一の九

一五二の七

○土山は近江の甲賀郡にあり、伊勢に近い。闌更の句に「土山や歌にもうたふ歌しぐれ。」「伊勢は照る照る」は「坂は照る照る」と云ふべきか。

○田村虎藏氏曰く、語物には、朗讀に節が從として加はり、謠物には、語物に於けるよりも更に節が大切となつて、意義が從となり、純音樂に至つては、音ばかりの節となると。

○「對讀」は、對話文を朗讀し、「英語通譯」は、一人は英文を一段づつ諳誦し、一人は之を國語に譯するのである。勿論、雙方とも豫習をしておく。「討論」も、豫め受持教師が上級生を指導して部署を定めておく。

○事文類聚に、魏の董遇が、讀書の日無きを苦しむと云ふ者に、三餘の讀書を諭したと有る。「遇言、當以三餘。或問三餘之意。答曰、冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘。」蘇東坡が曰く「此生有味在三餘。」

○吉田松陰の士規七則に曰く、「讀書尙友、君子之事也。」

國文朗讀法 終

おくがき

これまでの我が國語の教授及び學習は、とかく文字に偏つて、言葉の練磨が足りないと信じます。これは改良すべき事と、常々心がけて居ます。顧みれば明治卅九年八月、岐阜縣小學校教員夏期講習會が開かれた時に、私は其の國語の講師を囑托されて、飛驒の高山町と美濃の御嵩町とで、各〻十二日づつ講話を發しました。その講話の中に國文朗讀法の事を說きました、その下書が、この書物の草案となつたのでございます。その後、その草案に書き加へをしては居ましたが、まだ十分でないものを發表するのは、不本意と思ひ、此の方面に良著の出るのを待つて居ました。嘗て「教育教究」理想號の出た時にも、朗讀法の研究を希望して置いたのでございます。然るに追々と年月が過ぎ去るについて、只待つばかりでは如何かと考へ、聊か「隗より始めよ」の心を以て、敢て拙著を公にする事と致しました。どうぞ讀者諸彥が、微意のある所を御察し下さつて、取るべきは取り、正すべきは正し、以て國語を發達させて下されるなれば、誠に仕合せに存じます。

著者申す。

大正三年十月十四日印刷
大正三年十月十八日發行

國文朗讀法
定價金八拾錢

不許複製

著作者　日下部重太郎
發行者　東京市麹町區平河町四丁目十三番地　土屋泰次郎
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場　青柳十一郎
發行所　東京市麹町區麹町二丁目五番地　丁未出版社
（振替口座東京七八四七番）

不許複製